川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和六十三年十月二十五日　印刷
昭和六十三年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七三八号

日川協加盟

川村好郎追悼号

No.738

十一月号

麻生路郎生誕百年記念
川柳塔作品・資料展

日時　昭和63年11月15日（火）から20日（日）まで
午前11時30分　午後7時30分

会場　ソニーサロン
大阪市南区心斎橋筋一―四七
ソニータワー九階電話〇六（二五一）二三九一

数々の話題を提供しているソニータワーのソニーサロンは、心斎橋の〝話題の泉〟であり、ヤングの集うファッショナブルな会場です。
このたび川柳塔社では、この魅力あるソニータワーで川柳のコミュニケーションをアピールすべく、作品と資料展を開催します。
絶大なご支援とご協力をお願いします。

主催　川柳塔社

昭和63年度　大阪文化祭
第40回　川柳大会

日時　昭和63年11月12日（土）
午前11時開場　午後1時締切

会場　大阪市中央公会堂（中集会室）
地下鉄・京阪電車「淀屋橋」下車

兼題
「縁」　前田芙巳代選
「器」　小出智子選
「人間」　志水浩一郎選
「時事雑詠」　広瀬反骨選
「水」　渡部白洋選
「列」　北川アキラ選

席題　2題当日発表・兼席題共に2句

会費　五〇〇円（作品集代を含む）

主催　大阪府・大阪市他

悼　川村好郎氏

西尾　栞

川柳塔社相談役川村好郎氏が九月三日歿くなられて、五日に告別式がとり行われたことを、あとで聞いて洵に残念に堪えない。私は四日の西日本川柳大会に出席して、その脚で五、六日と奥津の方へ旅していたために、ようご会葬できなかったことは、かえすがえすも残念でならない。

好郎氏とのお付合は川柳雑誌からの役員付合で、ひきつづき川柳塔誌になってからは、七歳上の先輩として塔誌を支えてきた仲であった。氏は仲々の秀才で大阪市立高等商業学校（現大阪市大）出身で、故麻生路郎先生の後輩でもあった。

又、柳話は殊の外、説得力のある素晴しい話術で、或る年の西日本川柳大会の一時間半に亘る話ぶりは、聴衆を感動させたものである。その時に感銘した島根県のS氏は、来年度の島根県文化連盟の大会（太田市開催）には是非講演をと約束された程であった。流れるような話術と説得力は、氏が信仰していた金光教の布教の先生であったことによるものだと故K氏に聞かされたことがある。

なんにしても塔社柳話の最右翼の人として私達は尊敬していた。

氏は又、後輩の指導に温情と叡智を傾注して育てた数多の優秀な川柳作家が、柳界に澎湃として起っている。

又、かの有名な大萬川柳の二代目主催者として、三代目選者として活躍せられたことは、忘れられない柳界の置土産となった。

思い起せば数限りない柳界の功労者であったことは惜しみても余りあるが、昭和五十四年十一月に喜寿を自祝して「遍歴」という句集を発刊され、その記念句会に出席者一同に贈呈されたことは美しいことであった。

氏は常に、

試作品として長男に生まれ

という自句を唱しては、梟梁に皺をよせて、笑われた顔を、今でもありありと思い出すことができる。

謹んでご冥福を祈る。

お浄土へ一筋道の秋の風　　栞

合　掌

座右の句

飲んで欲しやめてもほしい酒をつぎ　（葭乃）

私の句

おとぼけでいざこざ救う年の功　冨岡温子

川柳塔　十一月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

悼　川村好郎氏……西尾栞……(1)
中国の旅終る……田中正坊……(2)
川柳塔（同人吟）……西尾栞選……(4)
自選集……東野大八……(31)
■川柳太平記(126)　川柳の群像　清水白柳……(34)
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（三十八丁）……黒川紫香……(36)
水煙抄……榎本吐来……(38)
秀句鑑賞「同人吟……福本英子……(56)
　　水煙抄……橘高薫風選……(66)
愛染帖……八木千代選……(57)
〈女性コーナー〉苗香の花……(60)
句評リレー　水粉千翁・波多野五楽庵・久家代仕男・阿萬萬的……(67)
川村好郎氏を悼む……(62)
限りなき遍歴・高杉鬼遊／62　好郎先生の思い出・谷垣史好／63

中国の旅終る

田中正坊

九月二十三日、川柳塔社訪中団一行を乗せた日航機が上海から大阪空港に到着した時、楽しいツアーから帰ったというよりも、何か一つの仕事を終えたような気分になった。今回の北京—洛陽—西安—上海吟行の旅で、いささか荷が重いピンチヒッターの団長役を務めたこともあるが、昭和五十九年から始まった中国旅行が隔年ごとに実施され、今回でシリーズを完結した思いがしたからである。

まず第一回は、西尾栞主幹を団長として二十三人が上海—蘇州—桂林に遊び、第二回は橘高薫風副主幹を団長とする二十一人が北京—万里の長城—大同を回って、各地の風光と文物にふれるとともに、中国の人たちとの交流を深めた。そして本誌には、東野大八先生による現地の事前紹介が行われ、訪中団員の旅行吟と紀行文が紙面を飾った。

ところで、中国の旅行関係者が投票で選んだ「中国十大風景名勝」という観光地ベストテンがある。第一位は万里の長城、つづいて桂林の山水、杭州の西湖、北京の故宮、蘇州の園林、安徽の黄山、長江の三峡、台湾の日

好郎先生の晩年・藤井一二三／64　「どんぐり句会」の思い出・笠原吸江／64
追悼・児島与呂志／65　好郎先生を悼む・宮西弥生／65
言いまわしの個性（五）複合語の活用……竹内紫錆……（70）
■句集鑑賞　永田俊子句集「鶴の瞑想」……有働芳仙……（73）
中国吟行の旅―北京・洛陽・西安・上海……（74）
春城武庫坊／渡辺圭坊／飯西ミサヲ／天正千梢／奥田みつ子
秋元てる／千金良一堯・みち子／田中千代子／藤村宏子
金井文秋氏喜寿祝賀句会に参加して……西出楓楽……（79）
初歩教室……阿萬萬的……（80）
「酔　う」……藤解静風選……（82）
一路集「　幻　」……土橋はるお選……（82）
「シャツ」……中村ゆきを選……（83）
柳界展望……（84）
63年度川柳塔社同人総会……（86）
63年度二賞表彰本社十月句会……（88）
各地柳壇（佳句地10選／松本一郎）……（92）
■11月各地句会案内　107
■編集後記　109

座右の句

花の散る今日一日は物言うな　（薫風）

私の句

みな何かなやみあるらし十七字　結城君子

月潭、承徳の山荘、西安の秦陵と並ぶが、顧みると三回の吟行で、このうち五か所を訪れている。また、「六大古都」の北京・南京・西安・洛陽・杭州・開封のうち三か所、「三大石窟」は敦煌を除く二か所を見ている。あの広大な中国を、わずか三回くらいで見つくすことはできないが、どうにかポイントだけは押えられたのではないだろうか。

今回の何よりの収穫は、「国際旅遊年」のこの年に限って開放された北京の天安門城楼に登上したこと、スケジュールの変更もあって、三千年王城の地であり、日中文化交流の遺跡が多い大唐の都、長安（西安）と、長くその副都であった洛陽の歴史的文物をくまなく参観できたことであった。そして西安と友好都市である奈良市長の紹介状を持って訪れた西安市人民政府への表敬訪問では、全員が接見室に通されて市長代理の鄧友民外事弁公室主任らと懇談した。北京大学出身の"文人"で、川柳を含む日本の短詩型文学についても語り合い、これまでで最も実のある交流を実現して有終の美を飾った。

さて最終日、西安から空路で着いた上海では、雨による交通渋滞で市内に入れず、空港付近のホテルに立ち寄った。その中国風の建物に確かに見覚えがあると思ったら、何と第一回訪中で旅装を解いた西園飯店であった。

川柳塔

西尾栞選

チンゲン菜赦せよ父は二等兵　岡山県　土居耕花

なめくじの描いたグラフは雨量計

短編ですんでよかった妻の愚痴

忘却の彼方に傘やヘルメット

モナリザを見てると息が荒くなる

Uターンしたお喋りは許される　兵庫県　遠山可住

不老長寿の薬へだまされてみよう

大往生でした明治の灯が消える

お相伴したいビールを冷やしとく

八十になったと思う秋の音

豪傑という酒呑みの血が継げず

マンガでは寝られず教科書で眠る　堺市　中川滋雀

家系図の余白に預けてある余命

合鍵の重さ答がすぐ出ない

心臓に悪い返事は刷ってくる

底割った話ぐるぐる巻きにされ

頷いているが補聴器外れてる

知らぬ人ばかり待ってる駅の雨　平田市　久家代仕男

底知れぬ魅力秘めてる男の背

海猫の声が消えると海が荒れ

逃げ水の速さ木の葉が掴めない

元署長地獄耳なら持っている

長男が鬼働きで嫁がない

毒茸の素顔がブスな雨続き　松原市　玉置重人

補聴器と入れ歯が満期待っている

ある余裕平均寿命まだ遠い

ぼけたかな妻がやさしく見えてくる

陸橋でピンクタッチのビラ貰う
制服で受ける点呼は男まえ
生きがいははすにかぶったベレー帽

大阪市　西出楓楽

電車待つベンチでにんげんウオッチング
きぬかつぎへ月まっすぐに昇ってくる
過不足がなくて親しめないお方
オリンピックの時だけ増える愛国者
どうみても妻がやり手のたこやき屋
緊張をしておりますと胃の知らせ

松原市　谷垣史好

訳もなくくしゃみが続き秋となる
理不尽は声の大きな方が勝ち
賞味期間をとっくに過ぎた私だが
政治家にこんなのがいたハリネズミ
幸運はいつも股間を抜けて行き

川村好郎先生を偲ぶ

ひっそりと句集「遍歴」書架にあり

弘前市　波多野五楽庵

あれがもしかシャネルと名乗るいい匂い
歯から目に移り始めて来た神話
O型でいつもお金が足りませぬ
御不満でしょうが賢母と言われます
別々の日記を抱いていて夫婦
クレーン車をボケーと見てる昼下り

和歌山市　堀端三男

生かされる限りは開けぬ玉手箱
ところてんだと割り切り少し楽になり
鈴虫を放って庭を広くする
世渡りはほどほどに置く車間距離
男と女差し向いとは限らない
ティータイム隣の猫も来て座る

和歌山市　福本英子

戦から遠く詩よみ詩を詠む
イイ停戦夾竹桃が揺れている
応援の敵も味方も酔わす美技
皿洗いまだ役に立つ母の自負
長生きをしてネと面倒みる気なし
新婚旅行のお土産溶けたチョコレート

京都市　松川杜的

其処に亡母が居る顔の無い紙人形
冷夏逝く一人の友の訃を乗せて
追伸で拝む神鈴強く振る
童心に戻りどんぐり拾てくる
二人きりボケの話はもう止そう
敬老パス一と駅を乗る勇気

桜井市　岩本雀踊子

単身赴任男の裏が干してある
ちっぽけな火種くすぐるメロドラマ
自分を売り歩いてるチンドン屋
昼寝する夜遊び好きなうちの猫
紙風船ああ尋常一年の恋

父の顔知らずに育った終戦日　尼崎市　春城年代

愛想つかしを言うて帰ったまま来ない
ひまわりブームこの結末が気にかかる
島の灯が少し明るくなりました
嘘つきを可愛らしいと見てあげよう
止められぬ煙草で威張ることはない
サルビアの赤に中国近くなる　八尾市　高杉鬼遊

悼　川村好郎師

何処までも追いかけてゆく雲の峰
自治会の班長という溝掃除
人と人とを結びあわせる銭なのか
美しい奥さんなどとあほなこと
カレンダーに秋のいちにち婚とあり
来月になればまた会う伯耆富士　島根県　堀江正朗

盃は月のまるさか誕生日（満七十六歳）
合掌は松茸めしと妻の顔
闇無限しあわせ探す指に馴れ
繰り返す愚かそれでも心燃え
闇の中ときには見えるポーズして
膝坊主戦さ話に労られ　富田林市　藤田泰子

叱るけどあなたの真似をしてるだけ
跡取りはどの娘にしようさやえんどう
暦から消えぬ女の小豆飯
先々をおもい身軽になっておく
薔薇の棘うぬぼれるのも程々に
退院後ずっと時差呆け続いてる　和歌山市　松原寿子

誘惑の笑顔を胸に受け止める
風満ちていっきに揺れる黒髪よ
待ち合せその空間で微熱する
無言電話にわたしの部屋を侵される
にくい名を乳房へたたむ秋さなか
一冊だけ恋の白書を持っている　伊丹市　樫谷寿馬

オレンジと牛の命をすり替える
さんまを並べ臓器移植を考える
長生きをもつれた舌で見舞い合う
そう言えば紅は血糊の色である
ひまわりの女が狂い咲くミナミ
裏切ったのが散髪をして現れる　竹原市　小島蘭幸

真夜中のポストに用がある男
運動会へ今年も行けぬことになり
今日の妻を笑わせるのは難しい
髭を剃ってるとこへ長女も次女も来る
次女の机長女の机秋深まる
珈琲が四つ明るい午後がある　大阪市　西森花村

人間が見れば黒潮おどってる
喋るだけしゃべって老人未だ死なぬ
首をつるには高い大鳥居
探しものするよう帰郷してきたが
野良猫の住みよいように長屋建て
早よ寝たら損するような大三十日

米子市　林　荒介

波が消え又波が来る終の宿
仏塔の翳は許してくれている
にび色に光ってくれる神の沼
テリトリーみんな世界を持っている
電話では済まぬ話が胃に溜る
門までは奇麗に掃いて夢醒める

藤井寺市　吉岡美房

脳みそが干涸びたまま秋となる
刑務所の天平等に晴れわたる
喧嘩する相手が居ない便秘症
平日もぶらぶら出来る不幸せ
縄電車ワンマンカーとなり暮れる
横綱を産んだ両親只の人

玉野市　小谷仙山

お粗末な芸でタンポポ風に乗る
言い訳が丹念すぎてうたがわれ
割り箸の割れそこなったそばの味
蚊とんぼに生きる権利かひげがあり
まあまあと思う暮しに蟬しぐれ

老いの坂どう装うても前かがみ

松江市　舟木与根一

神さまを値踏みしている願いごと
秋茄子は嫌いな嫁と言うておく
いつまでも子どもで困るはだか銭
双子までの乳母車は売ってある
墨壺で尺貫法は生きつづけ
非常口から盗っ人も逃げていき

出雲市　園山良子

語り部のヒロシマ正座で聞く幼な
双生児母は呼び名を間違えず
冷えた夏蟬もさわりを鳴いただけ
身の上を語りそれから旅の友
おねしょ癖修学旅行近くなり
聞き耳を立てるこけしの無表情

岡山県　嘉数兆代賀

憎まれ口言った寝顔が憎まれず
人間不信猫があれから帰らない
考えておきますという処世術
思い違いの傘がいっぽん濡れている
終着駅の風がささやきかけてくる

下関市　石川侃流洞

まだ酒がうまい百までいけそうだ
助手席の妻が指図をして困る
ナツメロへ大正ロマン独り言
美しい手だけど爪がとがり過ぎ

ひとつ覚えの特技桂馬が頓死する　倉敷市　野田素身郎

開発へ蛙の轢死体が増え
外人は何を祈るか浅草寺
ペナントの行方決まって秋の風
オリンピックたかが地球の運動会
定年に合わせて定期券を買い　美禰市　安平次弘道

バカになる修行してます二度の職
人騙す言葉を聖書から借りる
袖の下に負けて傾くヤジロベー
年令欄女のペンに無視される
友情を越え生臭い風に会う　倉敷市　稲田豊作

ご無沙汰が親しげに来て市議選挙
溜息を吐くと力が抜けてゆく
月給日妻は陽気を取り戻す
親切にされて心に借りが出来
あやまちを詫びぬと闇は深くなる　倉敷市　奥谷弘朗

酔うてから阿呆の真似をして見せる
大正の妻でも近頃よく捨てる
雑魚のまま父定年で幕となり
このメダル鬼と呼ばれてやっと取れ
人間に惑い取れたら灰に成る　倉吉市　渡辺独歩

豊かさを比べ合ってる長話
尺取虫が瀬戸大橋を査察する
弱虫が夜中に火薬つめている
宿帳に軽い眩暈の名を記す
爪のびて所得隠しがしたくなる　竹原市　森井菁居

いとこ仏前結婚（一句）

紅白の鶴仏縁を嬉しがり
一点が重い男の下り坂
嵯峨菊の情緒に酔うている五十路
趣味多忙短かき秋のスケジュール
一家無事紫式部色づきぬ　柳井市　弘津柳慶

赤ちゃんが居るのにおむつ干してない
新時代へ合わせ切れない古希の坂
マイクで何か大声で通り過ぎ
休刊日かも一度寝床へ寝るとする
未練まだ残して傘の人となり　京都市　都倉求芽

戦さボケ航空ショーの平和ボケ
裃で賄路受け取る時代劇
ダイエット水着が済めば食の秋
ふるさとの坂につまずく石はなし
B面にホンネ吹き込む人生譜　松江市　恒松叮紅

ネクタイのいらぬ無職が背伸びする

猫舌でいつも落伍をしてる箸
相続権放棄をされた床の壺
秋風が吹くと気儘な旅が好き
それからはねばる話は妻任せ

松江市　柳楽鶴丸

可愛い娘ちゃんのだまし舟なら乗ろう
世界中にたった一つの僕の壺
恩賜の煙草へとどかぬ嫌煙権
禁煙はしません挑戦致します
夫婦のオリジナルカクテルでねむります

尼崎市　春城武庫坊

人間を磨く言葉が肌を刺す
終電に近づくプラット伸びてくる
痩せもせず太りもせずに妻の秋
大正の心に錆が浮きはじめ
飽食に麻痺した舌へ白湯茶漬け

浜田市　中川幸一

二人ぐらしにトイレラッシュの朝八時
長男は甚六という試作品
新聞の勝手気ままな休刊日
あれも厭これも厭だと旬が過ぎ
蜩が根よう鳴いて陽が落ちる

堺市　高橋千万子

こわい程おちついて居る勘違い
不本意に曲って胡瓜山とされ
噂から証拠探しに出向く妻
預かった孫を気ままにして返し
出来すぎた息子故郷捨てて行く

名古屋市　越村枯梢

二十年夫婦コケシも老いの影
花言葉一つ抱いて黄昏れる
才媛といわれて孤影ながく曳く
勲章はこれです妻の坐り胼胝
味気ない終いの住み家よ二ＤＫ

笠岡市　松本忠三

偶然の一致にしては出来すぎる
うれしさは昔の風習聞きに来る
賽銭になって小銭の利用価値
白髪をハイカラに染め妻の見栄
波風は多少我が家は良とする

奈良市　宮口笛生

ほんとうを言うてくれない秋の街
倖せな人で不倫の噂立て
新米がとれた日父の忌がめぐる
熱燗の沁みる胃の腑を切った腹
敬老の日老人会に籍を入れ

奈良市　天正千梢

五十年やって来て入口にさしかかり
川と遊ぶ何てすてきな事でしょう
手を抜けば納得出来ない性格で
企みはまき餌を上手に食べている
四帖半の情け酸欠にうろたえる

島根県　小砂白汀

おっちゃんと呼ばれる程に丸くなり
長い脛もてあましてる青りんご
眠ったままで歩いたこともある背骨
鈍重なやもりが走る熱帯夜
その日まで泳がすつもり池の鯉

島根県　西村早苗

渋好みおんな三十だと聞かす
禅の道聞きほれている彼岸花
補聴器に届く範囲のまつり笛
夜の蜘蛛は殺せとちゃんと言うた筈
夜遊びの猫も一緒に叱られる

島根県　堀江芳子

とうさんがまめで嬉しい喜寿の膳（正朗喜寿）
白い杖鳴らすと秋が返事して
赤とんぼ空気のうまさ知っている
ボクたちの斐伊川アヒル五羽六羽
サスペンスドラマわたしを巻き添えに

鳥取県　川崎秋女

朝顔のアーチ静かに老夫婦
忙中閑あり朝顔をかぞえてる
許そうと思うきれいな空だから
ウロチョロと未だ一匹の鬼が居た
黒幕が動くと街に風走る

鳥取県　松下たつみ

年の差でグルメの秋を別に出る
職の無い父の地声が細くなる
老眼鏡かえねば見えぬ秋の雨
秋風に女が寄れば着る話
返り咲き自己を崩さぬ秋の草

（前月分）　鳥取県　両川洋々

俺の運握るやさしい鬼に逢う
泥舟の上で夫婦のドラマ書く
ゆっくりと案山子よ本音吐くがよい
反核を叫ぶ息切れならさせぬ
恋一つ映画のようにゃ終るまい

鳥取市　両川洋々

ロボットもある日乳房が欲しくなり
西方へいつか旅発つ金を貯め
土の詩二人でつづる脱サラよ
屠殺場の豚よ神の手信じるか
うちの家計簿貧乏神の手に渡り

鳥取県　中原諷人

また秋の臨月らしく森のうた
それからも佗しい貌は川になし
人間に生まれ不粋な欠伸だな
孫子老つなぎトンボも幸福に
バス通り裏にてあさきゆめみしや

鳥取県　土橋螢

煩悩が照らされている月あかり
よろこびを細くのばして生きのびる
人生の不時着虫が鳴いていた

うしろから追いかけてくる冬の音
父という人が世界に一人いる

鳥取県　新家完司

閑古鳥わたしの店が好きらしい
札束が主役でつまらないセリフ
飛行機が飛んでいるのは奇跡です
孝という文字が楷書で書いてある
本尊のうしろはガランドウだった

鳥取県　土橋はるお

退職をしたらの話ばかりする
口紅をつけた魚が釣れました
木魚が打ち身薬を飲んでいる
お隣の花火の音に負けている
母さんの仕掛け花火が濡れていた

呉市　林野甦光

蓑虫よおまえ揺れてる方がいい
馬の耳されどひとこと言いそびれ
知恵の輪に生涯かけている粗忽
絶壁の花わたしにも意地がある
日溜りの輪の中にだけ手鞠唄

呉市　槇田英詩

トリックでもいい点滴に安らぎぬ
ライバルを追い越すバトン売ってない
地に足がつき人形が八百屋まで
交替に風邪など引いて笑いあい
余力まだ充分なのに鹹になり

和歌山市　垂井千寿子

若者の無茶世の中のせいにする
ビール缶お前もモラルある捨場
意欲だけ書いて気のすむ日記帳
OLの気炎が熱いビアガーデン
柏手は善人らしい音でなる

和歌山市　西山幸

むらさきの表紙が似合う私小説
ひっそりと生きているのに鳴る電話
帯ゆるく締めて示談の席につく
みんな善人切り札を出すことはない
萩が散る風の噂を信じる日

和歌山市　内芝登志代

精いっぱい生きてゆきたい夜が明ける
子のための苦労は倖せとも思う
死ぬまでの絆と思う鯨尺
正ちゃん帽編んだあの頃ふと想い
ささやかな贅沢ランの鉢を買う

和歌山市　牛尾緑良

肩の荷があるから美味い缶ビール
デミタスの訳をカルテの片隅に
オン・オフで済ます娘の家事仕事
騙しきるつもりで買ってある指輪
履き慣れた靴にまかせる棒グラフ

和歌山市　神平狂虎

コスモスの径も命も黄昏る

紅い星ばかり視つめていた野犬
赤蜻蛉ぼくの尻尾を知らないか
澄み切った水を疑うサングラス
秋霖に打たれて炎えてくるいのち

和歌山市　細川稚代

こぼれ種胸張って居る葉鶏頭
豆台風旅に出た娘を追いかける
イエスマン抜きさしならぬ破目に落ち
血縁の濃さ本心を開かない
忘れ上手母の白髪(かみ)にはかなわない

唐津市　仁部四郎

貯金高坂の途中で思い出し
坂道のところどころに花の種
忘れてはいないが母の夢を見ぬ
仲人が拍手を受けたカタカナ語
新聞のカネの亡者を嗤えない

唐津市　久保正敏

あんな女のどこがいいのと訊かれても
スクリューの音は無心に魔の時刻
手の中の螢を好きな掌に移す
孫群れて民宿となる夏休み
昭和史の亀裂に正邪入れ替わる

唐津市　浜本義美

蔓草に抱かれて眠る義人の碑
遠雷に庭の打ち水暫し待つ
風は秋浜のボートも裏返る
男手の音ひびかせて厨ごと
リューマチの痛みに業を担ぐ妻

八尾市　宮西弥生

晩秋の雨屋台の灯に逃げる
君が代のソウルへ陛下病み給う
思いどおりになれないこの世の霊柩車
これからも真直ぐ歩いて憎まれる
叱るよりほめた自分に心満つ

八尾市　宮崎シマ子

比べものにならぬというて比べられ
水不足思わす程の夏が良い
顔効くというても町内だけのこと
無事らしい様子住所のない葉書
相談をされてる方も金がない

八尾市　鷲見章

独身寮一週間を干す休み
禁煙のキセルへ父の観世縒り
多情多恨六十にして燃えるもの
朝シャンプして出勤のヘルメット
二人目で摑んだ筈の男運

米子市　小西雄々

流し雛浮く幸せを信じきる
一片の氷のような訃が届く
貴婦人の帽子が妻に似合わない
妥協案はねつけ一枚岩となる
居酒屋の主役へ味方して貧し

米子市　石垣花子

診察を待つどの顔も野心なし
年輪も長女と同じ桐の花
切り捨てた枝のつぼみが咲きはじめ
握るもの握ってからは強くなり
あやとりの糸で息切れしてならぬ

米子市　林瑞枝

垣越えて視界広がるてん毬よ
野に咲いて文学好きな萩芒
モンペ履く奥さまの居る門構え
明日へ向って歩く二本の足がある
読みさしの頁で拾う亡母の文

米子市　青戸田鶴

大山の頂上へ

ぶな林しきりに黒い蝶よぎり
花園が見たくて齢をかえりみず

従妹との別れ（三句）

また一人鬼籍に入りぬ秋の空
喪の庭に秋海棠が群れている
やすらいで花野さまよう影一つ

米子市　政岡日枝子

残りの距離はかあるい靴にはきかえる
日記帳嬉しいことだけ書き止める
あと味は君の笑顔ですくわれた
失敗のたびに辞典の字がふえる
仲人は打出の小槌持っている

米子市　沢田千春

王様の耳も噂に動きだす
敦盛の笛にはとてもかなわない
宴果てて落ちたお面の私語をきく
窓あかり月の宴にさそわれる
宴最中ぬけて一人の月夜道

岸和田市　福浦勝晴

ああしんどかったと喪服脱ぎ捨てる
陰の女に保険を掛けて悪びれず
建て前はやさしく本音棘がある
蜜月に何か不服の浮かぬ顔
茜雲おんなの嘘も美しく

岸和田市　植山武助

姑を意識させない嫁の位置
自殺する程の勇気は更になし
新人類何時か他人になる親子
異状ないといえば疑いたくなる検査
神様のくれた包みは解かぬよう

岸和田市　古野ひで

気配りがかえって仇になる無口
たおやかにコスモス揺れる小さい秋
花の土買ってそれから腰を病み
きき慣れた声を受話器待っている
闘病の師の御姿わが鑑

寝屋川市　江口度

苦労売りますそれが社長です

釣りブーム魚の方が餌をよる
お互いに引退ですなという案山子
やせるのがとっても恐い豚である
門限をこさえ小人物を育てよう

寝屋川市　柴田　英壬子

写真うつり良かった旅のうれしくて
朝顔日記を知っていますか大井川
とびら開けひととき登呂の家に棲み
編みかけのセーターそっと抱くソナタ
逢いたくて夕焼雲にインプット

寝屋川市　稲葉　冬葉

三度目の正直になるヘチマ水
一歩出たぐらいで勝った顔をして
吐いた言葉に責任のない電話
友情のお百度参りから寝こむ
秋の風邪罪は私に無くもなし

寝屋川市　平松　かすみ

五時からの女つき合う割烹着
これも愛ですたっぷりとかける胡麻
寝ころんでいてもやっぱり礎で
わたしかて持てるお話して上げる
夫婦とはおだて上手に乗り上手

寝屋川市　岸野　あやめ

川の字に女三代昼寝する
ひと言で崩れる愛をまだ信じ
飛行機の落ちる心配ばかりする

死ぬ話株買う話老姉妹
気の利いたジョークの心算でしたのに

高槻市　辻　白渓子

救急車団地の話題ひとつ出来
留守番はきっちり委せる粗大ゴミ
友達の好意へ素直でない落目
改装の注文夫婦でくいちがう
餞別の袋大事に残してる

高槻市　川島　諷云児

仕来たりに明治の意地を通す母
どん尻を走ると風もやわらかい
よく回る舌が噂を連れてくる
終えんは妻より先に飾りたい
感激に咽ぶ涙は隠さない

高槻市　河瀬　芳子

百日紅咲いて夫の忌がめぐり
老いるには中途半端な持ち時間
頼られてうるさがられて亡母のとし
欲深い血を抜いてくる献血車
すこし燥ぎすぎたを悔いるひまわりよ

西宮市　林　はつ絵

心機一転易者がくれた軽い靴
鶏頭の赤わたしから血を奪う
ひらかなのリズムで里の灯と語る
花占い来ないと出てもの待っている
切れすぎる菜切包丁うとくなる

西宮市　奥田みつ子

帰省子にあれもこれもと皿の数
帰省子のまた一段と大人びて
帰省子はギターのどかにかき鳴らす
おがら焚く去年は共に焚いた庭
占いにジョーカーがまた顔を出す

大阪市　江城修史

川村好郎師逝く

惜別の柩へむなしい涙雨
合掌の両手の中に住む亡母よ
人詠い暮しを詠う父貧し
負け犬を庇う老父の嘘かなし
釘を打つ妻は大工の娘です

大阪市　河井庸佑

本心を見抜けぬままに右左
後進に譲れ体よくやめさせる
窓際も住めば都と肚決める
少数の意見に光るもの拾う
歩み寄る積りで来たに気が変わる

大阪市　黒田真砂

幼な子の信じ切る眸を見てあきず
言い訳のみにくさを知るふところ手
雨の午後心豊かに読書する
夫婦の絆もろいと知った日の不安

嗚呼川村好郎先生

白菊の今乱れ散る雲の峰

大阪市　津守柳伸

本人がもらうつもりでいる保険
マイカーの妙味高速日本晴れ
おとなりと違うリズムで不眠症
やさしさと厳しさがある大和がな
ある出逢い一期一会のシンデレラ

大阪市　本間満津子

期待した答が出ない旅日記
神棚へ返事はちょっと預けとく
分け合えば幸せ倍に倍になり
野次馬は揉めてくるほど面白い
家計簿はつけてへそくり持っている

大阪市　神夏磯典子

さわやかな秋に押されてフルムーン
嫌な夏過ぎたら暦あと僅か
洗ってもとれないシミを慈しむ
玉砂利の道へ乾いた心置く
私には私に似合う色がある

大阪府　坂口公子

きりん草せめてあなたにしなやかさ
鍍金だと思い込んでたばっかりに
ライバルの塩の加減へ出たファイト
満々の意欲へ年齢がいきすぎる
夫よお願い入れ歯の音はさせないで

大阪市　大塚節子

頬そめて霧吹く亡母の息づかい

朝霧に肩しっとりと宿ゆかた
猫の目が命拾うた蟬を追う
レントゲン青春の日の翳残し
国会の審議はすすむ霧の中

大阪市　古川　美津枝

見落しのページが楽しい休刊日
棘のある話へ胃散呑んでおく
つきものがことりと落ちて栗の風
対岸の火事ではすまぬエルニーニョ
しゃんとした老母の背中に教えられ

東大阪市　森下　愛論

もめ事は人にまかせて隅で飲み
カードカード便利になった世を怖れ
したたかに生きてまっせとゼニ勘定
納まりがつかずに続く結果論
忍の額だるまになった気で見つめ

東大阪市　崎山　美子

財テクのとりこになっていく恐怖
何気なく殺人事件読むコーヒー
あと2kgやせる努力の万歩計
円ドルの動きにヘソクリ落ちつけず
意地はった空しさだけが残る酒

宇部市　平田　実男

母と子に長さが違う夏休み
公害の街へゆがんだ虹が出る
敵のない人で頼りのない味方
飼い犬の臭覚野犬に笑われる
孫去んで妻血圧が安定し

今治市　矢野　佳雲

信じ切る円一つある水スマシ
朝露を遊ばす蓮の葉の広さ
ヤドカリの引越し海の見えるとこ
目に毒な挿絵のとこを先に読み
喜劇にしかならない父の髭である

高知県　赤川　菊野

肩パット六十路の坂を濶歩する
良い事があると言われた晩年も
旗振りが好きな男で向う傷
その先は言わぬが地獄か極楽か
鬼の面付けて独りの灯を守る

羽曳野市　榎本　吐来

もの忘れまた細胞が減ったらし
ちょぼちょぼのお隣でよし陽が昇る
ひぐらしやふと母の老い見てしまう
素人の細工とわかる槌の音
どの鳩も孤独に耐える午後の雨

松山市　谷　信夫

島へ来て木蔭うれしや心太
孫二人相撲をとって帰りけり
付添さん出来ないパズルもって来る
体重測定51キロ異常なし
幸せに居て幸せがもの足らず

生きていればこんな嬉しいこともあり　松原市　佐藤藤子

お手紙でハハハと笑うのはやめて

冗談のわからぬ髭で肩がこり

善良で警察官になじめない

真逆まさかあなたがユダであったとは　豊中市　田中正坊

日本の秋けんらんと曼珠沙華

女郎花やわいおとこが多すぎる

気がつけば種を抜かれていた葡萄

晩学は苦も楽もありななかまど

東京芸大所蔵名作展

収穫の秋しみじみと浅井忠　姫路市　人見翠記

読み終えて心の糧を重ねたり

バス停の向日葵にハッパかけられる

ひとり旅未知との遭遇楽しまん

ライバルが向って来ぬので手が出せぬ

墓守に先祖の由来聞く兄弟　高石市　浅野房子

マンションの窓それぞれの赤い花

あがく程深みにはまる冬の蝶

霧雨に二つの影が動かない

裁ち切った絆にすがる老いの坂

うたがいの狭間でゆれる黒い霧　箕面市　坪田紅葉

三十年やっと住みつく滝の道

ひとり暮しもいいものだとは三日だけ

温泉で裸のつきあい老いの坂

里の墓姉妹三人顔そろえ

もめたとて男と女の世界です　茨木市　井上森生

泥沼の泥に汚れぬ蓮の花

ヒロシマの風化の中で蟬の声

その時は賽の河原で考える

鐘の音を聞きたいほどに味な柿

気が通うあいつと同じ周波数　宝塚市　丸山よし津

酒煙草塩辛も好き卒寿翁

咲くまでの苦労は見せぬ菊花展

呼ぶ人もだんだんに減る七回忌

傲慢な地球今に叱られる

成り行きの嘘からふたり燃えて行く　守口市　結城君子

友訪えば昼寝の足りぬ犬が吠え

無表情な顔してコアラの処世観

梟の首を真似ると骨の音

性善説みんなバンビが好きでした

蝶が蛾に或日敗けたと思う日も　広島県　藤解静風

ボランティアの妻を見守るばかりなり

平凡を忘れて妻のする背伸び

この星に生れこの世に君と逢う
辛抱が錆ついている小物です
幸せを摑む十指はもっている

弘前市　斉藤　劦

出来秋を都会で待っている娘
試行錯誤ぶどう一粒ずつ食べる
遠き日の君と出合った古本屋
褒めようが上手で叱るのも上手
景気よい話はでない蕎麦の花

羽曳野市　吉川寿美

齢六十とぼけ具合も身につけて
落し蓋ほどの心は持っている
生き方の下手なブラックコーヒーよ
ピリオドがうてない風にのる噂
雑巾が乾き切ってる謀反劇

奈良県　田中紀美代

護られて好かれて生きて日々多忙
キャンセルもせずに人生つづけてる
原点に房ればみんな孤独なり
合理主義家中娘らが変えてゆく
いとおしいゆえに一言多くする

神戸市　山口美穂

若い日の夢を反芻する日記
編棒をやすめてしばし庭の萩
鈍なわたしまた逃がしてた青い鳥
こんな字が思い出せない辞書を繰る
雨の中で明日の晴れを信じてる

諫早市　原田メイシュン

交番で息子に叱られてる秋まつり
危険箇所の立札のぞいて見たくなり
満員車ひじの所にある乳房
駐在をはだしにさせた運動会

大田市　藤田軒太楼

修正の朱の入れ方が気に入らず
故里は稔りの秋と幟立つ
マスコミも落目と見れば寄りつかず
潮時を今か今かと無心顔

静岡市　渥美弧秀

緑茶飯妻の味にも亡母が居る
生涯を詩と音楽に賭けて生き
朝焼けの虫の音を追う万歩計
反骨の血も薄れゆき妻と居る

米子市　野坂なみ

亡夫十七回忌

節ごとの務めを終えておかげさま
野の花でひっそり野辺に眠りたい
身の内の虫に気づかぬ栗の艶
ロビーの風に一瞬齢をさらわれる

米子市　田中亜弥

いい種を残そう花のひとり言
自由な風ほしくて城を明け渡す
野心燃ゆ顔の相まで変えながら

歯車が狂い身内に波がたつ　米子市　寺沢　みど里

煌々と隙を見せない秋の月
窓明り月の宴に誘われる
ひとり居てその安らぎに落ちつけぬ
音の無い部屋で信心深くなる　米子市　光井　玲子

赤いバラいつも主役に溺れてる
老いてなお鍛えた体物を言う
近距離でいつも風向き気にしてる
友達のあの持ち味は盗めない　唐津市　田口　虹汀

おろそかにゃ塗れぬ傘寿の一頁
準決勝済んで風鈴よく響き
汚れてもつきは落せぬユニホーム
平穏に慣れて官吏の汚職沙汰　唐津市　筒井　朴竜

資料館響く靴音夜の巡視
唐津窯夜警陶磁の余熱嗅ぐ
霊安室ひやり鉄ドアロックイン
一杯のビールが旨い夜警明け　唐津市　山口　高明

父の死の疑惑は今も真赤な血
今にして思えば母も女なり
通帳の残が気になる神無月
淋しさを隠せば声が太くなる

お手頃と安物見せては絵にならず
お隣のピアノにリズム狂い出す
抜歯した夫の顔から頑固消え
真実の悪友生涯の友となる　唐津市　浜本　ちよ

地震屋がまたものさばる世と変り
無所属の決めかねている右左
ラーメンが田んぼに届く農繁期
一滴も飲めぬ下戸にもある会費　鳥取県　森田　布堂

夕顔にだぶる面輪の儚くて
行間に埋めた自虐の古日記
友の計に心の谷間風が抜け
毒舌が冴えて赭顔の眉白し　鳥取県　林　露杖

遊学の孫が結婚するまでは
道路網人家はなれたラブホテル
尽します貴男の心見たいです
老妻も外出コロンを匂わせる　鳥取県　金川　満春

ストレスか恋かしきりに虫が啼く
お婆ちゃんが港の風を吸うている
実年を誇るメダルも光ってる
歌麿の絵のなか髪を梳いてくれ　鳥取県　中原　汲香

鳥取県　中原　みさ子

ドラマチックに逢うも別れも港にて
ゼロの瞬間に命ひとつ燃ゆる
無為無策やさしいだけの老父である
花宴ふたりの愛もこのように

鳥取県　江原　とみお

境界のブロック塀の根は深い
柊の垣をくぐって逢いにゆく
生真面目な男道幅せまくする
亡くなってみればお姑なつかしい

鳥取県　広本　文子

おはようのひと言今日が輝いて
おれの胸にいすわる父を信じきる
握りしめた手紙の返事まだ書けず
安閑として検診にひっかかる

出雲市　園山　多賀子

パックした貌で母娘が論じ合う
本音読むつもり女のサングラス
耳聡い女の方に群れたがる
ジーパンで旅装も貴方好みです

出雲市　吉岡　きみえ

みだれてはならぬ七草萩の花
唐辛子あなたの辛さに負けました
もう泣かぬ鏡に約束して笑う
いい人に会えていい顔するわたし

出雲市　小玉　満江

酒にさえ縋れぬ我が身石を積む
霧が峰やはり下界は見せませぬ
栗のいがつんつんしてて一人ぼち
音の出る靴ははかない猫の恋

大阪市　北　勝美

ふる里を偲び無花果買うている
蛇嫌い巳歳の妻と半世紀
新築の家に以合わぬ老夫婦
五十年住んで動けぬ裏長屋

大阪市　藤田　頂留子

知恵袋よくよく見れば虫だらけ
ホークスが配所の月を見ようとは
オリンピック韓国通になりました
バタバタと作句にも出る貧乏性

大阪市　吐田　公一

孫といて幸せロスの青い空
片言の英語で祖父はなじられる
出稼ぎの酔いは故郷の唄で醒め
そろそろと里帰り待つ客布団

大阪市　中西　兼治郎

我が耳は年中せみが鳴いている
カッ飛ばせ応援席は言うけれど
やる人が居るからもらうおえら方
形見分け電話をすれば飛んで来る

大阪市　大野　武太

死ぬときも見事あっさり心不全
長男に辛い立ち場の年忌くる

老妻と野麦峠約束す
開発へ意欲ばかりが先走り

大阪市　井上白峰

警察病院脳神経外科に入院
四肢の麻痺便りも書けず行けもせず
試歩の朝拍手に答え三歩五歩
うれしさに少し遠出の車椅子
足腰の立てぬベッドで口がたつ

大阪市　渡部さと美

このごろの優しき男本ものだ
フルムーンいつより妻のつつましき
思いきり朝をなまけて今日ひとり
兎小屋の窓も光らせ夕焼ける

大阪市　塩田新一郎

檻の獅子虜囚の誇り失わず
冗談じゃないよ呆けるから死ねるのよ
威張るなよ人生万事グーチョキパー
はいどうぞ笑顔で違反書手渡され

岡山市　時末一灯

マスコミはお忙しいかもう言わず
背信へはげしく不整脈止まず
夕闇の構図へどんな顔置こう
純情の報いを今の世から受け
程々にしたらと母の長寿論
老母を頼りに小さな姉の灯がともる

岡山県　小林妻子

水入らず姉を囲んだ宵祭り
姉ちゃんに済まない訳も知っている

岡山県　荻野鮫虎狼

外濠を埋めて碁仇来るを待ち
粗大ゴミ大きないびき天下無事
黙秘権まだまだ永い港の灯
ＬＬのシャツが浮いてる終い風呂

岡山県　二宗吟平

何も彼もご破算にして友が逝き
ライバルが逝き空気の抜けた日よ
黒枠の友の頑固な顔でよし
無人駅前の一杯屋消えている

岡山県　山本玉恵

かんにんをせよとさとして昼の月
指切りを守り通して雨に遭う
自由の海を自由に泳げぬ雑魚の性
方程式解けて背中がむずかゆい

和歌山県　若宮武雄

さようなら掠れた声にこもるもの
信頼と疎遠こもごも真正直
歳月や明治生れの稀少価値
梵鐘の余韻の果てに広い海

和歌山市　福井桂香

ひた寄せる波に念いを重ねつつ
ふぞろいな卵を抱いた母であり
黒い渦自問自答をくり返す

薬袋に敬老の日々詰めてある
和歌山市　後藤正子

両袖につつんだ秋が沁みている
あの日渡った橋から届く雨の音
筋書きがひとり歩きをしてこまる
フライパンを磨き過ぎてはいませんか
和歌山市　山川克子

目には目を果してその目正しいか
親切が負担をかけた事になり
プッツンがあなたの答だったのね
才女よりおんな求めていた上司
和歌山市　桜井千秀

熱いうち打てばよかった向こう槌
気付く頃いろ褪せていた花ことば
しょぼくれた話が焚き火消しにくる
あまりにも靡くすすきが枯れ急ぐ
岸和田市　原さよ子

ヨチヨチの孫に合わせた鳩の足
ど忘れの私を焦らす会話中
外孫はまだまじないが効くらしい
夫まだ柿の苗木を買うてくる
岸和田市　島崎冨志子

らしいという噂は風と共に去り
六十路来て話す友あり日日楽し
ハンドルをにぎると男になる女
目に見えぬとげがうずいて心病む
岸和田市　清野こう

百十一歳とつとつ語る長寿法
死んだ人ばかりに出逢う夢の中
憎い人逢うて古傷うずき出す
畑打つ手休めて朝の陽を拝む
岸和田市　芳地狸村

岸和田城薪能（一句）

幽玄の世界に誘う薪能
ストレスをパチンコ玉へ打ちつける
リハビリの妻と歩幅を合わせてる
お祭りの囃子聞こえる遠い町
富田林市　田形美緒

電照菊秋の夜長を眠られぬ
流行のひまわりを着る初秋
本流に乗って木の葉は渦に消え
盾と矛傷つけ合うも夫婦なら
富田林市　松本今日子

女二人流れを変える三人目
その時は路肩の石になるつもり
コスモスの風の流れに素直なり
気が抜けた九月の浜の月明り
竹原市　岩本笑子

すくい上げると海の水ゆれて秋
いつの日か心に砂漠広がりぬ
子と走る親子三代一等賞
恋は水色夫と二人で泳ぎます

竹原市　信本博子

ひと言を信じて生きる青リンゴ
空き缶がコロコロ嘆く遊園地
大橋を揺すって風の主張あり
いくつもの瀬戸大橋の顔を撮る

竹原市　古田太虚

無駄を無くせば仏に近づくか
端渓を出してさて何彩の墨をする
バランスを考えて朝寝するとする
夜もすがら車の音や虫の声

島根県　石田清泉

摺り足で玄関入る訳がある
既得権老人ホームまだ空かず
プライドが老人ホームに目を覆い
突き当たり上から鴉が嗤ってる

島根県　北川民子

スイッチを上手に切り替え従いてゆく
六十年鏡の裏をよぎるもの
サンダルがひっくり返った日の不信
皆去んだ疲れ残して皆去んだ

姫路市　丁坪サワ子

島影のこんなとこにもある暮し
寡婦だから不倫とされるあわび貝
戦知らぬ子等の飽食泥の舟
地獄極楽手漉の和紙の裏表

姫路市　中塚遊峰

百点の母にはなれず趣味多忙
潮騒が遠い記憶を連れて来る
暗いのは嫌い灯をつけて寝る古希独り
年金へのぞきたがりの貧乏神

今治市　越智一水

民宿に内と同じの耕耘機
米寿よし母は笑って草を引き
働いて働いておふくろ愚痴言わず
後姿母は小さく影まるし

兵庫県　辻文平

針箱に母の反旗が秘めてある
さよならが下手で仮面がずれてくる
補聴器を外して女の嘘をきく
騙された振りで父ちゃんの座を守る

大和高田市　岸本豊平次

遺産ともなればもつれる兎小屋
上下に振る体操ぐらい出来る庭
兼業の五時から男が出る田圃
路地裏はカタカナの花馴染まない

寝屋川市　宮尾あいき

おひる寝でもどうぞと自動洗濯機
月見草なんぼ咲いても今宵雨
馬追いにせがまれて咲く萩の花
へのへのかがし恋しと雀言う

（前月分）

尼崎市　奥山美智子

美しい痛みを抱いてバラの棘

海の歌忘れた貝の独り言
溺れてはならない酒がうますぎる
冠婚葬祭ここでも女よく喋る　尼崎市　奥山美智子

五輪の和しかと結んで聖火燃え
行進の民族衣裳にある誇り
一歩さがって人の心が見えてくる
しとしとと心うるおす雨が降る　京都市　山本規不風

粗大ゴミ名を替えられて濡れ落葉
人妻が夜中に帰るアルバイト
島流しの人選っている不倫
カラフルなシャツで若さを買うて来る　仙台市　川村映輝

楢山も満員となる長寿国
萩まつり敬老の席へ誘なわれ
老人の代わりに返事したくなり
他人から見れば理想の夫婦らし　弘前市　真喜内實

北の島の強い引力旅に出る
海底トンネル列車と客の意気阿吽
旅でもらうさよならぬれてありがたい
おとなりの気まま気になる夕すすき　弘前市　小寺花峯

ネクタイを結ばぬ朝の二日酔い
合唱がやたらうるさい秋深し

嘘がばれ明日の嘘に虹が出る
幸せは今離せない児の寝顔　倉吉市　野中御前

祈ること多き六十路の十指かな
家中の愚痴を丸めて洗濯機
縫うよりも時間がかかる針の穴
許す気の縄目は女結びとす　倉吉市　淡路ゆり子

極上のしあわせに酔う孫の顔
当りくじ引いて親子の縁が切れ
ラーメンにうなされている受験生
枕の位置をずらして一人月を見る　羽曳野市　佐野白水

畳敷きの事務所ＯＡ機ある船場
渋滞で三時に昼を食べささ
熱帯夜のない信州の朝ぼらけ
旅先は晴留守宅は雷雨とか　神戸市　仲どんたく

事故続くニュースの合いを縫うて生き
はからずもオリンピックに逢う寿命
老病のダブルプレーとなる残暑
父の日の父をほろりとさせる策　松原市　北野久子

三回忌亡父の話は誰もせず
天寿全うされた顔が美しい
留守番の妻を疑うこと知らず

よっこらしょ言うてもコーヒ入れさせる　枚方市　宮川珠笑

答え違いを気ながに待ってる取り調べ
背伸びして寝相整え犬朝寝
初恋の再会娘の聞きあわせ
子らに厳しく犬にでれでれ　西条市　片上明水

厄年は去年でしたと通夜の席
弁当屋のミス梅干を二つ入れ
この辺で死ねば少々残る金
この人とならば指切り何度でも　西宮市　西口いわる

独身の余裕ポルシェを乗り廻し
千手観音わたしを洗う手を探す
頑固だがやさしい亡父の走馬灯
秋彼岸鶏頭炎える花手桶　川西市　氏林洋敏

乳房ある人を天使にしてしまい
甘い水飲んだ螢に悔いがあり
夏呆けの後はきっちり五輪ボケ
雑草の刈られた後に駐車場　福岡県　横地雅風

句読点ない日日余生の草むしる
箸置いてカプセル残す老いの旅
無鉄砲当れば度胸があると言う
ワープロの便り老友まだ若い　高知県　中内朱坊

年金の晴耕雨読を叱る土
彼岸花道を塞いで過疎の秋
ビニールのハウスに嫌な風予報
死ぬほどの恋かも知れぬ虫しぐれ　河内長野市　井上喜酔

我がままを聞くのも馴れた大ジョッキ
宴会の無難な位置を確める
茶柱が嬉しい誤算近づける
公園の鳩も美食で好き嫌い　和泉市　西岡洛酔

中吉のみくじに粋な神答え
まだ飲める明日も朝が明けそうだ
朝を出る戦の庭へ背の重さ
還暦の腹そばだけで良いと言う　藤井寺市　福元みのる

孫の祝い品を夫婦で買いにゆく
疑ってますなと易者ようあてた
覗いたら穴の向うに眼があった
いい人は早く死ぬわと言われたり　熊本市　永田俊子

逃げるかも知れぬ娘の髪を梳いてやる
水蜜桃が熟れている禅寺の庭
父権落ちて女が入れる肩パット
ふり返るたびに遠くなる私の花野　豊中市　辻川慶子

ブランコを漕ぎ捨ててゆく母の顔
宿題を残して秋の日が暮れる
立ち話噂の人が現われる
裏町のこぼれ話が風にのり

七尾市　松高秀峰

見本とは違う旨さの土産品
父の背へ長いローンの荷が重い
他人事と思った定年遂に来る

出雲市　板垣夢酔

酒肴うるさい夫も量が減り
おしゃべりを散らかしたまま散会し
後追って逝くとはあの場本気なり

出雲市　竹治ちかし

親の愛気付くに足が長過ぎる
ただ走る軌道は亡父に続く道
手土産に訪ねた訳が書いてある

出雲市　久谷まこと

右肩に愚痴を聞かせる左利き
その内の一人はいずれ悪く言う
振向けば我慢の道は七曲り

鳥取県　清水一保

根性骨だけが太ってつつがなし
人間様の都合で地球住み難い
二級酒があるから特級飲みたがる

鳥取県　羽津川公乃

子を照らす灯台母の距離に置く
マイホーム地価に追われた距離に泣く
踏んづけた足にも痛みじんと来る

鳥取県　田村きみ子

嬉しさに戸惑うエクボ二つある
ポケットの穴ユーモアの顔だろう
言い訳をすると前歯が噛み合わぬ

鳥取県　さえきやえ

髪型を変え浦島さんに逢うてくる
百姓もバカではできぬ近代化
毒だみのおかげお医者と縁が切れ

鳥取県　津村八重子

出もどりの猫にくつろぐ部屋がない
バスタオル宝のように児をつつむ
酒だけが人生という男です

鳥取県　谷口次男

ライバルはシルバーグレーの親父かも
日の丸に敬礼すると叩かれる
銀シャリを当然の顔で食っている

島根県　榊原秀子

地蔵盆月と私に虫が鳴く
リサイタルの切符が届くありがたさ
迷惑をかけたと思う長電話

島根県　松本文子

振りかえる者にむなしき飛行雲
作られた流行ひまわり咲かされる
第三者ばかりで事がはかどらず

友情に金がからんだ偏頭痛
軒しのぶ見果てぬ夢に根をのばし
躓いて嘘が口からころげ落ち
島根県　松本はるみ

鴉啼き猫の欠伸で夜があける
雨上り月もとぼけた顔で出る
ハッとする時の流れは子の背丈
島根県　藤原鈴江

良縁を娘は夢に見て夢に見て
金を借る話に知恵を貸してやり
医は仁術と宣う医者に身を任せ
岡山県　直原七面山

野良猫もテリトリーかけ争う日々
退屈な無職甲子園に救われる
おんびんで検診結果こわいのよ
岡山市　井上柳五郎

言い訳のシナリオテレビを真似ている
水割の中へ未来図浮き沈み
疑心して椅子の深さへ落着けず
岡山県　岩道博友

渡り鳥お前も僕も何代目
生き残る言葉と生きる人蔘茶
世渡りの一つ笑顔をもち歩く
岡山県　矢内寿恵子

三振へ取って捨てたい背番号
和歌山県　寺田裕美

計算が余白の中に埋めてある
ふるさとの話で中断した句会
和歌山市　玉井豊太

何時までも夫婦は紙のうら表
補聴器を外して世間うとく居る
貧しいがお金数える勤めです
和歌山市　山田高夫

竹光で男の意地をだて通す
出世する名前負けした離職票
自己流でフランス料理食べてます
和歌山市　青枝鉄治

赤軍の脳裏よぎった母の顔
本を買う金は拒まぬ細い脛
お隣と会ってムリした高い肉
大阪市　寺井東雲

白菜をかたさで選ぶ主婦の腕
偏屈の親父で刃物良く切れる
手を打って話を乗せる聞き上手
大阪市　板東倫子

ブルータスお前も又かリクルート
現代版ヒカルゲンジが跳びはねる
寒い夏地球もボケて来たのかな
大阪市　北山悟郎

氾濫の汚職の官吏黒字国
神仏も手心加える運不運
禁煙に紫煙一筋のろし上げ

夏バテを労わる虫の音が冴える　大阪市　町田達子
メルヘンの月はいつでもまんまるい
せせらぎに砕ける旅の夜の月　大阪市　冨岡温子
改築の窓へ小鉢を置いて見る
今聞いた話題自慢の種にする
一日の労働の汗吸うたシャツ　姫路市　都里遊光
小言しか言えぬ愛情父の背
赦しこう写経西陽の差す部屋で
鳴き砂の浜辺に女月に濡れ　姫路市　大原葉香
蟬時雨木々の昼寝の邪魔をする
週休二日私は週休七日です
猫までも過保護でくらすいい食事　吹田市　栗谷春子
鈴虫も毛虫もおなじ虫なかま
言うことなしの今日の天気に寒気する
夏ひとつ落としてしもた様な雲　吹田市　茂見よ志子
よろしくと家建てる息子が愛想言う
除草剤撒く御近所の無神経
彼岸会の塔婆仏は新しき（義弟死亡）　高槻市　竹内花代子
牛乳にこだわる老母の健康法

草狩りの行事団地を秋にする
無料切符昼食代は張込もう　米子市　白根ふみ
抱きぐせをつけて淋しく去るわたし
小きざみに雑用つくり生きのびる
こまごまと言わず家族を連記さす　米子市　小村てい子
実は奥さま色いろあって折れぬ傘
多情仏心もう泣かないでさくらんぼ
ストレスを捨てる葉月の旅とせん　羽咋市　三宅ろ亭
不満もつ筆は紙にも無愛想
幸福の鳥は掌中から逃げたがり
世の嘘をよく見分けようと思う朝　八尾市　山下みつる

シベリア鉄道とバイカル湖の旅

名古屋からシベリア行の雲に乗る
ハバロフスク日本の墓にまず参る
地の果てで三日がかりの汽車の旅　貝塚市　行天千代
洪水の被害なき泉州の有難き
街路灯悲しい別れを見てしまう
太鼓の音に岸和田生れ血がさわぐ　西宮市　瀬尾六郎太
相槌が隣の人をすぐ叩き
女児四人もう一人目をと期待して

古き良き習慣教え盆供養

境港市　細木歳栄

たった一壺の骨となりたる夫を抱く
楽しかりし想い出のみが甦る
頂上で還暦記念のポーズとり

松原市　小池しげお

歯ぎしりを時々してる総入歯
養老保険が丁度満期でお葬式
ストレスが溜ったままの冷凍魚

堺市　柿花紀美女

思い出も薄れ亡母の忌カンナ炎え
老姉妹旅の一夜を語り明け
新調の服へ秋風入れて行く

奈良県　宮川古都路

尼法師一人ほほえむ過去の芸
涅槃図が壁にもたれて立って寝る
古希の坂石ころ道に小言出る

有田市　松井かなめ

落選の事務所ダルマも逃がれたい
病院の真白い壁に小雨降る
住職のウイットに賽銭はずもうか

海南市　三宅保

助かったから強運と自慢でき
二次会を逃げて一から飲みなおし
定退の予鈴に謀反したくなる

竹原市　石原淑子

又の名を山の神とも呼ばれます
虫の音と淡い思いに身を委せ

富田林市　新開千代女

事故現場誰が供えし白い菊
気どってもふだんを知るからつい笑う
ボケたかな置き場忘れた花鋏

寝屋川市　堀江光子

兄嫁の立場でそっと包む金
節煙のこと繰返し追伸に
くらげにも己が考えある泳ぎ

黒石市　相馬一花

ペンだこに頭上らぬ坐りだこ
乾盃のコップ置いたり握ったり
カセットのお経に幽霊立ち往生

川西市　松本ただし

世渡りに合わない目盛りのある定規
ほどほどな年金だけの溝の幅
はんなりと真綿になった愛ことば

広島県　田村新造

秋がゆき戦友の訃がまた届く
Tシャツの胸にひまわり咲き乱れ
花柄を選ぶ二歳の自己主張

茨木市　堀良江

夜目遠目それでも自信ないわたし
満員電車ポケットベルが鳴り出した
ポックリ寺詣でた母の年になり

高知市　北川竹萌

重い荷を持ち老骨の軋む音
閉店は開店よりも難しい
夜の模索邯鄲の鳴く掠れけり
倉敷市　田辺炙六

留守にする隣はいつも黙秘権
それしかない自問自答の灯を点す
気がつかぬ自分の癖よ昼の月
加賀市　細呂木魯木

ためらって許り親父の後手人生
母の座は吾が家みんなの香辛料
共に生き共に死なれぬ老いを生く
倉吉市　渡辺菩句

茄子きゅうきゅう泣くがおかしくまた洗う
おじいさんはいいな毎日夏休み
豊中市　上田登志実

もうよかろだけどお医者はまだと言う
時代かな妻ももってる一家言
出雲市　石倉芙佐子

女ひとり風の吹く日が多くなる
かな文字の演技さとれぬ出雲和紙
静岡市　永倉僕川

笑われた顔が鏡に聞いてみる
失言を狙ってばかり野党の目
米子市　金山夕子

美しい仏の顔の座禅草
陽の匂い好きでこまめに布団干す
岡山県　花田たけ志

ぼろぼろの絆つくろう血の叫び
老い二人言葉はいらぬ日が暮れる
守口市　森川まさお

塔うつす心字の池の暗い水
桧皮葺きの門跡些か世辞を言う
大阪市　宮下とし

病む母に遠くに花火の音がする
弁解は相手が悪いこの辺で
鳥取県　乾喜与志

父の顔捨てて気張らぬお爺ちゃん
父よ母よ記憶じゃ山も川もある
箕面市　椎江清芳

お若いと言われパフにも念を入れ
汗をせぬ年金桃を一つ買う
豊中市　一瀬福一

声がして足音がくる仲間
遊び過ぎ家へ帰れば鬼の声
河内長野市　植村喜代

胆嚢で出来た宝石もっている
病院の椅子に深くは座れない
東京都　吉川一郎

想い出のコース辿ればわらべ唄
嘘重ねいつも寂しい酒と居る
川西市　野村静雄

故郷の土の匂いの節回し
秋の夜を語るに落ちる長話

自選集

専守防衛又サボテンは棘を研ぐ
酌み交わす約束がある萩の月
欠伸するたびに涙が出て佗し
いつまでも初枝さんではなかりけり
あめんぼは脚の長さで恋に勝ち

工藤甲吉

灰皿を備えてはいる瓶の蔭
質問は幼稚くだらぬインタビュー
前髪のゆれもすすきの穂も招く
しんみりと酒も秋なり屋台の灯
女一人表札もない冠木門

米澤暁明

微熱の微さえも気になる二重橋
競泳や頭の黒いのが日本
倖せを持ち寄って来た盆休み

大矢十郎

敬老の容易ではなし下の世話
時と金奪うパチンコ屋は近し

黒川紫香

人間不信の鹿が草根食べている
もう曽孫抱けぬ重さになって秋
写生する人あり秋が来ています
味噌汁のうまい民宿思い出す
花道へ弁当置いて叱られる

小出智子

土曜日は夫婦のために空けてある
カラオケの嫌いな人とうまが合い
五十年も前の写真が笑わせる
突き当りのお地蔵さんが知っている
素晴しい庭があるのは余所の家

有働芳仙

まんまるくなると人間死ぬのかも

何人も当って砕けたのに懲りず
折釘を集めた様な雑魚寝かな
無駄な線消して終うと淋し過ぎ
一日が無駄でなかった陽が沈む

金井文秋

二十一世紀まではと喜寿の生きる夢
金婚と重なるはずであった喜寿
喜寿になるからだまだまだ使えそう
遊んでおれとだあれも言ってくれぬ喜寿
ガタが来た七十七を祝われる

児島与呂志

素直な娘そのまま素直に子を育て
逆えばワインがゆれている机
久しぶりおばはん風邪をひいたらし
泣きながらうなずいているぼけドラマ
風の音せわしくなって秋が更け

小林由多香

どん底で抱いてる野心不気味なり
歩道橋渡ってたばこ買いに行く
幕あいに涙の跡を拭いておく
一合の二級酒老父をまるくする
石橋をたたきあっさり引き返す

論客と意見が合うた久しぶり
集団志向どっぷりつかる湯がぬるい
傍観者たれず慚愧に堪え難し
言葉遊びを若者も振り向かぬ
てにをはを入れ替え命吹き込もう

野村太茂津

健康へ感謝こころは豊か統計調査員
順番に廻るリズムは家族の和
子と同居過去は忘れている生活
誤解されているらし話の舌足らず
二十一世紀へ税改革は熟してる

藤井明朗

コスモスの花の中なる町工場
蝶々のまだまだもつれ萩終る
柿たわわ京の田舎は秋深し
画用紙に京の秋は盛りきれず
つつましく余生の鈴を抱いている

藤村〆女

かくし味さとの母から貰いうけ
好々爺然と老師の自適振り
灯を慕う虫火あぶりの刑に合い

本田恵二朗

苦も楽もペロリ舌み込む太っ腹
閉口頓首相手が孫じゃ勝てません

正本水客

美味求真うつわも秋を愛でている
古九谷の豪華な色絵に引き込まれ
萩焼の素朴さにあう佗びと寂び
有田焼柿右衛門の重み持つ
火と土の変化にまかした伊部焼

水粉千翁

黙禱の去来八月十五日
負けっぷり恐れ入ります猿芝居
待つことを知って拳に語りかけ
御の字をつけて見事に皮肉られ
しとしとと雨情はここに極まれり

八木千代

老後の荷など振り分けて萩の道
姉の絵と同じ構図になってくる
掌から離れぬひと握りの約束
導火線じりじり秋の野を巻いて
蟬の樹で囲うどんづまりの砦

山内静水

読み書きの出来ない母の正信偈
集って戴き面目なき次第
そんなこといくら何んでも夫婦でも
有言実行敵は幾万ありとても
墳墓の地に刻さんか野人の句

月原宿明

母逝きて厨に梅の壺が無い
ぐい呑みに味が出てきてチチロ啼く
鼻毛抜く癖あり余り出世せず
裏道を知らない父は平で果て
罠かけたのを確かめて引っかかり

阿萬萬的

時雨れるにまかす祇王寺秋の色
薄墨の絵にして小倉山しぐる
日も暮れて秋取り戻す小倉山
嵯峨暮色竹のささやくのにまかす
嵯峨豆腐の湯気へ女は無口なり

橘高薫風

日々恐懼昭和とともに生きてきて
ハンカチの白で押し通すは難し
友達よ影法師にも運不運
見る人の心を見てる庭の石
夢に見た華清池いまに夢のまま

川柳太平記（126）

川柳の群像

清水白柳

東野大八

「白柳さんの川柳に対する執念とか、情熱とかに就いては、川柳の虫だったとか、川柳の鬼だったとかいう言葉では到底言い尽せない程きびしいものがある。川柳のためにこの世に生れてきた人間だったと迄極言する仁もある位で全く同感である。

自分の修めた善事善行の功徳を他人のためにふりむけるのが菩薩の回向だとすれば、白柳さんは川柳済度の目的で、この世に仮りの姿を現わした権化だった、と私はうけとりたい。その事は白柳さんが機会ある毎に、正しい川柳の若返りと、それをふまえての向上に打ち込んでいられた晩年が、今更のように尊い姿として私達の脳裡に浮き彫りされることからでも証されると思う」（「清水白柳遺句集」序文・中島生々庵）

「白柳は晩年死期を予感したのか、やや焦り気味に新しい句風を見せて居たが、それも白柳自身は兎に角、傍目から危なかしい気で見ていた。所詮、白柳のモチーフではなかった。あれ程川柳を愛し、川柳を追いかけて居た川柳人も珍らしい。彼は川柳のマニアであった。川柳塔を一身に担っている意気は眼を見張るものがあったが、滅多に敵を作らないいつ会っても憎めないあの笑顔は八面玲瓏、誰にでも愛されていた」（「清水白柳遺句集」〝序に代えて〟菊沢小松園）

「清水白柳さんは、柳誌川柳塔編集の責任を荷ない、他社との交流や種々の句会の出席に寧日なく東奔西走、忙しい人であった。その温容、温顔は接する人に大層親しまれた。

氏の句評・選評は特にユニークなもので大好評を博し多くの人をひきつけた。私の川柳生活によき伴侶者であり協力者であり、心の灯であった」（「清水白柳遺句集」跋・八木摩天郎）

右の遺句集は昭和46年7月川柳塔社から発刊された布張り金文字箱入りの美本だった。

この本の年譜から抄録する。

本名清水清。明治38年3月21日石川県小松市生れ。初号喜芳。大正13年から「川柳雑誌」創刊号より投句、白柳子と改号。上阪。昭和6年郷里小松の「ねこ柳」同人大阪支部を作るが、昭和9年「三味線草」の編集に当り昭和11年「川柳若葉」を発行。のち親友となる小松園を識る。翌年本田渓花坊の「川柳国」に「若葉」も合流するが、翌年解散。昭和15年6月「川柳雑誌」不朽洞会に入会常任理事。昭和32年白柳と改号。昭和40年9月「川柳雑誌」の麻生路郎主幹の死去により誌号を改めた「川柳塔」常任理事、編集責任者となる。昭和45年11月12日心筋梗塞で死去。享年65。

釈白柳。

白柳の職業は宮大工であった。青年期の作

地団駄を踏んで大工は板を替え　白　柳

棟梁がわざわざ見せる脛の傷　白　柳
腕で食う職人にして猫背なり　〃

白柳と小松園は四十年来の柳友である。昭和二年に白柳選で天位になったのが縁だ。白柳の弟で川柳のうまい友帆(故人)と柳論白熱の場面にもこの兄貴はニヤニヤ笑って見ているだけだったという。白柳はこと川柳と名のつく集りにはどこへでも得意のベレー帽姿で飄々乎として出かけた。四国、山陰、山陽、東海、時には東北まで足をのばし「川柳が川柳人の胸に蘇るとき、立派に人々の上に生きつづけている。白柳は死なない」(小松園)

「白柳さんの昭和24年の句に

心臓が弱かったとは父に似し

という句がある。白柳さんの病名も心筋梗塞であった。二十年前に亡くなられた次男坊のときから、自分の心臓の悪かったことを知っておられたのだ。だのに何故もっと養生されなかったのだと机を叩いてどなりたい。

白柳さんの川柳に対する情熱と執念は自ら川狂と名乗るにふさわしいものがあった。一ヵ月の二十何日かは句会出席だった。地方の句会も遠しとせず夜行で出かけていった。

遺族の方達は、川柳のために死んだようなものですと言われた。俳優が舞台の上で、武士が戦場で死んだのも同じだとお慰めもした。」(「川柳塔」昭46・2〃白柳氏を悼む会〃西尾栞)

この追悼号には十六人の追悼文が10頁にわたっている。それらに眼を通すと、大萬川柳会、オーエスケー川柳会、堺川柳会、川柳わかやま、駒つなぎ川柳会、むらくも川柳会、たけはら川柳会、南大阪川柳会などはいずれも生みの親と育ての親で活躍し、その熱心な指導力や行動力を高く評価している。

「晩年白柳さんは『最近私はつくづく柳界ほど老人を酷使するところはないと思うようになった。それをなくするには、もっと柳人の若返り法を考えねば駄目だね。それには川柳の良さを広く世にPRする努力をしなければ若い人は集ってこないよ』白柳さんはこんなことも話された事がありました。

「俺が死んだら『にくまれ口をいう奴がひとり減りよった』というだろうが、俺はそれがええと思っている。いまの世は存在価値のない人が多すぎるのではないだろうか。そういう意味では、俺のような憎まれ人間はそれだけ他人さまから存在を認められていることやから満足しているよ」と語りついで「しかしそのにくまれ口が建設的なものにつながっていなければ駄目だ。それがないと、ただの憎まれ口に終ってしまうだろう。それからあまり小さな私欲を持たないことや、これが一番肝賢だよ」(阿部柳太悼文)

昭和42年奈良で大陸川柳同窓会があった折私は白柳と二人だけになった機会をみて、相手が苦労人で気さくな人だけに持前の毒舌が顔を出した。「あけてもくれても川柳、川柳言うて暮らしの方はどうなってます。少し御家族のことも考えねば…」。この一言に相手はぐっと詰って返事が突嗟に出てこない。白柳の長男清水健司にある時、「貴方は親父さんより句が巧い」と賞めながら、さきの奈良の一幕を思い起した。これが機会で、この人から私は白柳秘蔵の沢山の古川柳合本を大きな宅急便でどさりと送って貰った。今では貴重なこの古文献は筆者秘蔵の好資料となった。

菊活けてひととき欲を忘れたり　白　柳

昭和57年9月大阪市阿部野神社に右の句碑建立。これを記念し「清水白柳句集」発刊。

★次回は「**不二田一三夫**」

永田俊子さん(熊本市)から
金一封拝受いたしました
川　柳　塔　社

誹風柳多留廿六篇研究（三十八丁）

本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木　黄・石田晋一
南　得二・小野真孝・多田　光
故岡田　甫

651　**旦那ハ正阿弥供ハ七厘あみ**

本多＝「正阿弥」は鐔工または鐔の種類をいう語で、室町末期に起る。鉄地に金象嵌を施し、一般に武骨なものが多いという。元禄の頃の京正阿弥の政徳が有名。

「七厘」は価い七厘も炭があれば物が煮えるということから、七厘の名があるという焜炉の類。七厘あみと言ったのは、正阿弥を受けて、網にかけたか。

駄労解を試みると、旦那は刀の鐔の正阿弥を求め、供の者はあみはあみでも、七厘網を買う。同じあみとは言え月とスッポンの違いがある、との意であろうか。

大屋＝賛。七リンの中にある鉄の簀を七厘あみといったのでしょう。

七りんへ合せて買ふはけちな網　三三16

という句があります。

八木＝礎稿および大屋氏説でいいのではなかろうか。アミ―アミの仕立。

多田＝八木さんのいう「アミ」―「アミ」を結んだもので鍔に飾の穴があいているので網といったものであろう。

652　**盗人を捕らへ母親声を下ケ**

本多＝放蕩息子の夜ふけまたは朝帰り。

南＝盗人をとらへ母親もてあまし　六五2

とあるように、金を盗もうとした息子を捕らえてでしょう。

多田＝南説賛。遊里行きの金を工面しようとした。

653　**柏にくるむと団子か餅に成り**

本多＝粉をまるめて蒸したものが団子であるが、それを柏の葉で包んだだけで柏餅になる。

なに変哲もないというわけである。同じようなものに桜餅がある。

ペチャクチャを柏につつむらんがしさ　六二11

石田成＝賛。猪牙舟の遊客かとも考えましたが、団子を端午にひっかけた柏餅の句。

多田＝賛。

654　**景清をつかまへに出る十七夜**

本多＝浄瑠璃『壇浦兜軍記』が出典。平家滅亡後、頼朝の命を狙う景清は京清水への五条坂で花扇屋の遊女阿古屋を見染め、わりない仲となる。源氏方の景清探索の手は阿古屋にのび、阿古屋を捕え、景清の居所をはけと責めたてる一方、二人の関係から源氏の捕吏の手は五条坂周辺にのびる。

「十七夜」は清水観音の縁日十八日の前夜。

句意は、明日は観音の縁日であれば、人並みにまぎれて景清めも阿古屋に会いにのこのこ姿を現わすであろうから、と捕吏が勇んで五条坂へ向うというのである。

五条坂けいど七兵衛せんぎなり　八41

（悪七兵衛景清）

南＝賛。

七兵衛しかもその日ハ御縁日　明五満1

多田＝賛。

655　**居へ膳をきらい息子ハ買喰し**

本多＝「居へ膳」はわが前にすえる膳、女の方から男に情交を迫る、との二意あるが、ここでは両意に通わせて「嫁」をさす。

句意は、遊所通いがおさまらないどら息子に嫁をとったが、魔所通いがいっこうになおらず、居え膳（嫁）を嫌ってもっぱら買い喰い（女郎）に走っている。「花娵をいれて息子のくつわ留」（一〇四32）とはいかなかったケース。

鈴木＝「据膳」を嫁と限定してしまう必要もない気がするが……。

石田晋＝鈴木氏のいわれるように、「据膳」を親がきめてきた嫁候補というようにまで拡大できるとも思われる。

小野＝嫁でいいのではなかろうか。据膳が嫁候補ではまだ喰う訳にはいかぬのだから。

多田＝同右。押しつけられた嫁なのであろう。

656　**暑い事釣瓶ひとつに人たかり**

本多＝そのままの句。クーラーなどない時代、手近に涼をもとめるには、釣瓶が手っ取り早く効果もある。人の思う所は皆同じで、長屋中で釣瓶へ押し寄せ涼をもとめる一幕。

石田成＝賛。のどを潤す景。

石田晋＝のどをうるおす以外に汗をふいたりもするであろう。

多田＝賛。

657　**そりや頭巻だと傘を押ッ付る**

本多＝「頭巻」はズマキか、句意不明に付き御教示乞。

石田成＝頭巻＝カシラマキ、頭巻釘の略。また鉢巻に同じ。傘＝傘灸の略、逆上を下げるために点ずる灸。足の指の股へ据える。

駄労解ですが、鉢巻しめて灸を据える景か。

大屋＝頭巻は、頭の方が渦状に巻いていることで、そうなっている釘をカシラマキクギといいます。傘は傘灸で石田成設の通り。灸をすえるとき、モグサをつまんで頭のほうをちょいとひねっておいて「それカシラマキだぞ」といいながら、足指におっける場面だろうと思います。

多田＝「助六」のことではないか。

句意は、傘を渡しながら「傘を持ったのだから、そりゃついでに頭巻をしな。いよいよ助六だ」などとからかう――といったところではないか。「おっ付る」とあるから、むりに持っていかせるのか。

五濁抄

黒川紫香選

臆病になって無口を武器とする
火の壺を抱いてピエロの寂しすぎ
まだ少し燃えるものある帯の芯
親切に甘えて焦る車椅子
花束の謎が解けない蝶結び

徳島市　宮武　まつ女

敵に背は見せぬ女の肩パット
とても上手に転がってゆく敵の毬
恥いくつ晒して花の首落ちる
煮豆コトコトひとりの長い夜が来る
更年期抜けたおしゃれなサングラス

佐賀市　寺中　三枝子

十人十色みんな優しい彩をもつ
まさかの縁で今日はライトの中にいる
照る日曇る日夢みつづけた母しぐれ
ベルにとびつく息子よりも嬉しい嫁の声
未完の絵まだ描きつづけ果報者

八尾市　高杉　千歩

その時は全身マリで逢いにゆく
優しい人の名前を埋める秋の耳
折り目のない紙幣に強い風あたり
その刻を思い返して日記繰る
受話器もつ掌が濡れている逢いたくて

浜田市　中尾　まゆみ

母さんが笑って逃げた黒い雲
白蓮に溜った水が透きとおる
一市民として巨大迷路の中にいる
ベコニヤの花が踊っているようだ
ライバルの的をはずれた風に乗る

鳥取市　小谷　美っ千

叱られた方は忘れてない昔
折れ枝に副え木無駄かも知れないが
飲み込めぬ顔で拍手の中に居る
小心で逃げ口上を持ち歩く
札止めの外で聞いてるホームラン

熊本市　宇野　昭代

もえてもえてもえて散ってゆく紅葉　熊本県　大川幸子

何をするともなく浮いてる秋の雲

鍋の底喰い気盛りの秋をみる

鍵っ子にファミコンという友が出来

疑わず貴方の彩に染んでゆく　和歌山市　堀畑靖子

露出気味だった心を閉じる秋

ブリリアンカットが似合う秋の指

妹と泳ぐ小雨の露天風呂

我がままな生きもの夫対私

人畜無害の男性募集中　富山市　舟渡杏花

ここらあたり糸を切ろうか奴凧

貧乏神に引きずられてるチビた靴

お隣を覗くに邪魔な首の鈴

出来損いの高座へ笑わぬ母ひとり

窓際で撫でられている不発弾　名古屋市　藤井高子

それなりの実を照らすのは夕茜

ライバルの呉れる情を掌に受けて

あいこでホイ今日の一日も趣味に暮れ

厳として鎮座ます家紋なり

別件で逮捕妻からさとされる　今治市　野村京子

細面に写る鏡が好きになり

模索する中で振り子の音を聞く

肩パット抱いて男の手がひるみ

捨てられる覚悟の小金貯めておく

ストローが遊んで恋のうそごっこ　広島市　流奈美子

亀さんとわたしの歩幅よく似てる

流灯の水面に亡母の風が舞う

心残りのわび状も携げ花手桶

故郷へ伝言託す海よ海

恥かしながら蚯蚓に負けている残暑　高槻市　笠嶋恵美子

母さんの膝が温くて翔びたてぬ

虚と実の間で恋を楽しもう

夏風邪の後遺症だな瞳がうるむ

ストレスを溜めたいちじく落ちている

もつれ糸とけて風船また独り　富田林市　池森子

同じ歩幅で胸のあたりを追う人よ

日の暮れは若さを少し剝いでゆく

雑事の一角に空白の時を置く

ときどきは猿まわしになる妻よ

何となくせっかちになる古時計　長岡京市　木本如洲

誘われて貴船の川床に妻といる

川は汚れて宿は一途の灯をともす

振りむいた坂には暑い街がある

十字架の屋根はマリアとたそがれる
猪が出た話は知らぬニュータウン　草津市　久保和友

シルクロードの旅

ウイグル語の本屋でカセットテープさがす
ふもとから天山山脈見たかった
敦煌の緑地をいそぐ耕耘機
盛装のはてウイグル娘のあくび
爪染めた女が大壁画に眠る　京都市　松川芳子

五時からの男で朝の無表情
胸板の厚さに秘めている闘志
自画像がだんだん母の顔になる
だて眼鏡女は嘘をつきやすし
ロッカーを常用してます易者さん　静岡県　薗田漠沓

盆僧の衣の襞に滲む汗
菩提寺の森は読経と蟬時雨
汗だくで「冷たい夏」とニュース聞く
飽食が落穂拾わぬ農にする
行商のおばちゃんの荷の指定席　久留米市　鶴久百万両

非情なまでの修行を流れ星が知る
天女ゆらゆら亡母の噂を知らないか
運命を遊ぶ余裕も子に欲しい
アンチ巨人の俺に歯向かう嫁が好き
女なしで生きてはいけぬろくでなし　大阪市　上田柳影

一杯のビール私を軽くする
諦めにてっすとこの世面白し
風は秋ひとり角力は佗しすぎ
なまじっか金があるから揉めている
爪を切る不倫の思慕を断つように　和歌山市　山口三千子

感情をまる出しにした箇条書き
ワンクッションおいて話を軟化させ
約束は守ってくれる人とする
幻を追っているから抜け出せず　尼崎市　的場十四郎

思案して誘いにまけた白い足袋
父さんに内緒と母は口添える
気前よく払い財布に叱られる
嘘一つ舌のもつれを見破られ　吹田市　井上照子

心機一転気どって眼鏡かけかえる
蟬の殻言葉もなくて孤独なり
判ひとつ迷いぬいてる義理の枷
中指の指輪は軽いイミテーション　米子市　新正子

貝殻節うたって海の幸を食う
夫を朝戦士にかえる白いシャツ
開発で太郎に泳ぐ海がない

ローソクの炎におわす観世音
藤井寺市　高田美代子

赤い舌は切らねば偽証罪になる
真ん中で胡座かいてるのが悪魔
赤紙が来ぬ世も子等は側に居ず
人妻の笑顔にのってからの咎
岐阜市　渡辺杏村

親のエゴみごとに咲いた七五三
秋灯下本を枕にひとねむり
会える日はブラウスすこし派手にする
長生きはしたくはないと飲む薬
西宮市　秋元てる

アイドルを壁一ぱいにお年頃
泣顔は似合わぬ顔に生んでくれ
組立てる盆棚裏に亡父の文字
ねぶた絵の太い眉立ち津軽燃え
西宮市　松本一郎

昨日今日忘れ昔はよく覚え
妻の酌七十歳の誕生日
忘却という神様の贈りもの
名調子僧のガイドに聞きほれる
出雲市　金村青湖

逢い会うてオリンピックの話とは
忘れてたことも書いてる古日記
すぐ飯にする人と来て物足らず
赤白黄薬が老いの手にたまる
尼崎市　森安夢之助

疲れてる女房の顔見とうない
走りっこに勝った亀さんしゃべり出す
学歴を隠して親爺屋台引く
痩せた肩父は頑固を押し通す
静岡市　沢田きん

離乳食ママも一しょに口を開け
思い切り心で泣いて気を晴らす
いろいろとあって女の哀しい日
叱られた孫の一理も聞いてやり
堺市　桜沢あか里

コンピューターの恋占いで気が軽い
水を打ちながら魚を売り急ぐ
抜け道を知ったばかりに躓いた
木の瘤のどれもが耐えてきた試練
尼崎市　鈴木良征

ひと昔前ならメダカのいた小川
松茸の値札横目で通りすぎ
石段を数えて登る勝ちいくさ
プライドが頭もたげてくる余生
熊本県　高野宵草

素足から廊下の秋が這いあがる
遠来の客です門から水撒いて
いい鴨が来たなと僕を離さない
饅頭屋夜まで焼いて祭りの日
静岡市　片平静代

老いの日々近くの友がありがたい
ライバルを追い越す夢を持ち続け
もう一人生む気か古着捨てぬ嫁
友見舞う一番好きな花を買う

東予市　小山悠泉

ペンネーム美女と信じていた不覚
筋書を読まれ拍手が少な過ぎ
落書きも叱らぬ妻の育児法
謙虚さへ好感を呼ぶインタビュー

京都市　木村たけし

宅急便の結び目にある母の愛
海を抱く男に悲しい街がある
句碑除幕五人の孫にかこまれて
森の絵に少年が病むハーモニカ

熊本市　黒田緑

味わえばお茶の重さが手を流れ
卵割る角度はいつも同じ向き
来し方に触れて夫婦という絆
命はてるまで鈴虫の声が澄み

滋賀県　安田志津

国訛り添えてもてなす宿の膳
低目低目の投球術には負けました
戦争を知らぬ恐さと安心と
湖見えるこの街が好き出られない

熊本県　岩切康子

青田に空一杯の赤とんぼ
美容師に職が知られて話題変え
痴話喧嘩外食に出て仲直り
ゴミ焼いて素顔が染まる休みの日

岡山県　土居みさえ

すきやきと地酒で祝う父の喜寿
笑い声耳に残して娘は帰り
本当の友情だまっていてくれる
すりへった靴で信じた道進む

枚方市　森本節子

大波小波次々子供を追いかける
砂浜にボート上げられ秋の風
旧友の葬いに行く夫案じ
病む人の話親身になって聞き

和歌山市　森茜

とび乗ったものの各停もてあまし
うつぶせにして秋の風葉をおとす
乗ってきた大阪弁がよく食べる
旅先のコーヒーショップでアメリカン

尼崎市　尾宮弘治

母が来て幸せそうに掃除する
叱られた膝を枕に寝てしまう
炎天の喪服に日傘を差し兼ねる
アルバムに伝えるダムの底の村

尼崎市　野瀬昌子

敬老会ピンク着こなす祖母がいる
電柱に犬が縄張り決めている

信号が青になる間の飛行雲
洗濯機の泡立ち見てる小さい幸　寝屋川市　井上すみれ

夜通しの激論消した今朝の雨
お見舞の人形もうれし退院し
夢二の絵暫し乙女の頃になり
背を向ける子に愛の羅針を考える　貝塚市　池田寿美子

褒められて栄養剤を補給する
天国から気球の迎え来てほしい
改札口背広の色も濃ゆくなる

六甲山頂にて

バーベキュー夜風と夜景味に入れ
草焼きの煙暮色に溶けていく　出雲市　金森知恵子

無責任な噂培養されてとぶ
迷路にも抜け出る道はあったはず
そう言えば老後の準備なにもない　尼崎市　山田保蔵

お寺さんバイクでお経配る盆
この一番負けねばならぬ借りがある
思案して買った時計が故障する
これからはカネを貯めよと思うてる　寝屋川市　宮崎菜月

隣家の犬猫（二句）

アロンちゃんと言えばニャンとお返事上手
お蒲団を叩けばジョイは吠えたてる
苔径に降る雨音はなかりけり
晩秋に長い手紙が欲しくなり　和歌山市　田中みね

あの人この人みんな大好き趣味仲間
産声に早くも玩具の祝くる
べんちゃらにころりと参る単細胞
迷路から抜けて自分をとり戻す　熊本市　北川一進

行列が粗品に並ぶ市場篭
朝市の活気が見える競の声
今日だけはタクシーで行く娘の晴着
ポケットに秋の味覚がこぼれそう　尼崎市　吉永伊三郎

土の香も付けて直送宅配便
陽は昇り沈んで人は旅をする
近道をした公園の丸い月
男の子家来にしてる孫娘　尼崎市　新井泰子

自立した男の不安見た女
夜半の蚊に読書の時をもらいおり
掃除機で愚痴や不安は吸いこめぬ
夢を買い夢に破れる人の列　守口市　森川春子

退院と言われて顔が赤くなり
少女趣味の病床日記の表紙書く

ガレージの隅に地蔵様がある
骨とう品結局元の場所におく
酒田市　永沢裕子

遠い日が欲しくて塗りの下駄を買い
化粧して今日一日にたち向かい
ジャズダンス妻を忘れて酔いに行き
セールスへとっさの嘘を並べたて
鳥取県　山根八重

ひまわりの流行った夏も終りなり
ちぎれ雲ひとりぼっちが好きなのか
指切りが最後になった月見草
群れてとぶトンボに汚職などはない
岡山県　福原悦子

ソーメンの大皿笑う大家族
石垣をつんで子の城遠くいる
台所改善手元をくるわせる
ゴキブリが良く知っている台所
大阪市　島路太郎

味つけを変えて見直す有り合せ
秋風が淋しく吹いて旅に出る
まっ白な食器かがやく台所
堀割のあわにまぎれてこぼれ萩
和歌山市　田中輝子

ご機嫌な電話わたしは酔うてない
四つ植えてみんな芽を出す柿の種
無愛想な声で警戒されている
ゆっくりと大きくなろう記念樹よ
岡山県　千原理恵

万灯が消え閑寂の喪に服す
粘り勝ち嬉しい汗がほとばしる
乗せられて乗って見てやる小悪人
敗北はしたが引きぎわ考える
大阪市　川原章久

物言わぬ金が物言う時がある
ジャンケンポン一番風呂が姦しい
影日向なくて良い娘がまだひとり
御平癒を待つ那須の草秋の虫
大阪市　亀井円女

まだ亡母を追いかけている萩の道
ぎこちない二人三脚しています
知ってよし知らいでもよし人の事
仔犬抱く私も犬になっている
尼崎市　中澤向西

リュウ金の尾天女のように浮かんでる
坊さんの新車が光る盆まいり
金の成る木を植え昼寝してみたい
山下りるとたんに匂う焼芋屋
相生市　中塚礎石

ボタン一つおもちゃの兵器動きだす
四十年表彰状に汗にじむ
白旗を揚げて風向き読む打算
片ちびの靴でせっせとグラフ積む

初孫を世界一だと言いふらし　鳥取県　大田幸枝

少女歌劇まねて婆ちゃん飛んでます

母の手に載るとコロコロ花の種

それぞれの泪に披露宴うれし　静岡市　三浦つね

梅干によく似た顔になってきた

ミニ列車トンボも無料で乗ってくる

ライバルに提灯持ちを頼まれる

色あせた恋文もでる大掃除　大阪市　稲本凡子

川村先生を悼む（三句）

葬儀場最期のわかれはせずにいる

円満な面影のまま永久に抱く

今更に形見となった短冊掛け

十銭金にこだわり愛に飢えている　佐賀市　江口万亀子

母の背でねむって帰る七五三

王様気分家族みんなに土産買う

チャイムを押し押し衿元をととのえる　大阪市　山田妙子

お隣がちょっと気になる秋の風

折り返し地点を過ぎた誕生日

休刊日ゆっくり新聞読みたいな　竹原市　古田比呂子

風のない日の旗はしゃべらない

大きめのおむすびにぎる運動会

自己主張ばっかりしてて孤立する　島根県　加本義良

朝顔の蔓の行方を決めてやり

平均寿命延びて風船ふくらます

ねずみにも足音がある天井裏　大阪市　乾哲静

月の出に何か気になる二人連れ

垣根越し糸瓜の覗く散歩道

洗うには惜しい気がする新調着　鳥取県　乾隆風

秋風やショートカットでさわやかに

噂話をして夕立に遭う女

のろけ話が弾むと焚火よく燃える　尼崎市　木下義嗣

老妻も若い自分の写真持ち

ちょっとだけ唄って賞品一万円（素人名人会）

定年になって置傘淋しそう　伊丹市　小熊江美

悪友にホームで肩をたたかれる

歯みがきのチューブ押し過ぎもてあます

遊んでる夫のたしかな腹時計　静岡市　小木久子

甲子園だけが盛夏を感じさせ

日記書く少し脚色したりして

名案が浮び夫に見直され

出発進行朝のラッパは母が吹く　岡山県　杉本伊久栄

旅鞄気ままに誘う風に乗り
お隣の花がやたらと奇麗だね　豊中市　小林一夫

君の街まで紙ヒコーキを飛ばさんか
毒虫になりたし君を殺したし
じゃあまたと別れいつ会うかは知れず　旭川市　朝倉大柏

新人が来て先輩になりました
りんご剝く切れたところで愚痴も切れ
グルメ志向わが家のメニュー冷や奴　広島県　森川抜智

腹の立つ時は横になりなさい
お隣のカンナこちらを向いて咲き
スミレの花咲く頃男もヅカに憧れる　鳥取県　西浦小鹿

挨拶の時間ビールが知っている
香水にひかれ深爪してしまう
吐息する父の背中を押してやる　藤井寺市　楠昭子

思う存分疲れ出るまで泣きなさい
世渡りが下手で詩人に向いている
淋しくて一日ダイヤルまわす日も　京都市　渡辺圭坊

李香蘭聞くは蘇州のセレナード
木犀の香に酔い心地榕湖畔
大八師に史話を聞きたいジャスミン茶　和歌山市　前田美子

夕焼けに今日一日の汗を拭く
夕焼けに染った父の肩車
背伸びしても孫の背丈にまだ負ける　鳥取県　黒田くに子

当ってくだけろと風が背なを押す
忍の字を老母の背中でおしえられ
雲行きが悪そう補聴器を外す　静岡市　浅子まつゑ

子は塾へ学校だけが夏休み
ハンガーにぐったり掛る夏の服
つぼみ持つ鉢に多目に水をやり　京都市　小林英子

少うしの鬱も溜ってくる花芯
弾むのにさりげなく待つ珈琲館
面影がいつも棲んでるワンルーム　大和高田市　寺脇三倉

子育てを果した納屋の三輪車
新調の服は他人に値踏みされ
無印の男が僕を抜く峠　八尾市　向井しづ子

虫だより河内はあつい盆おどり
身だしなみすればきりりとする息子

スーパーに白い帽子がはやってる　十和田市　阿部　進

泥吐いたどじょう柳川なべにされ

椅子盗りにあくせくしてる宮仕え

ワープロに知らない漢字教えられ　米子市　小塩　智加恵

最高峰めざす男の太い眉

花を見てきれいと感じる孫育つ

占いはいいことだけを信じます　兵庫県　東浦　砥代

子の声が途絶えいびつになる広場

涙ちと見せて本音が隠される

残り火を集めて夫婦丸くなる　静岡市　杉山　やす

友達の愚痴を聞いてて小半日

控え目におしゃれして行く敬老会

白さぎが青田の中に二羽三羽　今治市　渡邊　伊津志

靴の向きまでは問わないエチケット

食べやすいように揺れてる山羊の鬚

退屈な番犬に花散りかかり　米子市　大田　みさと

鍵穴の向うで鬼が招いてる

危な気がないなどと嘘ついている

平和だなポストも丸いほうがいい　愛媛県　石手　武

仕組まれた見合仲人だけはしゃぐ

ブーメラン信じた僕が馬鹿をみる

満塁のチャンス煙草の灰が落ち　香川県　上藤　多織

幸不幸足の裏まで父に似る

いつからか仏に近い父の視野

シルク博会場名に古都しのぶ　豊中市　滝北　博史

待ち合わせ店の名前も青い鳥

担任は駅で毎朝会う女

いくつもの橋をくぐって海に出る　出雲市　岸　桂子

母卒寿今孝行のありったけ

一人居てやはり三時はティータイム

下宿屋に青年夢を置いたまま　倉吉市　青砥　菊枝

汗拭けば風はやさしく秋匂う

共白髪お医者通いも睦まじい

九月って無性に着物が恋しくて　堺市　神原　文

口紅を拭いてふくらす夢風船

手作りは季節失い縫い上る

名曲をごみ屋の歌と子は信じ　尼崎市　明壁　敏之

暫くと言われ借金思い出す

父母の汗を背中で見て育つ

癖のない男でどこかたよりない　鳴門市　八木芳水

ふた心分のいい方を取り上げる

衰えに同情してる重い石

幸せは今日も日の出をしかと見る　高槻市　芦田静江

タイムスリップ父の笑顔の墓が呼ぶ

飲む程に軽い男が見えてくる

栄養ドリンク半分で足る夫婦仲　兵庫県　森脇和子

喝采を受ける無口のかくし芸

絵心があればと惜しむ京の雨

俄雨いそいそ走る迎え傘　大阪狭山市　桜井荘次

花作る趣味の余生は走らない

退社ベル蜂の巣つつく更衣室

止まり木に勤め帰りの重い靴　大阪市　今西静子

知恵がなく他人へ右にならえする

ぼんやりと歩けば犬に吠えられる

旅慣れてTシャツでゆくパスポート　愛媛県　八塚三五島

風呂あがり裸であける冷蔵庫

スーツケースの女が駅の長電話

面接で人間像を洗われる　流山市　神田治

淋しくてピエロのラッパ吹きたい夜

大事にしろしろ胃カメラのひとりごと

再検査また叱られた僕の腹　岡山市　中嶋千恵子

愚痴一つ聞いて下さいお月様

何事もあなた頼りの舟を漕ぎ

千代紙が語ってくれる幼い日　鳥取県　伊吹富恵

隙をつくように税金どっとくる

背を向けて父は吐息を気づかせぬ

措敗へ涙で握る砂の音　枚方市　中山おさむ

同病の知恵語り継ぐサンルーム

減量の話題ウーロン茶を囲む

一滴の涙に弱い父だった　宇部市　中村三良

胡瓜もみ素朴に夫婦解けて住み

コマーシャルでまた騙された無駄遣い

火消壺にくすぼっている悪ふざけ　静岡市　安本孝平

独走へ影で支える妻がいる

贅食に飽きて心は飢えている

友の訃へ追慕の酒は冷やがよい　岡山県　清水悠貴女

深追いをすれば惨めになる明日

底のない井戸の深さは計るまい

追伸の一行にある深い愛　出雲市　森山健歩（健太郎改め）

踏切番いたころのどかな国だった
旗をふる反対の旗ばかり振る
笑顔ふりまいていただけ外遊終る　豊中市　三宅つえ子

親船に乗ったつもりで昼寝する
老いた船が今日も岸をはなれない
風鈴を磨いて音をたしかめる　和歌山県　田中隆積

書について

王義之にあこがれながら書く行書
良寛の書に魅せられる大家あり
崩し方知らず勝手な文字を書き　奈良市　米田恭昌

長寿国ここもポックリ寺になり
大陸の戦友を悼むや蟬時雨（舞鶴にて）
赤とんぼ飛び甲子園幕を閉じ　兵庫県　酒井靖子

弾まない毬の中味を刺してみる
独り部屋模様替えれば虹がたつ
突っ張って女の城を白く塗る　鳥取市　松本伊都子

色違い老母と揃いの扇子買う
泥跳ねて涼しい顔で車去る
鈴虫の音色脊に秋を呑む

村の顔都会の顔が盆の墓　青森県　福士トキ

虫時雨眠れぬ夜は耳ざわり
町の子の分も飼ってる兜虫　岡山県　後安ふさえ

老夫婦歩幅揃えてサツキ展
ゴキブリが二匹で私を弄ぶ
晩年の幸せもらう子沢山　茨木市　藤井正雄

各停で乗り換え無しのわが故郷
健康を買うビタミンのダース買い
ウイスキー深夜テレビが空にする　羽曳野市　福田満洲子

西日本川柳大会に参加（三句）

目覚ましを二つ始発の旅支度
乗り換えを足がもつれるほど走り
大会の熱気胃の腑を突つかれる　鳥取県　西川和子

川柳一句でてこない日記帳
ストレスを載せてスピード違反する
チームワークいいからいつも忙しい　大阪市　松永すすむ

焼鳥屋煙も匂いも味のうち
潮騒のきこえてきそうな貝の皿
消そうにもきえてくれない過去の罪　鳥取市　森山豊子

ゲートボールへ老いの情熱たぎらせる
鬼瓦時に仏の顔になる
脱サラの夕餉家族の顔揃う　和歌山市　丸岩　晏

鈴虫に読書のスピード落とされる
計算器が故障しているまた赤字
母の眼のとどかぬところ孫に菓子　藤井寺市　武部敦子

捨てたいが持てあましてるこの写真
ワープロで自分史を打つ老眼鏡
川底に桃の童話が沈んでる　大阪市　柏木八重子

風鈴の音色求めて南部鉄
鈴虫の鳴き声聞いて針仕事
八月の仏に供える蓮の花　静岡市　久保きぬ

金のいる記念日ばかり多くなり
本音から妥協ができぬ老い悲し
後向く子を叱らない参観日　鳥取市　萩原美雪

隙間風気づかぬふりをして夫婦
未来図に夫の脱サラまで読めず
ローン二十年明日の命も知れぬのに　河内長野市　大西文次

万歩計に合わし右足左足
髭剃ってみたが出かけるとこがない
衛兵の交替ロボットの真似をする　豊中市　玉井房子

サーカスのブランコにもウルトラC
諦めて白髪にしてから褒められる
願い事する間もなくて流れ星　鳥取県　久野野草

グラスから女の本心零れ出し
薄化粧妻を見なおす夕涼み
故郷の港に夕日見に帰る　東大阪市　大平太一郎

コスモスにほっと一息京の秋
娘より気取った親の披露宴
握手にも心が通うクラス会　大阪市　堀口欣一

街道をへだてて小鹿遊ぶ奈良
生駒山の頂上で小便して帰り
書き馴れた金百円のボールペン　藤井寺市　中島志洋

長生きをする気で歯科に金をかけ
精勤賞家ではとんと不精者
コツコツとバイトで貯めて空の旅　富田林市　加藤ミツエ

敬老の日

長女母さん元気と訪れる
中娘手土産もって孫つれて
末娘母さん母さんと気ぜわしく

天高く少年剣士の声ひびく　岡山県　平田　たけよ

星光る惑う心を消すように
面倒くさいといいつつ孫に負けている　兵庫県　奥野　テル

朝顔の日ごと小さく空は青
水よりも濃ゆい絆の積木積む
土壇場でふと思い出す亡母の顔　奈良県　和田　萬里

祭典の裏にきびしい警備の目
席ゆずり敬老の日をしたつもり
帽子脱ぎ年相応ですと頭かき　呉市　岡田　寿美礼

ふるさとの山陰パック海の幸
浴衣縫う授業もありし乙女の頃
書くことは心に希望の灯をのもし　豊中市　額田　明吉

雨乞神丹生川大社に詣でて

丹生中社原子発電の額あらた
戻り梅雨丹生川三社もハレ祈願
宮滝の宴の趾に古社望む　高知市　山崎　一求

助産夫に助産婦連が外方向く
正義心捨てて次第に大物に
毛の多少関係はない理髪料　神戸市　岩田　信義

老夫婦背中合わせにもたれ合い
来ぬ電話待ちつつ返す砂時計
青い靴赤にはき換え街に出る　岡山県　土居　ひでの

盃に乗せて左遷をほのめかし
停戦の日も惑わずに紅い薔薇
吸うて吐く世界がひとつになれる息　岸和田市　三輪　通彦

夏休み受験合宿する子供
割り勘と言うても知れてる屋台酒　伊丹市　猪原　石荘

少年の眼をして仰ぐ燕の巣
病院で駅で只待つじっと待つ　新潟県　高野　不二

栄転と言うには白々しくもあり
レポーターの言いすぎに腹立てて見る　岡山県　牧野　秀香

リクルート舞台裏から火がついて
さよならをつくつくぼうし告げに来た　米子市　服部　朗子

洗濯好き虹のママと子に言われ
新しい沃土のすきな花の種　久留米市　中垣　米之

熟れ切れず青い果実が落ちていく
温室を出たら礫が飛んできた　奈良市　米田　芳子

ハイポーズ写す角度はきめてある
へそくりが赤字黒字の舵をとり
八尾市　椎尾公子

冷奴わさびがきいた夏の宵
嵐山帰りは湯豆腐ときめている
鳥取市　松本伊都子

（前月分）
閑人となって生甲斐練りなおす
住みやすく改造しても息子出る
岡山県　後山江山

鐘撞けば孫が小さな掌を合せ
甘ずっぱいリンゴのサラダ乙女の日
兵庫県　円増貞子

入れてある切手に済まぬ筆不精
あれこれと思いに耽る終い風呂
吹田市　西岡豊

要領よく浮気しますと翔んでいる
どの部屋も海峡が見え茶がうまい
岡山県　富坂志重

散歩道足の様子をたずね合い
神様は返事が無いのでたより無い
寝屋川市　河合時弘

目覚ましがやけに鳴ってる雨の朝
すぎたことつい口走る自己嫌悪
島根県　松本聖子

ふと病んで書いておきたい事多し
明日もまたノルマに挑む深呼吸
鳥取市　武田帆雀

名ガイド五十男をもて遊ぶ
口下手でまた始めから言わされる
島根県　今川三津江

天候異変閏年やはりうなずかせ
庭園に毎夜たぬきの出る峰寺
泉佐野市　真崎浪速子

国を離れて日本がわかる商社マン
流鏑馬の明日を駈ける馬洗う
岡山県　伏見すみれ

義理の子が素直に母と呼んでくれ
酔わなけりゃ踊れぬ父の臍踊り
岡山県　江口有一朗

古里の土に沁み入る時報聞く
対象にへばりついてる愚を思う
大阪市　平井露芳

テレビ電話入浴中だどうしよう
ああ都会虫はゴキブリばかりなり
奈良県　横井都姫子

待つことに慣れ編み上るカーディガン
また来ると言っているよな忘れ物
静岡市　中川みつ

若夫婦愛を小出しにして平和
兄弟で意見が割れてややこしい
静岡市　青柳金吾

怪獣の名前を孫に教えられ

ヒーローの台詞此の頃板につき　熊本県　増田一乗

差し出した見合い写真は女優なみ
お祭りへ昔が残る屋台骨　唐津市　浜本治幸

バーゲンの安物買って着てもみず
長生きも薬漬けでは情ない　唐津市　中村順子

草の市ビーチパラソルさして売る
夕立ちに今日の打ち水免れる　鳥取県　木下芙葉

生んだ子が敵になって憎んでる
今日なぜか亡夫を想いて涙する　奈良市　井上大

店頭で夏が終った海水着
冷蔵庫ビールの汗を拭いて出し　吹田市　大沢宙宙

我がままを通してみたい独り占め
孫となら生き生きしてる祖父の顔　島根県　菅田かつ子

呑みすぎてふらふらします月曜日
素裸で海を泳ごう無人島　吹田市　山田里子

お互いの竈を見せる仲のよさ
針箱の古いボタンを捨て切れず　静岡市　三井三津子

草笛を吹くと二階の顔が出る
老い二人喜寿と傘寿が居て平和　羽曳野市　麻野幽玄

お返しの球は余力を見せて投げ
歩道橋農夫時折り渡るだけ　大阪市　神保拓生

デパートは子供子供の夏休み
ぱりぱりと剝がして宿の浴衣着る　出雲市　高橋きよし

トンネルと橋で記念の硬貨出来
雨降りはどこも混んでる美容院　青森県　波ただお

さあ秋だ澄んだ青空わが心
警察の本質見せるネズミ取り　岡山県　大石あすなろ

もう一歩迫ってみよう射程距離
一病でダウンしたとは情けない　富田林市　山原昭水

大空の花火にみんな口をあけ
ハイキング途中で社寺に手を合わせ　静岡市　西村千代

気疲れをたまには嫁の留守に捨て
帰らない覚悟へ女振り向かぬ　大阪市　平山和多留

新聞の訃報の年齢が気にかかる
敬老の日に招かれて気恥ずかし

近頃は主婦の定年主張して　大阪市　平山登代

事故あれば老人扱いされる年　泉佐野市　大工静子

ふと鏡姉に等しい顔になり

形身分け済まし思い出薄くする　静岡市　柳沢たま

一点を見つめて放つ弓一矢

竿竹屋声をからして呼んでいる　和歌山県　森三枝子

十人の人に好かれるむずかしさ

いい汗をかいて麦茶が涼をよび　八尾市　片上英一

夢にまで浮世が僕を追いかける

公園でのら犬の連れ昼寝する　岡山県　松本元江

死ぬまでは区切りのつかぬドラマが続く

愚痴は言うまいとても哀れに見えるから　鳥取県　鈴木芙美

さわやかな朝のあいさつジョギングす

ひまわりの風を吹かせて夏終る　藤井寺市　菊地繁男

塩味がちょっぴり欲しい患者食

義理堅く今年も梨を送られる　唐津市　入江喜久夫

センス良い老いと思えぬモダン爺

禁酒して胃は快調で食を増し　泉南市　坂根流水

散歩道老人クラブに誘われる

金出して気まま隠居も隅で生き　寝屋川市　北岡波留吉

平安の眠りが覚めぬ東山

反自由化唱え案山子田を守る　川西市　田中喜俊

甲子園目の離されぬ我が母校

電報もローマ字入りとは老いさみし　岡山県　福原辰江

眠れなくするから母に告げないで

今日からはよその娘になる宴　（前月分）　鳥取市　森山豊子

リハビリが過ぎて痛さをぶり返す

家計簿にローンがドンとあぐらかき　静岡市　丹羽定次

ひややかに見つめる女通り過ぎ

砂浜に咲いたパラソル波高し　八戸市　島田昭治

心で泣き顔で笑ってピエロめく

こぼれそなお酒くちびる突き出して　堺市　近藤豊子

泣きじゃくりやや収まって水を飲む

頬にまだ涙残して児は笑う　大阪市　桝本露児

藁屋根の庭に外車が置いてある
遺言状イの一番に妻へ謝辞　静岡市　大石たき

一点差負けてくやしいゲートボール
朝顔につられ朝寝もしておれず　大阪市　喜多佐津乃

四方山の話相手の欲しい母
結婚式祝辞頼まれまた赤字　島根県　児玉幸子

夏休み終え淋しくなって来た
秋風へ野道をよぎる赤とんぼ　大阪市　山北三三三

名古屋弁で叔母の電話が意見する
地蔵盆隣する寄附うちもする　豊中市　藤井勉

分別が秘密を増やし遠ざける
付き合いが増えてますます一人です　唐津市　野田旭恒

離れ島独り仮寝の猿と住む
宵闇に迎え火焚けば父帰る　島根県　岩田三和

車よりそこら歩いて草の花
東京の息子を起こす母デンワ　橿原市　西本保夫

ささやかな年金暮しは妻がイヤ
汗かいた努力もゼスチュアと見なされる　鳥取県　横山房子

口止めをしてた篭から秘密もれ
片道の切符を亡夫が先に買い　京都市　山脇正之

均等法言うはやすいが遅々として
財テクの話賑わすクラス会　島根県　高橋武衛

久しぶり秋の陽ざしへ土用干し
夏休み終る外孫送る駅　寝屋川市　豊福路子

降水にならず終ったキャンペーン
代々の梅壺へ秘むおんなの香　兵庫県　倉垣恵美

啄木は手を見るわたしは乳牛(うし)の顔
嘘とほんとまあるく話して孫寝かせ　島根県　喜島ノブ

硝子窓やもりが這うて日が暮れる
秋風に拗ねたとんぼが窓に入る　大和郡山市　渡部トキワ

絵心があればと見入る茜雲
商魂がリッチに囁く玩具まで　尼崎市　新井晶子

◆ジュニアの部

うさぎいただから私はちこくした
本よんで私は本の主人こう

—同人吟

秀句鑑賞

—前月号から

榎本吐来

車間距離あけて熟年の恋探る

塩満　敏

この句にあるモチーフが作者の昨今の句にかなりのウェイトを占めているように思う。実生活とどの程度かかわっているのかは知る由もないが……。「車間距離」とは言い得て妙。熟男熟女のシンボル用語であろう。

白旗の高さを潔しとする

牛尾　緑良

この句から白旗を振ることの屈辱は聞えてこない。むしろクールな安らぎをすら覚える。潔い身の処理の後には、必ずや豊かな後半生が待っているに違いない。

敗者復活時期を失したなと思う

石川　侃流洞

直線の人生を一途に信じて来た半生。そしてその挙句の蹉跌。しかしスポーツに敗者復活があるように人生にだって……。だが茜射す夕空に、この新たな発見が一体何になるというのだ……とは言い条、この句の結びに作者の自負を嗅ぎとるのは私だけではあるまい。

コーヒーの味にうるさい無職なり

玉置　重人

この無職、実は年金成金であり、財テクにもいささか長じている。天下国家を論ずればまだまだ若い者にはひけをとらない自信の塊りである。そんな彼にとって、コーヒータイムはこよなき自己顕示の場である。コーヒーの味は、実は二の次なのである。

子離れをやっとしましたイヤリング

恒松　叮紅

子離れをしたそこに、まだまだドラマの主役を演じ得るひとりの女がいる。人生八十年の真中辺に立ったばかりである。きらりと光るイヤリング。明るいほのかな息遣いが聞えてくるようだ。

刃こぼれの男へなつく猫もいる

小西　雄々

六十路の坂を踏みしめる身に、刃こぼれを否認し得る者がどれだけいるだろうか。そして自称「刃こぼれ」には、まだまだ日々の哀歓がいきいきと付きまとうのだ。膝の上の子猫が誰よりもそのことを知っている。

朝三暮四所得税減税消費税

柳楽　鶴丸

朝三暮四の猿知恵をそっくり持ち込もうとする所得税減税、消費税導入の企み。漢字十二文字の見事な組み立てに脱帽。

彼岸花亡妻に聞きたいことばかり

吉岡　美房

哀しいまでに赤い曼珠沙華に、みまかったひとの俤を重ねて、その胸のうちにわけ入ろうとする作者の纏綿たる情緒にただただ打たれるばかりである。

値段表ぶら下げているかぶとむし

新家　完司

長閑な山峡で生れた当の甲虫の全く与り知らぬこと。彼こそいい面の皮である。何でも売り物にしてしまう商魂。値札をぶら下げる甲虫のおかしみの中に、ちくりと批判が覗く。

飽食のツケをカメラに覗かれる

川島　諷云児

いくさの跡を覗いたカメラの目に映じたものは？飽食のツケを悪びれず自らをさらけ出すグルメの幸運を祈るばかりである。

御老体多忙　両国　甲子園

仲　どんたく

千代の連勝記録も追わぬばならぬ。気になる甲子園球場のどよめき。無論、その間に読書がある。作句がある。孫との語らいがある。まこと多忙なご老体。笑うように、今日も朝日がゆるゆると昇る

とっくりを寝かせてからが生きてくる

二宗　吟平

今宵の酒はまた格別。二本ばかり銚子を倒した頃合いのいつもの感懐である。傍らの妻もそこは心得たもの、何の衒いもなく同調してくれる。今日のために乾盃。まさに天下泰平である。

愛染帖

橘高薫風選

今治市　越智一水
空蟬になっても力抜かぬ脚
社公民右へ右へと寄りたがり

米子市　林荒介
兄弟で父の轍を埋めている
何回も渡った橋を糧にする

和歌山市　西山幸
秋の灯に背文字見せている聖書
ちちろ鳴く何も聞きたくない耳に

奈良市　井上大
ここまでに致しとうござるリクルート
恐喝も大儲けもやる議員秘書

唐津市　野田旭恒
短命の蟬なれば鳴けはばからず
歌手も又ナツメロ共に歳を取り

弘前市　斉藤劣
満水のダムは昔を語らせぬ
アメリカの旱魃嘆く振りをする

宝塚市　丸山よし津
人間を彫ると仏になる志功
定位置に茶碗を並べ無事な日日

米子市　新正子
叱られてそして抱かれる僕と猫
証拠品ロビーに残すシンデレラ

香川県　上藤多織
ハンガーに幾つ無念の情吊るす
また一人胸の箱から消えて行く

倉吉市　青砥菊枝
母さんと逆の女性をお貰いよ
治すとは言わぬお医者に通ってる

岡山県　灰原泰子
尽くされただけは尽くせぬ母の日に
夏帽子ちょっぴり恋もしたくなる

名古屋市　藤井高子
夫婦とは綱引きしてるようなもの
手になじむ湯呑みくらしは中の中

大阪市　島路太郎
天の邪鬼ひれ伏すさまに酔うている
十八の娘のシャツを着て古稀という

岡山県　江口有一朗
下手なりの習字無心の境に入る
一の字の気合暮らしに取り入れる

堺市　桜沢あか里
草を抜きながら反省しています

島根県　堀江正朗
あの頃の紅葉の彩が生れない

寝屋川市　宮尾あいき
雨雨雨下界のけがれ洗うかに

兵庫県　倉垣恵美
時と時結びつないで虫の鳴く

米子市　川上より子
ピエロ出合うてお互いの影いとおしむ

唐津市　浜本義美
老残の縮む暦はめくるまじ

弘前市　波多野五楽庵
お隣の案山子を好きになる案山子

米子市　政岡日枝子
桃太郎お前を産んだ日は嵐

仙台市　川村映輝
汗した金汗せぬ国を助けてる

黒石市　相馬一花
ひょっとこの顔で西瓜の種子を吐く

鳥取県　江原とみお
宿敵も古い木馬にのっている

米子市　田中亜弥
ひと握りの米を老母への粥とする

鳥取市　武田帆雀
リモコンを寝て押す文化とは是ぞ

飯山市　斉藤昌平
腕相撲してる間はまだ他人

米子市　八木千代
夢一夜あなたのごはん炊いていた

和歌山市　後藤正子
臨月のように心が疼くなり

箕面市　椎江清芳
追い越して下さい老婆乗せてます

静岡市　渥美弧秀
故郷が無性に恋し遠花火

川西市　野村静雄
心変りヘワープロで責めてくる

唐津市　田口虹汀
何一つないが齢だけ主幹なみ

出雲市　森山健歩

自己破産どっこい結構飲んでいる　鳥取県　新家　完司

そもさんと大きな岩にせまられる　唐津市　仁部　四郎

百ほどの名字活きてる妻籠宿　唐津市　山口　高明

魂を入れて彫師の頬が削げ　鳥取県　乾　喜与志

息抜きか時々惚けているらしい　和歌山市　神平　狂虎

菫色の瞳で逢いに来る小鳥　和歌山市　堀畑　靖子

人恋し肌をピンクにするワイン　米子市　茂理　高代

白すぎるベッドが恐くなりました　豊中市　上田　登志実

毀誉褒貶かかわり知らぬ昼の月　西宮市　松本　一郎

背もたれのないうどん屋の丸い椅子　八尾市　片上　英一

美々卯よし立食いもよし鰛鈍党　米子市　小村　てい子

晩年の絵には灯りをひとつ入れ　大阪市　亀井　円女

気儘同士で匙を投げたり拾ったり　和歌山市　古久保　和子

有象無象流れて川の色になる　米子市　服部　朗子

もう一度生きるまっかな落椿　豊中市　田中　正坊

花一つえらばば椿　忍冬忌

月の出を待つ間に酒宴果てている　滋賀県　久保　和友

面影を抱いて場末の安い酒　和歌山市　山川　克子

四捨五入砂の足場にいつも立ち　鳥取県　松下　たつみ

有能な通訳だから嘘も言う　海南市　三宅　保

夜も更けてポストに入れたラブレター　豊中市　滝北　博史

動かない夫も金魚も倦怠期　寝屋川市　平松　かすみ

子も孫もテレビも母の眼に映る　九十歳の母手術開眼　岡山県　小林　妻子

爪楊枝と遊んでいる生返事　広島市　流　奈美子

初盆の蠟燭の灯を眺めつつ　長兄の一周忌　廿日市市　森川　抜智

医師は止め僧侶は煙草ふかしてる　今治市　月原　宵明

窓の蝶約束事はしていない　姫路市　大原　葉香

愛なんてそんなところに落ちてない　鳥取県　土橋　螢

落書の当て字にハタと膝を打つ　和歌山市　青枝　鉄治

人前で転び達磨の起き上がり　和歌山市　田中　みね

秋の図よ斑の小牛萩の花　吹田市　栗谷　春子

ひと夏が過ぎて大人になる少女　和歌山市　森　茜

聞かずとも美しく生きたまなざし　大阪市　渡辺　さと美

二人のこと二人で話すやっとふたり　和歌山市　桜井　千秀

半分許して後半分にある祈り　和歌山市　福本　英子

子を生めず大切に抱く泥人形　鳴門市　八木　芳水

深い訳などはないのよ低い腰　大阪市　中西　兼治郎

指欠けていても野仏ありがたし　寝屋川市　堀江　光子

殿方の様に拭きたい顔の汗　尼崎市　春城　年代

ひとつ事に炎えて趣味とは深なさけ　米子市　光井　玲子

木守柿の情けカラスも分かるだろ　平田市　久家　代仕男

抗議文赤いポストが押し戻す　西宮市　奥田　みつ子

選ばれた訳は聞かずについてゆく　和泉市　岡井　泰雄

一片のメダルに千万金を出し　豊中市　江口　明光

本棚がまだ空いている応接間　河内長野市　植村　喜代

教えにはそむいています世が変り　大阪市　山北　三三三

権力の座につく猫を虎にする

米子市　金山夕子
ふるさとの話をするといい匂い

米子市　小塩智加恵
履きなれた靴できままな二人旅

米子市　林瑞枝
置きざりにしないでおくれ野の風よ

守口市　森川まさお
よそゆきで倉庫の間の路地通る

大和高田市　寺脇三倉
ヨーイドンそんな人生など嫌い

岡山県　山本玉恵
もう良いかい長いねむりが覚めてくる

岡山県　矢内寿恵子
一灯を残して闇を深くする

川西市　松本ただし
チクタクと尺取虫の渡る枝

笠岡市　松本忠三
ライバルが二足の草鞋履いて来る

大和高田市　加藤松次郎
亡父の齢父の悩みが解りそう

大阪市　塩田新一郎
日程は薬基準の旅行かな

和歌山市　山口三千子
夫には扶養されてる影法師

今治市　矢野佳雲
もう浮気すまい夫も惚けている

伊丹市　猪原石荘
遠足の列キャラメルの匂いする

奈良市　米田恭昌
都会にも故里があり櫓組む

鳥取県　西浦小鹿
札束に一枚岩がくずれ出し

和泉市　西岡洛酔
十円で足りる夫婦の合言葉

伊丹市　樫谷寿馬
夾竹桃未練を汚れたものにする

米子市　小西雄々
海へ出る雨水耐えることばかり

豊中市　辻川慶子
一桁の昭和も遠くなりました

島根県　堀江芳子
ガンバッタ夫に敬老招待状

藤井寺市　福元稔
耳遠いふりし金策には乗らず

尼崎市　春城武庫坊
キリンの首の中程からが秋になる

和歌山市　丸岩晏
野地蔵の伏目の先に蟻の列

茨木市　堀良江
父親似髪かき上げる手つきまで

豊中市　三宅つえ子
女まだ残る帽子にリボン付け

堺市　高橋千万子
返事とは別な答を顔がする

出雲市　久谷まこと
善人の裏は悪玉とは言えず

相生市　中塚礎石
年金になって水虫住みつかず

東京都　吉川一郎
雨となる雲を見上げて旧街道

和歌山市　玉井豊太
コーヒーに熱い返事を溶いている

大阪市　町田達子
相合傘雫は虹の色になり

唐津市　中村順子
秋めきてジョギング増えし朝の土堤

藤井寺市　武部敦子
ワープロで老後楽しく若がえる

熊本県　高野宵草
もうあきらめたなと三面鏡が言う

米子市　白根ふみ
電話口虫の音もいれトリオにす

岡山県　千原理恵
それからを言えばあなたを傷つける

大阪市　桝本蕗児
入試時期過ぎても絵馬は掛けたまま

＊

投句先　〒560　豊中市中桜塚3丁目13—15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題「遠い」　選者　**橘高薫風**
締切　**11月10日**
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3—43
NHK大阪放送局〝ふれあいラジオセンター〟川柳係

発表　11月27日（日）ラジオ第一放送
午前11時5分から

女性コーナー

黄香の忠

八木千代選

花火錯乱　老い先などは考えず　堺　高橋千万子

ふっと思ったのは「繚乱」のほうがいいのでは、一度は直してみたのですが、花火をながめている側からは夜空に絢爛と咲く火の花であっても、自分の身になってみれば正に一発勝負、花火師の入念な作業と誇りある技術とを、ただ一瞬に賭けて今だけに生を燃やし切るのなら風に流れるのも、不発のまま海に沈むのも覚悟の上の打ち上げですから「錯乱」のほうが適当みたい。そんな言葉にこだわるより、このみずみずしい感覚と老いのはなやぎと達観のいさぎよさ。千万子さんに見習うことがいっぱいで、私まで次元を高めてもらえそうになります。

わたしの秘密ひとのひみつも墓場まで　和歌山　松原　寿子

意識されたのではないでしょうが、寿子さんの句は変わろうとしています。原点は相聞の歌であるにしても、「秘するが花」と私には思えるのです。情感も技量もじゅうぶんな作者の此の真情の秀作に拍手を惜しみません。「ひとのひみつ」という大切な言葉を中心に据えていい世界に誘ってくれて、墓の下まで沈めてゆく女ごころは今までの炎のような句よりもなまめかしく、怨があります。

奥の手はきっとすべすべ白い手だ　寝屋川　岸野あやめ
死んでやるなどと勿体ないことを　西宮　林　はつ絵
切腹の座が頂点に置いてある　和歌山　森　茜
ものさしの大きい方で明日は会う　兵庫　倉垣　恵美
原因は袋ゆるめた方にある　米子　石垣　花子
おりて来る梯子をじっとじっと待つ　米子　林　瑞枝
浄土への途に飛び石置いてある　佐賀　寺中三枝子
学童疎開からの自信で生きてきた　羽曳野　福田満洲子
休耕田せめてコスモス見て下さい　大阪　堀　いくの
雨しきり　猫とそれぞれ食事する　米子　政岡日枝子
ちょっと静かに牛が何かを言っている　鳥取　広本　文子
そくそくと両肩を打つ風のあり　名古屋　藤井　高子
まんじゅしゃげ　鬼の柩を守り抜く　和歌山　田中　輝子
花の水替える　私の存在だ　大阪　西出　楓楽
夢だけを売ってもおれぬ風船屋　西宮　奥田みつ子
神さまの答はいつも突然に　大阪　神夏磯典子
やさしさに飢えて大きな声を出す　和歌山　後藤　正子
いい顔で発酵を待つパンの生地　寝屋川　稲葉　冬葉
軒貸した鳩の帰りを待っている　大阪　田中　弘子
一本杉の鬼がときどき振り返る　羽曳野　吉川　寿美
大根をスパッと斬っている自虐　富田林　藤田　泰子
待ち呆け　それでもわたし待っていた　和歌山　西山　幸
悔いたまりたまって実柘榴が裂ける　藤井寺　高田美代子
雨続きバイオリズムは信じたし　高槻　河瀬　芳子
寝巻き三枚買うてきちんと置いてある　河内長野　植村　喜代
ご命日　虫の自殺をくいとめる　島根　松本　文子
たくさんの親戚がいて狂われず　松江　竹内寿美子
もう尻尾ふらぬと決めた白い犬　米子　大田みさと
私には許すことなどありません　吹田　栗谷　春子
少年が拭きそうじする　ひたむきに　竹原　信本　博子
キリストの許しに甘え罪多し　米子　茂理　高代
足跡の消せる範囲で生きてゆく

妻の名を被せて夜叉になり難し　倉敷　小野　克枝
水平線　空から船の生まれ来る　和歌山　湯浅　由梨
姿見にもう自己暗示通じない　広島　流　奈美子
一人見る闇のむこうに誰かいる　米子　新　正子
わたくしを試しているか菊の鉢　和泉　中川　楓
ていねいに月に書いてるメッセージ　米子　金山　夕子
仮面かな　右は柔和に彫ってある　富田林　田形　美緒
曼珠沙華　やすらぐ葉っぱ欲しかろう　鳥取　羽津川公乃
ポケットに笑い話をためておく　米子　青戸　田鶴
偽りがへたで珈琲ほろにがし　松原　佐藤　藤子
まだほかに道があったのかも知れぬ　尼崎　春城　年代
気晴しに買ったパズルに試される　大阪　鈴木　節子
しぼり出すチューブへ少し思いやり　大阪　鍛原　千里
せみがらを埋めて又咲くさるすべり　八尾　向井しづ子
言い訳の貧しいこころ汲んでやる　岡山　矢内寿恵子
神様は返事無いからたよりない　岡山　富坂　志重
細腕に仕掛け花火がおもすぎる　堺　山本　半銭
濡れ落葉　未来の不安つきまとう　貝塚　池田寿美子
俎のリズムに命ときめきぬ　岡山　山本　玉恵
こだわりを引きずってきた縄目の乱　倉吉　淡路ゆり子
自己主張できぬ科白が病んでいる　岡山　灰原　泰子
おじぎ草　おじぎばかりを強いられる　岡山　千原　理恵
刃こぼれを研ぐ　妻として鞭として　兵庫　東浦　砥代
意地悪なおとし穴に綱張ろう　八尾　宮西　弥生
いいじゃない肯定否定ひっくるめ　和歌山　桜井　千秀
朝顔も夏の噂も小さくなる　西宮　西口いわゑ

私の中に私も知らぬわたし　茨木　堀　良江
空っぽのボトルの名前消してない　鳥取　小谷美っ千
最終便　これっきりとは思わない　堺　桜沢あか里
目に見えぬ大事なものが欠けて行く　米子　野坂　なみ
まる顔に夢二の女　きどれませぬ　和歌山　木本　朱夏
露天風呂　月を抱いてるつかんでる　大阪　松尾柳右子
化身かも私の胸で動かぬ蝶　姫路　丁坪サワ子
あと一つ父を見送る役目だけ　米子　小塩智加恵
みそ汁の貝の模様も話題なり　守口　結城　君子
留守の夜も半分に寝るセミダブル　奈良　横井都姫子
寝不足へ朝のブランコ揺れやまぬ　和歌山　福本　英子
ブランコに月とすわってローレライ　米子　小村てい子
たよりない根で咲かせます　赤い花　鳥取　さえきやえ
胃腸薬はなさぬ人と差し向い　大阪　津守　柳伸
振り向いたのは愛想づかしのこのわたし　倉吉　青砥　菊枝
あなたには素直になれる　好きだから　和歌山　山川　克子
神仏の前で変身するわたし　青森　福士　トキ
おじぎ草優しく育て孫たちよ　姫路　都里　遊光
逃げ水と知っても少しある未練　岡山　清水悠貴女
遠花火　わたしの実相かもしれない　出雲　園山多賀子

この一年間のご支援ありがとうございました。伸びるべき芽が伸びている、そんな感触を頂いています。ほんとうにありがとう。ありがとう。　八木　千代

◇

1989年1月号から選者が交代し、小出智子氏が担当いたします、投句先をお間違いなきようお願いいたします。
ハガキに雑詠3句　11月10日締切
投句先　〒544　大阪市生野区勝山南1—18—10　小出智子

川村好郎氏を悼む

昭和63年9月4日　歿
9月5日　告別式

限りなき遍歴

高杉鬼遊

九月五日の昼前だった。たまたま駅で一緒になった西田柳宏子、板尾岳人両氏と、故川村好郎師の告別式へ急ぐ。去年、好郎師の奥さんが亡くなられ、告別式があった高石葬儀所は、来て知っているつもりだが、式の時間に遅れた焦りもあって意外に遠く思った。何時かこの日の訪れることは心の何所かにあったものの現実となってみると哀しい。

人は人との出会いによって、人生絵図は描き変えられる。川村好郎師は、私にとって百八十度、精神を好転させてくれた恩人である。

高石市の自宅から南海電車、還状線、近鉄電車、バスと乗り継いで、大阪府立羽曳野療養所まで、私たち入院患者の川柳サークルのご指導に毎月一回、定期的に通って来て下さった。何のお礼もない自弁のご芳志である。

会社人間にとって病院とはこんなとこか、サークルとはこんなものか、川柳とはおもしろいものだぐらいに思っていた。しかし、一年半の入院生活は、私に別の世界の存在を教えてくれた。

「明るい句を作れ」と言われても、性格上どうしても深刻ぶった内容や表現になってしまう。また、「川柳は人間陶冶の詩だ」と難しいことを言われると、ユーモアからかけ離れた道徳か教訓的な句になってしまう。しかし、それは後になっての推察だが、入院療養中の者を減入らさないための配慮であり、また、宗教家としての厳しい精神主義をもって川柳に対峙しておられた姿勢でもあった。

千日前の自安寺で〝どんぐり川柳会〟が開催される。昭和四十二年三月句会のことだった。退院後、好郎師から誘われ、初めてOB会に出席した。同じ時期に退院した黒田マサエさん(真砂)の顔を見て緊張がほぐれる。選をされる先生方の他は、みな療養所出身の先輩諸兄姉である。和やかな雰囲気が初めてお会いする距離を感じさせない。一夜にして何と好郎ファミリーの一員になりきっていた。生死を共にした戦友とは違った同好の士として話題が弾む。療養中の楽しさが社会まで続くとは想像もしていなかった。

告別式は、金光教の儀式によって執り行われ、玉串奉奠がとりすすんでいる。

〝消えるから雪は刹那を浄く舞い〟の拙句を、川柳塔賞に推薦して下さったのも好郎師であった。遺影の目が万言を秘めて語りかけてくれる。想えば遠くて近い道のりだった。好郎師と宮西弥生さんと三人で米子皆生温泉へ行ったこともあった。八木千代さんの紹介で松林の庭がある一室で、山陰名産の蟹をつついた一夜がよぎる。

川柳に先生は要らない、と広言を吐く川柳人がいる。川柳そのものは先生がいなくても、

見よう見まねでそれらしきものは誰にでもできる。しかし、内在するこころは人間の深さにほかならない。その精神は、師によって継承されるものではないだろうか。よき師に出会えたのは、何よりのしあわせ者である。

最後のお訣れに柩の蓋があけられた。私は永遠に、好郎師と一緒に生きてゆくため、今のお訣れを断念した。

さてとなれば逃げる卑怯を男持ち　好郎
何処までも追いかけてゆく雲の峰　鬼遊

好郎先生の思い出

谷垣史好

好郎先生がだいぶお悪いというので吸江、一二三両氏と三人で東羽衣のお宅へ見舞いに行ったのは六月十一日であった。生憎、先生は前の晩、神経が冴えて眠れなかったとかで、ちょうど昼寝をされていた。無理にお起こしするのもお気の毒だからと、階下の応接室で家族の方から先生のご様子などお聞きした。小一時間経っても、目を覚まされない。そこで三人で寄せ書きをし、おいとますることにして、せめてお顔だけでも、とそっと二階へ上がり、寝室を覗いた。寝巻姿で横臥しておられた先生のお顔が入口の方に向いていて、何だか小さく、おやつれになったように見えた。「さようなら」私は口の中で小さく呟いて階下へおりた。

思えば昭和三十五年春、羽曳野病院のどんぐり川柳会で川柳のイロハを教えていただいて以来、四半世紀もの間、まるで影法師の如く先生の後についていった。多数の門下生の中で終始、一番近い距離で接していたのは江城修史さんと私とではなかったかと思う。近かっただけに先生のいろいろな面を垣間見て、時には腹を立て、時には愚痴を言いながら…。

先生が喜寿記念に出版された句集「遍歴」（昭54年）は、とりわけ思い出が深い。この句集は、先生が予め自選された七百五十句を弟子の吸江、酔々、鬼遊、私の四人で共選、編集・装釘は私が担当した。細かいことはおっしゃらず、二つだけ注文を出された。一つは〝本はスマートに、瀟洒に〟。これはいいとして〝出来上がるまで絶対内緒にすること。記念句会はやらない〟といわれたのには困った。川柳塔副理事長という立場もある。恩師だからといってハイと言える話ではない。しかし、先生は「わしのしたいようにさせてくれ」と頑張って譲らない。

そうして十一月の本社句会（当時は金属会館）の、それも閉会間際に、会場出口に机を並べ、句集を積み上げ、出席者全員に配った。皆さんの驚いた顔、あっけにとられた顔。先生ひとり、してやったりのご様子だったが、この電撃作戦、いま思い出しても冷や汗が流れるのである。

グルメの先生には、随分おいしいものをお相伴させてもらった。あわびが大好物であった。お気に入りの宗右衛門町の「大萬」に行くと、黙っていても、真っ先にあわびが出た。酒の呑み方はせっかちで、盃をなめるようにゆっくり味わいたい私は、いつも苦情を言った。それでも「おい！」とまだ酒の残っている盃に酌ごうとなさるのである。気のおけないところで、おいしいものをちょっといただき、さっと切り上げる、そんな雰囲気を好まれていた。

九月五日の葬儀は小雨の中、高石斎場において金光教の儀式で営まれた。式場と火葬場が隣り合わせになっていて、名残りを惜しむいとまもなく厚い鉄の扉の中へお棺は消えてしまった。せっかちな先生！

合掌

―句集『遍歴』より

試作品として長男に生まれ
妻の夏洗うては干し洗うては干し
手袋の片手のような妻であり
思い出の道は避けたし通りたし
うしろから見るべきものか女
春雨へ女房と濡れるあほらしさ
桜なら堺刑務所いま見頃
川田順みてみなはれと励まされ
ありがたく残務果せと喜寿給う

好郎先生の晩年

藤井　一二三

川柳の第一線を引かれてからの好郎先生は夫婦互いに労りあいながら、老いの人生を楽しんでおられました。お宅まで自転車で約四十分の距離でしたので、川柳の話や世間話をしにたびたびお邪魔しました。大変、喜んで頂き、帰りには駅前近くまで送って下さいました。

川柳以外すべて頼りきっておられた奥さんが、昨年十一月突然亡くなられたことは、大変なショックだったようでした。幸いお嬢さんと一緒に住まわれたものの、寂しさに耐えられなかったのでしょう。六月頃笠原吸江さん、谷垣史好さんと共にお見舞した時も、二階でひっそりと眠っておられましたので言葉もかけずに帰って参りました。

毎日の散歩も日増しに減り、遂には床に就かれるようになりました。しかし、明治生れの気骨と言うか、弱味を見せるのを嫌われ、見舞は遠慮するとの言伝でした。

だが、どうしても気にかかり、高石の今西病院へお見舞しました。死去される十日程前のことでした。付添いの人の話では、意識のある日とない日があるとのことでした。「先生、しっかりして下さいよ」と手を握ると、無言で手を握り返されたその温もりが今も残っています。点滴だけで生命の灯を点し続けておられただけに目は閉じられたままでした。お好きだったので持参したコーヒ入りの氷果を私が帰宅後、スプーンで口元へ持ってゆかれたら、点滴しか受けておられなかった先生が、口で吸って喉へやられたとお嬢さんからお礼の電話がありました。

九月四日の早朝、眠るような大往生を遂げられた先生の死は、「死ぬ時は死ぬが宜敷く候」と述べられた良寛和尚の言葉そのままに天寿を全うされたものでありました。神に仕え、川柳を友として、静かに人生の幕を閉じられた川村好郎先生の生涯を、時には羨ましくも感じる次第です。きっと今頃は、彼岸花咲く天国への道を、例の早足で急いでおられることと思います。

合掌

「どんぐり句会」の思い出

笠原　吸江

羽曳野市に府立羽曳野病院がある。今は、鉄筋の堂々たる総合病院であるが、昔は木造二階建で、結核専門の病院として知られていた。当時、結核は不治の病として、入院すると最低一年は退院できなかった時代である。

病院では患者の無聊を慰めるために、短歌・俳句・川柳・書道等の文化活動を許していた。川柳部門では私の入院した時(三十四年)は、川村好郎先生がその指導に来られていた。会の名は「どんぐり川柳会」といわれていた。川柳を知らない者ばかりで、どんぐりの背競べからきたのかも知れない。

先生は総合病院になるまで約十二年間、堺から電車・バスを乗り継いで、しかもすべて自弁でお出でになった。その間、教えを受けた人は相当の数にのぼったことと思う。大部分の人は入院中だけの楽しみとされたのが多く、私もその一人だったが、退院後、先生から度々の手紙を頂き、続けるようにとのお勧めにより今日まで続けているが、それは私一人ではなく、大勢の人にもそうされたことと思う。

病院の「どんぐり」もその後、よい薬ができ、入院期間も短かくなり、段々と受講人数も減った。先生は一人になっても続けるとの意気込みをもたれていたが、病院改築により文化活動が中止となった。そこで、先生は退院後も川柳を続けている連中を集めて「どんぐり」OB会を始めたのが三十九年四月で、最終が五十六年六月まで十七年間、病院時代を合わせると実に三十年間、「どんぐり」は生きて来たのである。

OB会の常連は、鬼遊、史好、酔々(故人)、岳人、修史、悦郎、吐来、喜風、弥生、真砂

の諸氏、OB以外では、村田瓢太氏(故人)もよく出席された。この期間に現在の川柳塔の中核をなす人たちを育て上げたことになる。思えば川柳塔に残した足跡は、決して消滅しないであろう。

なお、先生は金光教の教師の資格をもっておられたので、その信心があったればこそ、ここまで尽くされたのだとも思われる。

茲に謹んで感謝の意を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

どんぐりを数多落して大樹枯る　　合掌

好郎先生を悼む

宮西弥生

講師川村好郎先生と羽曳野病院どんぐり川柳会で始めてお会いした。先生は、元来生真面目と一徹さで指導され、会は沢山の会員で盛大なものであった。常に、出席者の多少を案じられ、「たとえ出席者一人になっても続けます」とおっしゃる情熱家でもあった。

私が退院したある日、私の家へ電話をいただいた時のこと、電話に出た父で我が家は突然にパニック!! 「娘にふさわしくない」と誤解と拒絶。先生にご迷惑をおかけしたことであった。先生は退屈な私を案じられ、南大阪川柳会や本社句会へのお誘いであったのに。

又、先生と大萬川柳は有名で、川柳塔社の最も大きな春のイベントでもあった。とうとう第一位連続の花梢さんには勝てなかった。今にして思えば、先生は常に女性を身近なものにされ、好みのタイプの女性の渦に満喫しておられたのである。

長寿の秘訣は、常に「好奇心と女性」とある。先生は長寿を全うされたのである。そして常に用心深い面もあり、ある日、オーエスケー川柳句会に出席の際、先生は「少し風が強くて寒いので風邪を引くといけないから、予防に風邪薬を呑んだら調子が悪い」と時には間の抜けたことをおっしゃって笑ったことである。

先生と女性はさることながら、別にお好きなものにコーヒーがある。どんぐり川柳会と富柳会と、常に行動を共にした頃があった。そして帰りに同じパターンでいつものメンバーだけで、お茶を飲みに行くのであるが、どうしたわけか誰も寄って行かなくなった。とうとう故美代さんだけが先生の後について、ご機嫌を損じなかったという美談もある。

ふりかえれば、私の今日あるのも先生と出会いを共にしたことで、有難く感謝しなければならない。そして一層の精進が、先生の霊に報いることであろうと思う。

気がかりも残さず天寿ゆく旅路
極楽で天女とコーヒと川柳と　　合掌

追悼　児島与呂志

好郎先生のご逝去を吸江さんに伺い、驚いております。先頃、川柳大阪の私の回顧の昔のままの写しを喜んでいただいたのに残念です。

逝く時も兎と亀の柳話にて　　与呂志

京都塔の会秋の吟行句会
二百回記念句集発刊句会

とき　**昭和63年11月27日**(日)
集合　午前10時半、京阪四条駅
　　最北口路上
順路　白川南通—たつみ橋—切通し—
　　花見小路—安井神社—建仁寺
　　禅居庵
会場　
兼題　笠・珍しい・柵(さく)
会費　四、五〇〇円(予定)
申込　11月15日までに松川杜的あて

主催　京都塔の会

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

福本英子

いよいよオリンピック開幕の日、どさっと水煙抄秀句鑑賞用のゲラ刷りが届きました。暫くはテレビもお預けで皆さんの良い句を鑑賞させていただきました。

余程よい電話か笑顔美しい　木本如洲

微笑ましい句、きっと綺麗なお嬢さんの横顔にうっとりなさったのでしょう。

生真面目が取り残されたかくれんぼ　宇野昭代

「かくれんぼ　誰も探しに来てくれぬ」良い句がありますね。生真面目で取り残されるのもどちらも心細いことと思います。

焼餅を焼いた胃袋ふくれ出し　沢田きん

焼餅の焼きすぎも困りますが、胃袋の方もどうぞお大切に。

「愛してる」何度聞いてもいいひびき　笠嶋恵美子

何度も聞けるなんてお羨しい限りです。女冥利につきる恵美子さま。

器用な言葉につい騙される鼻の汗　木村たけし

きっと真面目なお人柄でしょう。鼻の汗がよく効いているように思います。

鍋の中秋にぎやかにしゃべり出す　新正子

稔りの秋ですね。松茸を中心に豊富な材料の鍋を囲んでお喋りの弾む輪、楽しいお仲間に入れて下さいと言いたくなりました。

三枚におろせば男に形が無い　高田美代子

男性の方々どうぞご用心遊ばしませ。

定退の我が家毎日暑いこと　高野宵草

女の方の句だったら、また違った面白さの出る句だと思います。粗大ゴミにされませんように。

一つ消え一つ生れる迷い雲　安田志津

お迎えの来る日まで人間迷いつづけるのでしょうね。昨日身近な人を見送りました。迷える中が花だとつくづく思いました。

老いらくの恋ステップを踏み違え　中塚礎石

少しぐらい足を踏んづけたって許していただいて、ワルツにタンゴに青春を謳歌して下さい。平均寿命がうんと伸びています。

湯上りの老妻なにか塗っている　木下義嗣

老妻のなにかに惹かれます。「雀百まで」幾つになっても女を忘れない奥様、そして優しく見守っておられる旦那様、お二人でいつまでもお幸福に。

自慢にも恥にもならぬ縄をなう　宮武まつ女

心やさしい女の方ですね。出しゃばらず、邪魔にもならないようにとお心遣いきっと皆さんに可愛がられておられるまつ女さま。

情報を仕入れる先は縄のれん　阿部進

十和田の方はもうお酒の美味しい季節でしょう。オリンピックの情報から会社の民間人事まで、いろいろの話題を沢山仕入れて下さい。そして紅葉の素晴らしい十和田湖、奥入瀬の景色を肴に今夜も縄のれんで。

のぞき込む患者へむずかしそうに書き　高野不二

お酒も煙草も止めて下さい、なんて言った手前、にこにこカルテへ書き込む訳にもゆかず、お医者さまも気を遣われることでしょうね。

鬼よりも怖い天下の内申書　新井朋子

天下の内申書には恐れ入りました。本当に怖いですものね。でも朋子さんはきっと大丈夫、川柳を続けているゆとりがとっても大切な落着きをくれますから、高校受験まであと一息元気で頑張って下さい。

良い句、沢山残してごめんなさい。

句評リレー

九月号から

水粉千翁
波多野五楽庵
久家代仕男
阿萬萬的

鰺一尾　貴公子然と売れ残り

谷垣史好

千翁　生臭い魚と貴公子を組み合せて、しかもそれが売れ残ったという一句ですが、句全体からの川柳的な価値を認めます。貴公子然にその穿ちを感じます。

五楽庵　空間を置いて鰺を強調された手法に敬意。大衆好みの鰺が毅然たる態度でいるところにうまみがある。

代仕男　五、六年前まで幻の魚として珍重された鰺、青金色に輝く鮮度のいい鰺は正しく貴公子然。一匹だからよけい人目を引く。いつもながら史好さんの慧眼に敬服します。

萬的　川柳は人間であると紋太さんが言っておられたが、その通りでこの句を読んでいると自然に史好さんの姿が浮んで来ますね。鰺と貴公子、全くうまく言い得ていると思います。

千翁　〝鰺一尾〟と〝貴公子然〟と〝売れ残り〟の三段階で一呼吸詩川柳となっていますが、やはり私としては〝鰺〟に大きな動きを感ずるのが心残りです。

五楽庵　読みかえしてみると底辺にユーモアを感じるのです。しかも格調の高いユーモアが。おそらくは史好さんの内面に秘められた人間性が句に表現されたと受けとれます。

代仕男　定退二ヵ年前まで食品流通動向調査を担当し、数多くの魚屋さんを見て参りました。大きな真鯛には王者の貫禄、真鰺にはたしかに貴公子さがあるように思いますので実感句として素直に受けとめます。

萬的　この句から五楽庵さんが新しいユーモアを感じられたことは驚きです。これが本当の意味での詩川柳なのかも知れませんね。

パンドラの箱にしましょうマイホーム

平松かすみ

千翁　パンドラはきびしすぎるマイホーム例です。目を引こうとする川柳の姿には敬意を表しますが、川柳の間口から奥行きを考えますと考え直したいとも思います。

五楽庵　ギリシャ神話のパンドラの壺に残されたのは希望であり、遂にその希望を取ることが出来なかったというのがパンドラの内容です。かすみさんはパンドラを逆にとったみたいですね。

代仕男　平凡な平和なマイホームに少し倦きて刺戟と冒険を求めている夫婦像を垣間見る思いがします。

萬的　ゼウスがパンドラに持たせたのは、あらゆる禍を詰め込んだ箱で、千翁、五楽庵さんの言われたとおり少々無理を感じますが。

千翁　やはり表現過剰ですね。

五楽庵　パンドラの箱を持って来た詩的感覚はうれしいのですが、マイホームとどうして結びつけるかが問題です。やはりマイホームには暖かさが必要なのだと思います。

代仕男　皆さんのご意見に同感です。

萬的　先ずパンドラの箱で目を引きつける、句会向きの句です。そして希望に満ちているはずのマイホームと結びつけ、何故かちぐは

ぐな感じがします。同意しかねる句ですね。

骨壺をせともの市で見つけよう

高杉鬼遊

千翁　何でもない一呼吸の表現ですが、そのひとり言が骨壺であること、せともの市で見つけようと訴えるところに並み並みならぬドラマを感じます。

五楽庵　死を見つめた上でさらりと言ってのけられる達観が感じられます。川柳と人生観を結びつけた悟りの境地なのでしょう。

代仕男　骨壺一つに葬儀屋を煩わさなくても、自分の気に入った壺は自分で探してくれば一番いいとは鬼遊先生らしい達観。思わず唸りました。

萬的　五楽庵さんの死を見つめた上での達観とは私は受け取らなくて、自分の今後をがらくた市の中で見つけようとする態度、そこに骨壺を持って来たのは慧眼だろうか、目立ちたがりやの言い過ぎだろうか、私には疑問が残っている。

千翁　〝ひとり言句〟というのは川柳では大切な表現の一つです。この句はひとり言の中に汲めども尽きぬ人間の心を感じました。

五楽庵　昔、武将たちが茶壺と信じて骨壺を買い求めた話がありますが、私はなんとなく鬼遊さんは骨壺と知っていて花を活けるのではないかという気もするのです。

代仕男　兎角、ものごとを杓子定規に考えがちな人の常に対する忠言として、私は受けとめたいのです。

萬的　うーん。骨壺を自分で見つけようとは達観とは受け取れませんね。自分の死後は自然の成り行きにまかすのが本当の悟りの境地で、余りにも未練がましく私は感じたのですがね。

休火山親しみやすい貌になる

林はつ絵

千翁　その通りだと思いますが、朝夕それを見る側と、我々のように見る機会のない者との感覚の違いがあることはどうしようもありません。これが「活火山」ならそのどちら側にもきびしさと親しみが倍加するようです。

五楽庵　休火山は擬人法による老父かもしれないし、恩師かもしれません。そう読んでゆくとこの句の意味が盛り上がって来ます。

代仕男　有能の士が長欠後療養を兼ねての半日勤務にある姿を想像してみました。山そのものでは少し平凡です。

萬的　五楽庵さんの言葉で言い得ていると思います。

千翁　五楽庵さん、萬的さんの言う擬人法からの考え方結構と思いますが、私の作句観念から言いますと、いわゆる説明句の域を出ないと思いました。

五楽庵　顔が貌であるところに休火山以前のきびしさを感じます。字の違いによって色々な顔になる面白さです。

代仕男　全くその通り。

萬的　何度かの爆発によって形が整って来た富士山のように、年老いてまるさのできたご老人を言いたかったのでしょうが、休火山では言葉が違うのじゃないでしょうか。それにしても千翁さんの言葉通り説明的ですね。

古書高く古本安し秋が来る

福元みのる

千翁　灯下親しむ中でのそれが古本での価値観と、ただの古本であるための価値観を川柳的に表現されたのがよかったと思います。

五楽庵　中七字の安しが句を弱くしているのではないでしょうか。古書高く古本安く、そんな感じもします。何の流れが切れたようです。

代仕男　古書と古本の価値観は四季に関係ないように思います。折角の座五は動くように感じられて物足りなさを覚えます。

萬的　高い、安いと読書の秋を掛けたところ少し古いように思います。古本だからでは

ありませんが。

千翁　私は文句のない一句だと思います。そして叙法から〝秋深し〟の奥行きも感じました。

五楽庵　一句の理想形を求めてさまざまに作りかえてゆくべきなのでしょうが私自身そうもまいりません。ただもう一転させてみられたら、句の型がよくなる気もします。

代仕男　読み返して見ましたが、秋が来るは少々安易すぎる感は否めません。

萬的　五楽庵さん、代仕男さんの言葉どおりで古書と古本との価値観それに〝秋〟で逃げている態度、私にはどうしても戴けませんでした。

毒舌の毒を抜いてる赤い爪

吐田公一

千翁　赤い爪からの毒舌が出て来ないのは一大事とも言えますが、時に赤い爪にも涙もろい情感が出てくるものでしょう。

五楽庵　句が強すぎる気がします。毒の色が強すぎるとでも言いましょうか。内容を考える前に毒にあてられました。

代仕男　毒舌家は裸のおつき合いをして見ると気のいい人が多いものです。それが女ともなれば意外と思われるほど素直な半面を温存している。そのあたりが中七に表現されていると思います。

萬的　私は毒舌家を女とは見ずに毒舌家が女の甘い言葉にその鋭さがなくなってしまったととったのですが。

千翁　私は主観はやはり女と見ました。ただ私が前述しました〝涙もろい情感も出る〟は思い過ぎかもしれません。説明的な句に近いものとも言えます。

五楽庵　萬的さんの受け取り方に賛成です。ただ前にも書きましたように毒が強すぎるのに赤い爪にも作意があり過ぎる感じです。下五がもう少しやわらかい表現で欲しいのです。

代仕男　言われてみると萬的さんの受けとり方がより川柳的ですネ。であるのなら赤い爪と女性に限定の必要はなくなります。

萬的　甘い言葉に鼻毛を抜かれる旦那さんと同じですが、余り新しい感覚とは言えないのではないでしょうか。

紙おむつ過去は何にも光らない

牛尾緑良

千翁　紙おむつは時の流れの中で生まれて来たようです。しかし、それでは過去は帳消しです。おむつの匂いを嗅いでそれを洗濯して繰り返すことが、母と子の愛情だと思います。

五楽庵　意味は解るのですが、もう一転、二転の推敲がほしいと思います。紙おむつの中にかくされていた人生を優しい言葉で、いたわりが含まれるように。

代仕男　〝光らない〟がむしろ過去の栄光を浮きぼりにしていると思います。花道を歩んで来ただけに現状に人の生きざまに慨嘆と哀れを覚えたことでしょう。思い余って消化不良の感もします。

萬的　代仕男さんに同感。お年寄の紙おむつだと思います。緑良さんが病院勤めの方であるだけに実感の句だと思われます。

千翁　私は素直にこの句を拝見してそのままを申し上げましたが、代仕男さん、萬的さんはもう少し、いやそれ以上に深く解釈されているようです。私はこの句を通してそこまでは考える余地を持ちません。

五楽庵　代仕男さんの言う過去の栄光が私に読めない。読めない理由が何も光らないにあります。ただ受け取る人の感受性によって句の内容も変わります。

代仕男　作者が病院勤務の方と知って私はことさら意を強くしました。もともと光らない患者であるなら、過去という措辞はいらないことになると思うからです。

萬的　過去に栄光ある患者さんが特別室に入院されていても、紙おむつを替えに来た付添婦さんにぞんざいに取り扱われている姿が目に浮ぶように思います。私が年老いたせいでしょうか。

言いまわしの個性（五）

――複合語の活用――

竹内紫錆

1、三字名詞から広がるイメージ

前回の品詞別集計の結果では、一句中の名詞の数が平均二・五から三・〇あることを示した。またその中身が漢語五割の人から二割の人まであるので、後の方を「和語派」と呼ばせていただいた。

どちらにしても、名詞が一句の目玉になる場合は多い。そこで、二字・三字・四字の名詞の出現率や効果を考えてみた。なにしろ十七音の枠の中だから、漢字が四つ以上結合した名詞は少ない。一方、評論を書きたいだけ書かせるとなると、中高年者は漢語中心で、「行政改革」や「通信衛星」、はては故事成語好きの人が「八面六臂」といった調子で書き、七、八音の口調を楽しむ様子がある。

しかし、一句の中の名詞は、音数の少ない三字単語のあたりに「味」がありそうなのである。書類作りの実務に日々たずさわっている筆者には、盲点というか使い慣れぬ名詞があったことに、いま気がついた。

冷凍魚アッと叫んだままの顔　　三　和
じいさんを刺すばあさんの言葉尻　　三太郎
税務署と聞いて蠅取紙を踏み　　玲　人

これらは少し古いが、ハエ取り紙（和語）という昔の商品の名称も、税務署（漢語）という名も複合語である。「税務」は、税金ほどは庶民に縁がなく、「税務署」の方は恐い相手だから、川柳に詠まれる機会がある。

一般に、評論用の抽象名詞は詩歌に使いにくいが、「幼稚」という概念が先にあって「幼稚園」が生れたはずだし、文房（具）や教科（書）も同様である。人は最初に、身近にある品や建物から記憶していくものである。

「連絡」という事務用語も、詩句に詠み入れるには異質である。ところが、「連絡船」となるとまた別で、演歌にはよく唄われたし、「引揚船」も人の心情に深くつながっていた。連絡船は古い乗物にすぎないが、港の景色を連想させながら、雪を添え別れをテーマにするとき、よい道具立てになっている。広がっていく連想の源がこういう三字名詞にあるらしい。和語・漢語で差はない。

菊日和言葉敵と汽車にゆれ　　狂　亭
躓いた石除けておく遍路笠　　寿　夫

二字漢語に足す一字は、自立語もあり、接辞的なものもあるが、人間を扱う以上、〇〇員（家、屋、士、師、官など）や〇〇史の類が多い。ほかには症、流、風、料など単独では使えぬ文字を付けた語が面白い。それ以外に品肌薬道品園癖帽嬢光儀…、また大〇〇の型には長電話、初対面、手内職などがある。数年来、暮しに近い宅配便、森林浴など、辞書に現れぬ語句に気を配るのも結構だ。

以上の〇〇には動作名詞と物質名詞の違いがあるし、「花談義」のように、〇三昧、〇自慢、〇達者といった組合せもあるので、文法的に分類するのは大変である（次節に注記）。

詩歌は、材料が尽きてくると、希少なものや消え去るものに目をつける。蒸気機関車も

希少になったので、あの汽笛や黒煙が懐旧の念を揺さぶるようである。「SL」とスマートに呼ぶのは、大衆の好みが動いた結果であろう。車や船、飛行機のように大衆に近い機器の種類はよく区別され、カタカナが付いたりする。

〔付記〕川柳塔（63・9）の同人二六三名の作品、一一〇〇余句の中には

三字名詞　二五七語（百句当り二三）
四字名詞　五一語（　〃　五）
五字以上の名詞　七語

あることが分った。三字名詞はやはり筆者の思いつけぬ(使い慣れぬ)ものが多かった。二字名詞はもちろん多数あるが、実務の関係からなじみの度合が大きく、類語辞典にも二字語がずらりと並んでいる。漢語派の者としては三―五字の名詞は見のがせない。

2、俳句の句集名

俳人が句集に題をつけるとき、三字の珍しい名称を考え出すことが多い。大抵は、自信作の句中の光った言葉を使うのだろうが、その言葉を思いつくこと自体が長年の修業の成果であろう。有名俳人の句集から拾うと、

酒中花　植樹祭　冬香水　未明音　見舞籠
かきね草　阻嚼音　樹氷群　はいかい袋
雪解川　生身魂　颱風眼　雑草園　等々

である。国語辞典には載っていないが意味は察せられる。

こういった三字前後の句語は、作句の態度姿勢をせんじつめたり、ひそかに追求した分野の象徴物を挙げたりした結果でもあろう。作者の個性を暗示しており、読者も寛容である。

一方、事務用語の類は、漢語の結合で増えて辞書を厚くする。幕末から明治初期にかけて「社会」とか、「文化」といった二字漢語が発案され、それが普及してから組合せが発達し、四字漢語（自立語の結合）が増えていったようである。新聞の一面や社会面で使用率が上位（ベスト百とか千）に来た二字漢語は調査されている。言葉の硬さは別として、大衆に消化された語彙は複合化されやすく、四字・五字と積み上げられる。筆者も翻訳時にまず思いつくのが、二字と四字の漢語である。

ところで短歌の場合、古典作品から現代短歌（文語→口語）へと移るにつれて文節の長さや数が増えざるを得なかったこと、それは一口に言えば動詞的から名詞的への変化であること――が指摘されていて、そのことが定型の枠と衝突する、と計量国語学者の樺島忠夫氏は述べている。

三十一音の文芸でそう論じられているくらいだから、十七音の句では三字名詞ぐらいが効果を発揮し、そして前掲の句のような一種の「意外性」をひそめている―と思うがどうであろうか。

俳人が句集に三字の題をつけるように、文芸書には「AのB」などとせず、一語が好まれる。実はそれより前から俳人たちは、「春闌」や「万緑」のように句語をふやしたり、季節の接頭辞を付けて、後輩に手本を示した。「青佐渡を墓と思いしは只今なり(薫風)」や「花冷えに老母ひとりの春炬燵(〆女)」のような俳人が使う句語を見たときに、両氏は俳句の実作歴もあるのか、と思った。

㊟こういった複合語の成立について、文法的な構成を調べたが、長く書くと嫌われる。前々稿で「派生」以外の複合化の形式に十二通りあると言ったが、例だけを記す。

㈠軽・工業、㈡研究所、㈢入手難、㈣氷解、来日、㈤高笑い、㈥散らし書き、激変、㈦鉄橋ほか多数(名詞・名詞)、善悪、売り買い(準畳語)…、㈧定義づけ(る)、など。

3、混種語ほか

前にも述べたが、(漢語・和語)を組合せた名詞が、適切に使われれば定着する。

電車道　茶漬　座敷　線香花火　食用蛙

番傘　赤鉛筆　手本　流れ作業

など、いわゆる重箱読みか湯桶読みの熟語である。はやりすたりはあるが、誰かが造り出して相当長く続く。また、(外来語・漢または和語)の組合わせで

選挙カー　貸しビル　大ジョッキ　ビニール本　むしタオル

などが、これまでに紹介した句集中にある。辞書に載っていなくて、言われてみると肯ける—という複合語は、俳句からも拾える。

春泥に歩きなやめる遠会釈　立子
頬杖に林檎の花と白千曲　ひでを

がある。後句の下五は「しろちくま」と読む。千曲川が白っぽく見える、というのである。俳句では、色を名詞(地名も可)の前につけたり、季節名や朝か夕を付けたりする。冬銀河、夏帽(子)、朝日影、夕紅葉などだ(混種語とは限らない)。それから遠方(例えば遠霞、遠雷)、大小(大欠伸、小菊)冷麺(冷し中華)、遅速(遅桜)、それから塩加減、玻璃囲ひ、といった組合せ方もある。

川柳にもこういった句語は使えそうだ。これまでに調べた、薫風、由多香、三窓の句に

高飛車　物価高　けちん坊　知恵の輪　車椅子　地獄耳　鉄砲玉　遍路杖　陶枕　歯ブラシ　百度石　影法師　熱燗　土壇場

などがあり、面白い混種語である。辞書に載ってなくても作者が臨機に持ち出す語句は、選句や談話・執筆の経験で蓄えた頭のひきだしから取り出して使うのであろう。

作文する時、かなを減らし文章を短くする心掛けは必要である。その一つは、語幹の前か後に一字漢語を付ける心得(主に派生)である。

(1)前につける一字漢語。新聞の使用率順でいうと、同、大、新、各、全、不、両、無、総…以下二五九種(角川小辞典9より)

(2)後に付ける一字漢語。使用率順に、的、中、化、会など六九九種。

これらを使うと報道文が引きしまるし、随想・論説・巻頭言といった硬い文章でも骨組が分りやすくなる。それを「あらゆる」「新しい」などをいちいち書きつけてダラダラとした、子供っぽい作文や字数稼ぎの翻訳には困る。反対に車内広告は、人間をエンジン部品に例えたのか、「元気全開」などと略している。

この一字漢語——全部で九百五十余種となるが——のうち、使用順位の後の方が作句に有効であるらしい。「全」とか「新」の類よりも意外性があって、しかも肯けるものを読者は期待するからだ。前出の「遠」が付く遠蛙や遠きぬたは、国語辞典にもないが、風流な句語であろう。遠島(エントウ)というと刑罰用語となり、社会詠川柳に使うことはあっても、俳句には向くまい。「とおじま」と読む名詞なら、藤村の詩境に近い。しかし、「遠花火」以外は大体俳句向きだ。川柳にはむしろ、高○○や急○○の三字語が有効かも知れない。

4、複合動詞

水府の句、「ぬぎすててうちが一番よいという」の「ぬぎすてる」は、複合動詞と言われるものだが、上五に限らず動詞二つを重ねる句語は、案外思いつきにくい。筆者も「服をぬぐ」とまともに書いたり、字数を気にして短い動詞を当てて終りにしていた。

複合動詞にも写生的なものと、メンタルな内容とがあるようだ。

銀婚も揺れゆく二人乗りリフト　紫鋳
打ち明けてからのさざ波らしく聞き　千翁

和語愛用家で動詞を多用する水粉千翁氏の句には、このような、思い出す／打ち解ける／つぎ直す、などの複合形の言いまわしが、他の作者よりずっと多いことに気がついた。

世間の雑談の中でも、振りまわす／落ち込む(名詞化もある)／言いかわす、とか、季語の「冴え渡る」等いろいろあって、使い慣れるまでは、それにふさわしい情況を体験し語っておく必要があろう。

(続く)

永田俊子句集
『鶴の瞑想』発刊を慶ぶ

有働芳仙

先般、「夕虹」のタイトルで歌集を上梓された永田俊子氏が、このたび、見事な句集を出された。深緑の表紙に白銀の文字で「鶴の瞑想」という字を沈めた、ずしりと手応えのある重みの川柳句集である。思えば我々柳友が、鶴のように首を長くして待っていたものが、遂に実現したわけでこんな嬉しい事はない。日本一小さい川柳塔支部から川柳塔賞を獲得された俊子氏は、我々に自信と希望を与えてくれた。恩師故田中鳴風氏夫妻も草葉の陰から快哉を唱えておられることと思う。このたびの句集には西尾栞主幹、橘高薫風氏、それに第二の育ての親黒川紫香氏と佐野卜占氏の序文で一段の光彩を放ち、比重の重い句集になっている。内容は社会、人情、自然と生きもの、終戦直後、人生、家族とひとりの六項に分類されている。辛棘な社会諷刺と人間の愛と哀しみの句が光っている。

〈社　会〉

屈託のない笑顔でそろばん手放さず
目は笑っていない銀行員の笑顔
決断をうながしている自動ドア
名刺と名刺が品定めする初対面
よその時計が鳴っているよその幸せ

〈人　情〉

タイミングよく出たくしゃみ
咳ひとつこぼして話に距離をおく
親友を遠く隔てた金のこと
虹消えてからの女はよく眠る

〈自然と生きもの〉

菊人形花の命を立ちつくす
シグナルを見上げて拾った昼の月
折れ蓮がいたわり合っている寒さ
マネキンがいつまで見てる秋の空
風鈴屋夜市の風をひとり占め
幸せがまだ見つからぬ豆の蔓
探しもの昼の蚊ひとつ誘い出し
帽子からとび立つ鳩に空はない

〈終戦直後〉

日本がストをおぼえたさわがしさ
農薬へメダカの学校解散し
坊やからパパが習ったすわり込み
ニコヨンへ詩情に遠い雨が降り
託児所も兼ねてお寺のアルバイト
墓地の中やっぱり日本の虫がなく

〈人　生〉

それぞれの過去を焚火に温め合い
石橋を叩いて出世に遠い父
埋れ火の記憶をおこす風に合う
折り返し点からやさしくなった夫
手のひらでゆれる豆腐をだまし切る

〈家族とひとり〉

立ち直る余白残して子を叱り
老いらくの孤独を芯に毛糸巻く
鉛筆の芯いつも尖らせている孤独
部屋の灯をみんな灯してみる独り
そして川柳塔賞の候補作品の
うゐのおくやま越えて来ました座りだこ

で幕を閉じてある。以上の句は、目についたものを抜萃したものであるが、あまりの秀句揃いで目移りがして選ぶのに苦労するくらいであった。第二の句集が出るのを期待して、ますます精進をされん事を祈りたい。

近畿文字放送作品募集

題「ワイン」　橘高薫風　選

3句　締切11月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540　大阪市東区谷町2丁目36
大手前ウサミビル3階
近畿文字放送　川柳係

第3回

中国吟行の旅

63年 9 月18日 ～ 23日
北京・洛陽・西安・上海

竜門石窟奉先寺の本尊前の一行

第三回訪中の記

春城武庫坊

一昨年につづく第三回目の中国吟行の旅は九月十八日出発、北京・洛陽・西安を巡り、二十三日、無事帰国しました。各地の見聞については参加の皆様からそれぞれ発表されますので、旅程の概要のみ報告いたします。

九月十八日、田中正坊氏を団長とする一行は午前七時半、大阪空港に集合、橋高薫風副主幹はじめ家族に見送られ、ソウル五輪のため厳重な手荷物検査を受け、午前九時半、JAL七八五便で出発しました。

一行は田中正坊・千代子、天正幸太郎・千梢、千金良一堯・みち子、春城武庫坊・年代の四カップルに渡辺圭坊、板尾光男、秋元てる、飯西ミサヲ、山崎君子、赤川菊野、奥田みつ子、藤村宏子、板尾さよ子と添乗員の高瀬竜二の十八名でした。

私たちを乗せた日航機は、午前十一時四十分(現地時間)に北京に到着、中国国際旅行社の劉建桐氏と北京担当の喬さんの出迎えを受け、バスで天安門広場に行き、北京国際旅游年で開放されている(もちろん有料)天安門の上に登って、広場全景を眺め、故宮の裏の景山公園に立ち寄りました。そして北京駅に行き、重慶行特急寝台車に乗車しましたが、列車は午後五時四分発車、食堂車に集って中国最初の食事を中国ビールで乾杯、第一夜は車中で眠りにつきました。

十九日午前六時十分洛陽駅到着、朝早くから混雑している駅前からバスで洛陽友誼賓館に寄って朝食をとり、洛陽博物館を見学しました。ここの収蔵品は市内各地から出土した唐三彩が有名で、次いで王城公園を見物しました。

翌日の西安行が夜行列車に変更されたため予定を変更して午後は中国最古の寺院で後漢の明帝の世に建立された白馬寺に参詣した後市内繁華街の十字路でバスを下り、自由市場の空気にふれました。続いて国営の洛陽唐三彩の工場を見学してホテルに帰り、夕食後、有志は「中秋月餅」の露店が並ぶ夜の洛陽の盛り場を散策しました。

二十日は今回のツアーの目玉、龍門石窟に向いました。ここは敦煌の莫高窟、大同の雲崗石窟とともに中国の三大石窟と言われており、黄河支流の伊河に沿った歩道の山側を登り下りして見学しました。その後、橋を渡って対岸中腹にある蔣介石の元別荘跡で昼食をとり、その日は唐代の詩人白居易の墓と関帝廟に詣り、午後九時五十分発の西安行寝台車に乗車しました。

二十一日は午前七時十分西安駅着、バスで宿舎西安賓館に着きました。今までの中国旅

行の中で一番立派なホテルで去る八月、竹下首相もこのホテルに宿泊したということでした。朝食後、唐代からの温泉場で唐代末期玄宗皇帝と楊貴妃のロマンスで有名な華清池を見物しました。昭和十一年、西安事件で蔣介石が監禁された場所もここに残っています。

次いで秦の始皇帝陵と兵馬俑博物館に行きましたが、規模の大きいのにただただ驚き入った次第で、唐の高宗が建立した慈恩寺にも詣り、高さ六十四米の大雁塔に登りました。

二十二日は西安市人民政府訪問、友好都市奈良市長のメッセージを携えた川柳塔社の遣唐使一行は市人民政府外事弁公室の鄧友民氏に迎えられ、句集『川柳塔』などを贈呈、田中団長から川柳について説明、鄧主任から日中文化交流について日本語をまじえての交歓があり、一同、記念写真を撮影して退出しました。

その後、玄宗皇帝と楊貴妃が住んだ興慶宮の跡に造られた興慶公園に行き、阿部仲麻呂の記念碑を見学、午後は空海が足跡を残した青龍寺に詣り、空海記念塔と空海記念堂を訪れました。また、陝西省博物館を見学、有名な碑林や歴史的文物に中国文化のすばらしさを再確認し、雨の中を小雁塔を見学しました。

最終日の二十三日は午前六時二十分、まだ薄暗い中をホテルを出発、中国民航機で上海へ、さらに日航機で大阪に向かいました。皆様のお心遣いに厚くお礼申し上げます。

空海と大秦景教

渡辺圭坊

今から一一八四年前、若い僧、空海は第十六次遣唐使の一行に加わり、数々の難儀の末大使藤原葛野麻呂以下二十三名が十二月二十一日、当時、世界第一の大都会であった長安に到着している。宣陽坊の公館に宿泊し、大使が所定の儀礼を終えて長安を去ると、儒生橘逸勢ら留学生が残り、空海は大唐第一の巨刹西明寺に移り、そこをねぐらに世界の文化宗教に触れた。

ペルシアで興った祆教(拝光教)からヒントを得て、帰国後、真言宗に護摩を取り入れている。また、異端の説を唱えてローマ教会から追放され、七世紀初頭、東トルキスタンを経て中国に入り、唐の朝廷の庇護を受けて経典の漢訳を許されたネストリウスが景教の教会として建てた大秦寺が、空海の居住区にあった。

義寧坊にある大秦寺に「大秦景教流行中国碑」が建てられたが、この碑は「会昌の廃仏」と呼ばれる宗教弾圧のため、地中に埋められた。その後、明代になって掘り出され、現在、「陝西省博物館」内の碑林の中に立っている。

十一世紀末期の北宋時代、唐代に刻まれ、石経を保存するため作られた西安碑林という世界一の漢字の宝庫の中にあって「大秦景教流行中国碑」は、シリア文字と漢字で書かれている。西安見物の最後にこの博物館を訪れた私たち一行は、多くの人々で込み合う碑の通路を歩きながら許された時間の短かさを嘆じた。

古代文華　西安碑林に甦る

夜行列車のこと

飯西ミサヲ

陸海空、地球に安全地帯なしとまで言われている昨今、海外に旅することは、いささか勇気のいることだったが……。

一番印象の深かったことを今振り返ってみると、北京から洛陽までの夜行列車で、私たちの乗った軟座寝台車は、何両連結の何両目だったかわからないが、多分、最後の方のように思った。

乗り込むと間もなく、食堂車へ行くという連絡があり、全員揃って一列になって前進した。硬座寝台車を何両か通り抜けたが、寝台といってもドアもカーテンもない。通路にはぎっしり乗客が座っている。もちろん椅子も敷物もないところに。弁当を食べている人、茶を飲んでいる人、小さい子供を抱いた人、

老若男女の長い長い車両を揺られながら少し頭を下げ、一心不乱に前の人から離れないように、無言で前進を続ける。その道中の長かったこと、気の遠くなるような時間だった。

そうしてやっと食堂車にたどり着いた。ビールやジュースが出て私たちの食事は、硬座車の客と比ぶべくもない。また来た通路、暗くて長いトンネルのような道程を、私たちは申し訳なさいっぱいで通り過ぎた。心の痛む夜行列車でした。

西安市庁を訪う

天　正　千　梢

中国西安市庁七階までのエレベーター故障のため、歩いて上った。鄧友民大人は早速、「日本には、『これやこの行くも帰るも別れてはしるもしらぬも逢坂の関』という古い詩がありますが、皆さま方も坂を上って来て下さってお疲れだったでしょう」とゼスチャーをまじえて笑顔で迎えられた。

「西安は、杜甫・李白も暮らしたことのある詩の町です。名所・旧跡は詩になじみがあり、正面の詩は大雁塔についての李白の詩です。阿部仲麻呂も　年間西安に住んで、月を見ながら望郷の念にかられ、『天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも』と言う詩を作り、また空海も詩をつくるのが常でした。西安は文化交流の中で、詩の交流が重要な地位を占めています。日本にも短歌・俳句・川柳とあって、俳句は主に自然を詠み川柳は人の心、時事などを詠むと聞いています」と中々の博学で、「今日、日本の川柳の方と会えてたいへん嬉しい。ゆっくり西安を見て帰って下さい。再会をお待ちします」と、柔和なお顔で話され、忙しい時間を私たちのためにさいて下さったのだった。

鄧主任と会談する正坊・武庫坊

鄧友民大人の博学に脱帽し

中国の子ども

奥　田　み　つ　子

小学校低学年も朝八時から夕方四時半まで学校で勉強、そして帰宅後は、グループ学習をするとか。洛陽のホテルでの夕食後、散歩した盛り場の道路わきに、椅子を並べて宿題をしている十歳くらいの男の子二人を見た。中国の受験競争は、日本あたりの比ではないと言う。

二十一歳の女性通訳陳紅さんは、洛陽の郊外出身で、西安市の外国語学院で二年間日本語を学び、今年七月から通訳を始めたそうだが、なかなか流暢な日本語に感心する。たった二年間でこれほどまでに上達するには、余程の猛訓練と彼女自身の猛勉強があったと思われる。

中国の生活水準は、日本よりも三、四十年遅れていると言われているが、若い人たちの勉強振りや活力を見ていると、恐らく三十年を待たずに追いつくのではないだろうか。

驚異的な規模の秦始皇帝兵馬俑など、数多くの偉大な文化遺産と四千年の歴史を持つ国に畏敬の念を新たにするとともに、果して中国は日本より遅れているのだろうかと考えさせられた。

赤ん坊の泣き声

秋元てる

猫の鳴き声にしては変だ。お寺のお堂の脇の方から聞こえてくる。その内に一人二人と泣き声の方へ寄って行く人も。つられて私も行きかけたがハッとした。足が止まる。目をこらすとお堂の前の三和土のような場所に動くもの。それは赤ん坊だ。顔は見えないが、大きな声で泣いている。洛陽の白馬寺を訪れた時のことである。

その内に日本人らしい女の人が、お金か何かを傍らの男に渡してそこを離れる姿が見えた。しかし、私は近づけなかった。その赤ん坊を見るにしのびず、されど手出しもできない今の自分。それに心の一方には、平然と泣かせて腰かけている僧侶らしい男にも異和感がある。勘ぐれば子役を使った演出めいた匂いもする。私は騙されまいと何時も警戒ばかりしてきた心の貧しさのさせる業か、そのまま傍観、ウヤムヤな態度で踵を返した。

その後、ガイドの劉さんに尋ねてみたところ、子供を捨てて行ったのを、お寺が保護しているのだと言う。では何故、人目につく屋外の場所で泣かせておくのか腑に落ちない。「捨子を保護する施設はないのか」と聞いても、「ありますよ」と劉さん。その顔には深入りしてほしくないと書いてある。ああどこの国にもある事なかれ主義。逃げてしまえば、耳をふさげばいいと思う醜い心を恥じながら足早にグループの後につく。しかし、赤ん坊の泣き声は追ってきた。夜、ホテル洛陽友誼賓館の自室のベッドについても、耳の底にこびりついて離れなかった。

兵馬俑博物館を見て

千金良一堯

今度の中国旅行で一番感銘を受けたのは、西安の「兵馬俑」の雄大さだった。秦の始皇帝は二、二〇〇年前に最初に国家統一を実現させた優れた帝王であると同時に、たぐいまれな暴君と伝えられている。西安で兵馬俑が一九七四年に発見された後は、「万里の長城」と同様、俄然、中国の古い文明のシンボルとして脚光を浴びたと言われる。

実際に現地で兵馬俑を見た瞬間、なるほど天下を震撼させた秦国の強大な軍団が容易に想像できた。現在、一号坑しか整備されていないが、四号坑全部が発掘・整備されれば、俑の数は武士俑八、〇〇〇、軍馬俑六〇〇、木製戦車一〇〇両と言われる。秦の始皇帝が悠然と馬にまたがり、天下をへいげいしている姿が目に浮かぶ。私もふと四十五年前の学徒出陣式のことを思い出した。

石碑と拓本と

田中千代子

およそ書をやるものにとって、こんな素適な旅はない。当初から私は陝西省博物館の碑林を見ることに焦点をしぼって参加した。ここには、著名書家の原刻碑一〇九五基が林立し、書の芸術の宝庫であると言われている。特に第二室には、顔真卿の争座位・智永千字文の真筆、史記を編纂した司馬遷の人物像、孔子像等の石碑も並び、今までに習った篆・隷・楷・行のすべての書があり、字のなりたちの碑も見ることができ、ただ立ちつくすばかりであった。褚遂良の大唐三蔵聖教序も拓本ながら碑の前に立ち、感慨ひとしおで眺めてきた。

今回、目についたものに拓本があった。そのほとんどが本物でないと言われているので見るだけにしてきたが、王羲之の蘭亭序などは随分高価である。余談ながら私の買い求めた筆は大小とりまぜて百三本あった。日本円にして約二万円くらい使っているが、これは日頃、買う筆の十本分にもならない。

中国の印象

千金良みち子

中国の印象を一口で言うならば、ちょうど四十年くらい前、復興途上だった日本を見ている思いでした。長い長い列車にあふれるような人々の群れ、観光地にバスが止まればワッと押しかける物売りに最初はとまどい、おじけづいたものですが、そのうちに馴れて窓をあけて手振りで値切る人も現われました。

また、トイレの汚なさには閉口しました。溝を区切ったような扉もないトイレに驚いて逃げ出したが、そのうちやむにやまれず、「郷に入れば郷に従え」とばかり目をつむり、息をとめて使用したのも忘れられない笑い話です。

悪い事ばかり書きましたが、ホテルの立派さは想像以上で、特に西安の竹下首相が泊まられた西安賓館は、豪華な庭園や設備、従業員のマナーも国際級のものでした。付近はマンションがどんどん建てられ、復興への息吹きが強く感じられました。初めて中国旅行に参加して身近に感じた事を書いてみました。

水虫の薬も入れて旅鞄
物売りと身振り手振りで値をきめる
お守りを握り西安視界ゼロ
筆と軸やたらに買って旅終る
旅六日きつねうどんが恋しなり

千金良夫妻・みつ子・宏子(白馬寺)

西安碑林に思う

藤村宏子

西安へ行ったら、陝西省博物館の孔子廟にある碑林を一度は見たいものだと思っていた。とくに書に詳しいわけではないが、学生時代に見聞した文人墨客の碑文や墓誌銘にふれてみたかったのである。

その孔子廟にふみ込んで、日本では考えられない古代からの文物の山にまず圧倒された。碑・林の名のとおり、無造作にはめ込まれたり並べられたりした碑が、三棟にわたって所狭しと林立していた。どこに何があるのか見当もつかないが、多少読めるものを拾っても、日本文化との深い結びつきが思われてぞくぞくした。遣隋使や遣唐使がどんな思いをして海を渡り、どんなに貪欲に学んだかが分るような気がすると言ったらオーバーだろうか。

見物人などそ知らぬ顔で、熱心に碑の拓本をとっていた老人と、行く先々で売られていた拓本、日本人とみると、すぐに値段ばかり言って売らんかなの人々。現代中国の象徴とも言える銀輪の波と人々のたえ間なく行き交うさまが妙にダブッて印象に残った。ぬるま湯の中の自分を振り返るいい節目の旅だったと思う。

法隆寺と親類ですかお釈迦さま
(龍門賓陽中洞)
登るほどありがたい風吹くような(大雁塔)

社告

川柳塔社へ十一月一日から池田寿美子さんに代わって西山幸さんが勤務されることになりました。

お問合せその他、所用の向きはお手軽にご連絡ください。

川柳塔社

金井文秋氏喜寿
祝賀句会に参加して

西出　楓楽

どちらかと言えば、金井文秋さんは普段ポーカー・フェイス、要するに「男はだまって…」タイプなのです。ところが、今日九月十五日ばかりは、顔のネジを二、三本置いて来られたらしく、終日頬がゆるみっぱなしという様子でした。

昭和十年頃から、川柳に手を染められたという、大ベテラン作家の文秋さんは、ご存知のように、伝統ある南大阪句会を慈しみ育てておられます。その労をねぎらい、喜寿を心からお祝いすべく集った六十五人（投句共）の方が、顔のネジのゆるんだ本数は、もっと多かったかも知れません。

わが文秋さんのスーツ姿をはじめ、出席者のちょっぴり改まった服装に、毎月の南大阪句会で見慣れた会場の高松会館も、秋晴れの下、今日は華やいで見えました。

博識に見えて本屋のもの知らず　文秋

当日、出席者に配られたテレフォンカードの句です。これは四人のお子様たちのプレゼントと聞きます。ユーモアがあり、謙虚な人柄があふれ、お仕事もちゃんとわかります。

さて、手慣れた柳宏子さんの司会で、句会の幕が落されました。有志からの花束、記念品贈呈後、「おはなし」は〝川柳塔の頭脳〟である橘高薫風副主幹です。昭和三十年代の資料を駆使し、文秋さんの句、エッセイを紹介しながら、当時の柳界の様子を話して下さいました。とりわけ印象に残ったのは、職業川柳人を標榜された麻生路郎先生の、川柳に向き合う姿勢の厳しさでした。路郎先生の薫陶を受けられた方たちが、今もいい句を発表なさっていることを納得させられました。

晴れの日の選者は、南大阪句会にゆかりの深い顔ぶれで、川柳を愛してやまぬ人ばかりです。皆さんの披講ぶりに、川柳に対する思い入れがあふれ出ていて、厳しさの中、暖かい雰囲気で進行しました。

文秋さんの「秋」の選あたりから、女性軍団奮闘によるオードブル、すし等が所せましと並べられました。同時にビール、お酒もふんだんに開けられ、会はいやが上にも盛り上りました。

聞けば、南大阪句会には、昭和四十九年の今は亡き私の義父母（西出甚吉・一栄）金婚祝賀句会以来のよろこびごととのこと。その時には文秋さんの奥様もご健在で、大層喜んで下さったことなど思い出していましたら、胸にこみ上げてくる熱いものがあり、ビールをぐっとあおって流し込んだのでした。

富田林市民川柳大会

とき　**11月13日**(日)正午・締切1時
ところ　富田林市中央公民館・講座室
はなし　「古川柳」　板尾　岳人氏
宿題と選者
「笑　い」　池　森子選
「　滝　」　吉岡　美房選
「こだま(谺)」　河内　天笑選
「誓　う」　小出　智子選
「手　相」　阿部　柳太選
席　題　当日一題　各題3句
会　費　無料（賞品多数あり）
主催　富田林市教育委員会
後援　富　柳　会

初歩教室

題 ― 台詞

阿萬萬的

辞書によると「せりふ」とは、せりふ「台詞・科白」（名）①能楽で役者が名のりの後などに自分の意中を述べることば②俳優が演劇中に述べることば③談判にいうことば④儀式ばったことば⑤きまりきったことば。きまりもんく。とあるので、敢えて台詞の文字を句の中に入れなくてもよいはずなのだが…先ずは役者の台詞から

名優でも台詞忘れて立往生　正之
（台詞忘れた舞台で口が震えてる）
芝居小屋台詞忘れてみそをつけ　志重
アドリブで台詞誤魔化す三枚目　とく子
台詞にはないアドリブで間を持たし　ますみ
（アドリブも予定に入れてある台詞）
流し目にのって台詞が遊んでる　小鹿
腐っても鯛の台詞がもつ教え　治
間の抜けた台詞で人を困らせる　遊峰
（間の抜けた台詞で泣かす家庭劇）
訥々と台詞に役者の心あり　節子
（訥々と寛美の台詞にあるこころ）　志洋
脇役がスターの台詞引立てる　志重
俳優の悪の台詞に手を叩く
（悪役の台詞へ舞台暗転す）
だが、それもアイドルとなると　遊光
売れっ子のタレント台詞よくとちり　圭坊
（アイドルの愛嬌台詞よくとちり）
チビッ子芸人台詞横目に大奮闘　ミツエ
（アイドルのえくぼ台詞をカンニング）
政治貧困と言うか、先生方の台詞を少々
スキャンダルを台詞のようにしらを切る　都姫子
名台詞蜂の一刺し褪せている　サワ子
減反減反同じ台詞に稲が泣く　三津江
リクルート何れも同じ台詞とは　明吉
気の利いた台詞言えない頑固者　ますみ
（気の利いた台詞が出ない野党席）
万年野党同じ台詞を繰り返し　勝美
役人の台詞変らず雨となる　小鹿
原発反対の台詞村を割る　喜与志
（原発反対の台詞が村を二分する）
台詞なき影武者あって世を変える　すみれ
そして世の中には、こんなのもいますね。
捨て台詞残してボスの広い肩
カッコいい台詞残して逮捕され　金吾
ここらで年齢の順を追って
母さんの台詞を真似ておままごと　三津江
寝言にも台詞飛び出す孫の劇　数彦
漫才のギャグ子供はすぐに真似たがり　結美
子の台詞大人と子供を行き来する　方子
捨て台詞大人の感じとなる息子　しづ子
（大人振った台詞で反抗期に育ち）
次は思春期のお嬢さんを想像しながら
一と言の台詞が言えず夏が過ぎ　遊光
判ってね何も言えずに居る台詞　遊美
とっときの台詞恋したら言えぬ　菊枝
（とっときの台詞が言えぬ恋かしら）
告げられる日を待ち台詞用意する　和子
プロポーズきざな台詞で口説かれる　みね
台詞などなくてもわかるラブシーン　都姫子
こんなのもありましたが、失名にしましょう。
台詞などいらぬ二人の初夜だもの
そして披露宴ともなると　みね
自己紹介言いたい台詞先言われ　繁男
繰り返し台詞を胸に祝席　真一
一と言の台詞言うため練習し
（お祝いの台詞へ本まで買うて来る）
台本にない台詞吐く臍曲り　時弘
筋書きに無い台詞出て肝つぶす　由梨
悪友の台詞が胸打つ披露宴　ちず子
（披露宴悪友ギクリとする台詞）
だが、甘い暮しも年とともに
メシ風呂の台詞以外が聞きたいの　正子
午前様どんな台詞で帰るやら　喜代子
倦怠期女房も台詞調となる　治
老妻の毒舌冴える捨て台詞　義
実家に帰るいつの台詞もマンネリし　数彦
（マンネリながら実家へ帰ると言う台詞）

エンゲージの台詞忘れた離婚劇　一郎
捨て台詞残して行った子を案じ　トキ
捨て台詞残して去った子が可愛い　松次郎
捨て台詞の重さを倖まだ知らず　晏
捨て台詞の句が出て来たが、兎角空しいものらしく

捨て台詞嫌な別れに残るもの　露芳
後味の悪さ別れの捨て台詞　しんじ
捨て台詞残して来たが尚孤独　遊峰
（強がりの台詞残して来た孤独）
其の台詞返した若き日の反省　しづ子
（捨て台詞若き記憶にある汚点）
人生の中途半端な捨て台詞　芙美子
捨て台詞あとで詫び入れるいとあわれ　和多留
捨て台詞ほとぼり冷めたら詫びますよ　登代
（捨て台詞ほとぼり冷めた頃に詫び）
捨て台詞それは聞かないことにする　富恵
（捨て台詞聞かないことにして上げる）
つらい訣れは黙って握手と決めている　円女
別れぎわの台詞を今から用意する　美乙女
幸せになれよと憎い捨て台詞　結美
夜行出る別れの台詞お元気でね　繁男
（お元気でねと夜行列車の別れする）
予期しない台詞を浴びているショック　静子
こんな捨て台詞もあるのですね。
お月さん見上げて思う捨て台詞　隆雄
捨て台詞まともに受けた日の火傷　遊光
捨て台詞少しためてる砂の城　つえ子
だがなかなか言葉には出にくいものらしく
去ってから言うべき台詞思い出し　信義
私が言いたかったのその台詞　美子
土壇場で吐けぬ台詞が空回り　芳水
言い返す台詞はすぐに出てこない　静子
（意地かけた台詞がすぐに出てこない）
古臭いと言われるかも知れないが、私達年配の者には心に残るいろいろの台詞もあって
オリンピック永久に伝わる名台詞　登代
前畑ガンバレ耳に焼きつく名台詞　円女
耐えがたきを耐えた台詞に生かされて　喜代志
終焉の亡夫の台詞を忘れずに　サワ子
では、諸々の台詞といきましょうか。
皺寄せをされて台詞を考える　隆雄
（皺寄せへ捨台詞など考える）
殊勲者の台詞は時に妙を得て　和多留
（息をはずませながら殊勲者言葉撰る）
再会へ台詞はいらぬ肩を抱く　三倉
（再会へ言葉はいらぬ手の温み）
この台詞言えば最後と噛んで飲む　トキ
（切り札の台詞はじっと温ためる）
吹き替えは口にも合わせ台詞出し　露芳
下五は〝し止め〟にせず、〝出す台詞〟としたいですね。
定年で台詞失くなりアドリブで　信義
（台詞もなくアドリブに似た老後です）
就任の台詞はいつも美辞麗句　時弘
（就任挨拶ちと空々しい美辞麗句）
台詞見る欠けた茶碗の出土品　美子
（古代史の台詞のように土器出土）
淋しくてセリフ忘れたインコです　とく子
九官鳥台詞忘れた夏の午後　つえ子
（雨の午後台詞忘れたインコです）
愛してる同じ台詞を言うオウム　正子
最後は作句馴れした方の句で
望郷の台詞がダムの底で病む　一郎
読みきれぬ字幕の台詞FINとなる　晏
こそばゆい台詞心に虹をかけ　方子
捨て台詞とっさに傘が開かない　多織
京の秋苔の台詞を消す時雨　章久
雨音に好きな台詞をはめて見る　和子
言い返す台詞を風呂で考える　保夫
王様の台詞アドリブ許されぬ　多織
ロボットが冷たい台詞で又どうぞ　太一郎
時代錯誤そんな台詞にしがみつき　勝美
方言の台詞にこもる温かさ　金吾
勝ち誇る台詞むなしさだけ残る　保夫
夫婦茶碗台詞無用でする回顧　章久

以上で終りますが、章久さん、多織さんなど、作句に馴れられた方々の句もお見受けして喜んでいます。ますますのご健吟を期待しています。
では来月もよろしく。

◇

題「雪」　**11月10日締切**（1月号発表）
ハガキに5句以内
「北国」　12月10日締切（2月号発表）
宛先　〒598　泉佐野市中庄一〇八一―九九
阿萬萬的

酔う

藤解静風選

割り勘と決めて気楽に酔える酒　不二
酔うほどに出てくる癖の二つ三つ　理恵
一杯の酒で天井よくまわる　奈美子
藤村に酔い文学の道に入り　新造
酔うほどに女も膝を崩しだし　暁明
ドガの絵の娘に酔うて赤い顔　博子
酔客がやたらと妻に触れたがり　みね
酔うて言う訳ではないと酔うている　悠泉
門番に酔眠薬が効いている　はるお
酔うている足を野良犬嗅ぎにくる　宵明
牧水が静かに酔うた秋の酒　正敏
酔った酔ったと美女のお酌に気を遣う　緑良
酔いさめて元のダルマになる無口　夢酔
ご冗談ばかりと酔いをそらされる　ただし
酔眼へ男のいくさなど見えぬ　雄々
酔うまでは断るつもり保証印　芳水
反省もせずに不平の酒に酔う　諷云児
酒癖は腹にくくっている幹事　白光子
二日酔い妻はいつもの粥を煮る　早苗
ペンネーム己れの筆に酔うている　高子
酔うている子の父に似る祖父に似る　太郎
酔いさめる家へ百歩の曲り角　晏

裏切らぬ友と呑んでる酔っている　雀踊子
酒の酔い借りて本心打ち明ける　通彦
二本もあけたそろそろ本音吐くだろう　ろ亭
ちょっとだけ酔うてもみたい飲めぬ酒　良江
うわばみという別名でまだ酔わぬ　佳雲
血圧をなだめなだめて酔いきれず　秀峰
酔客があやまっている終の駅　倫子
やさしさに酔うておんなの餌になる　三五島
狼と知らずに酔うたハイヒール　しげお
酔眼にどれも見事な花ばかり　あやめ
酔う度に妻の衣裳が一つ殖え　虹汀
裸婦像にうっとりと酔うベレー帽　志洋
招待の酒は少しで酔うと決め　三倉
大正が酔う白秋と春夫の詩　正坊
故郷を言うとき父は酔っている　たつみ

佳

肩貸して歩くと酔うた足になる　白渓子
勇ましい歌に酔うのは止めておく　喜与志
酔い醒めに水割りぐらいいいだろう　螢
コスモスが多情の風に酔うて揺れ　京子
酔い覚めて女が探す付け黒子　清芳

人

ほろ酔いの愛のドラマが派手になる　豊
地

デュエットの二人は二人だけの酔い　どんたく
天

退けどきを知らずに酔うている造花　保
軸

酔うたからつい真実を口走り

幻

土橋はるお選

色気だけ持ち幻の白寿まで　喜与志
幻想の父はいつでも逞しい　次男
幻を追って出口を見失う　三千子
幻に出合ってからの失語症　きみ子
竹ベラの先に幻ねむってる　たつみ
裏口に幻の席売っている　勝美
幻の牽制球に胃が痛む　保
まぼろしの人喰い族にしてしまい　弘朗
海軍基地幻に見る陸奥長門　新造
幻でなくアマゾンに居た魚　兼次郎
幻と気付くわたしの虹の橋　奈美子
幻覚のシャブの魔力に取憑かれ　白光子
幻を追うて片道切符買う　義美
幻の民話を聞いた過疎の宿　白渓子
つちのこを活性炭に過疎の村　高明
幻想に浸るひと時石舞台　達子
幻に亡夫の影追う螢の灯　テル
幻想の連鎖それから呆け始め　宵月
幻を棺に入れて釘を打つ　緑良
幻想の闇を辿ると亡母に会う　諷云児
幻の彼を夫にダブらせる　規不風
まぼろしと遊ぶ夜更けの一人部屋　元江

永遠の幻亡母の数え唄　玉恵
籍入れて欲しい幻にはさせぬ　雄々
大和撫子もう幻となりました　多織
どこまでも幻を追う草鞋ばき　ただし
晩学の目に幻の白い塔　高夫
戦友の幻を見た草いきれ　佳雲
ライバルへ書く幻の果し状　どんたく
幻になった帰らぬ青い鳥　恵美
幻でいいから見たい雪女　正坊
一攫千金幻となり田畑売り　柳五郎
幻の顔が出てくる美容室　白峰
幻覚と紛うや月下美人咲く　朴竜
幻の現像液は今日の汗　四郎
幻の島にゆっくり一人住み　虹汀
幻の女で夕焼雲がきれい　和友
佳
まぼろしのダイヤが妻の首にある　可住
幻とおしゃべり出来る針坊主　雀踊子
幻の彼の声聞く耳飾り　章久
幻の美女を恋していた尾灯　重人
幻でなかった玉手箱がある　正敏
人
幻の馬車を待ってる月見草　正子
地
美しい女幻の花畑　螢
天
幻の色へ苦心の窯あける　浪速子
軸
幻の女クシャミをして消える

シャツ

中村ゆきを選

ワイシャツの白の匂いに妻がいる　大柏
ワイシャツの白凡妻の愛がある　静子
Tシャツが二枚で事足る夏終る　あすなろ
ツーエルのシャツの飽食罰当たり　雄々
Tシャツの若さを真似て落ち着かず　緑良
炎天下日銭を稼ぐシャツ裸　高夫
ワイシャツの腕をまくってハイ役満　文
シャツも又ちょいとおめかし秋を着て　太一郎
とりどりのTシャツ若さを溢れさせ　倫子
アロハシャツ簞笥の隅で色が褪せ　伊津志
古いシャツ今年中はと又洗い　遊峰
失礼になるで上着を持たさせる　軒太楼
送り荷の中に三枚シャツも入れ　志重
今も尚グリコのシャツは走ってる　露児
弱いシャツなのか子供が強いのか　佳雲
セールスのシャツで歩いてばかりいる　京子
退院へ新調のシャツがかぐわしい　和友
シャツのボタンはずして明日考える　たつみ
脱いだシャツ何処へ消えたか初舞台　菜月
洗濯機はキライ目まいをおこすから　三和
シャツ一つ買うに女のあっちこっち　ちかし
シャツ一枚買うのに特売場二度廻り　抜智
バーゲンのシャツでは合わぬ肥満体　悠泉
Tシャツでペダル踏んでる市場篭　白峰
赤いシャツ着せるとはずむ秋の空　元江
Tシャツをまともに着ない新人類　狸村
通勤のバス長袖に衣がえ　秀峰
Tシャツの横文字読めぬままに着る　保夫
泥んこのシャツ万歳で脱がされる　鉄治
格安のシャツになかったボタン穴　鉄治
ライバルが着ている派手なカラーシャツ　新造
シャツ一になったところへ不意の客　諷云児
ハワイでない梅田で買ったアロハシャツ　兼治郎
夜台引く稼ぎはシャツのままで良い　白渓子
一日が無事に終ったシャツの汗　雀踊子
野の草がまじる匂いの汗のシャツ　恵美
定年万歳一日シャツ姿でおれる　素身郎
佳
着心地はこれが一番褪せたシャツ　良江
Tシャツで包みきれない皮下脂肪　奈美子
流行遅れのシャツは親父が着せられる　千秀
汗臭いシャツに男の詩がある　清芳
夏過ぎて案山子に着せるペアのシャツ　太郎
人
縞柄のシャツ似合ってるベレー帽　正坊
地
腰にシャツ巻いて男女の古都巡り　達子
天
美しく老いたく赤いシャツを選る　多織
軸
色シャツの坊主が遊ぶネオン街

柳界展望

集録―敏・武庫坊

★『川柳宮城野』9月号は第4回誌上川柳大会特集号として発刊。波多野五楽庵氏（弘前市・本社参事）も選を担当している。

★川柳公論社は一九八二年度川柳公論各賞を発表。

大賞　加藤　久子
めやなぎ賞　伊藤　紀子
双塔賞　樋口　仁
新人賞　中川緋紗子

★青森県川柳社は62年度の各賞を発表した。

不浪人賞　三上迷太郎
同　準賞　佐藤　悠
年度賞　新岡二三夫
同　次点　狄守　和穂
蝶五郎賞　村井　吉重

また、同川柳社は11月3日青森市文化会館で創立40周年記念川柳大会を開催する。

★竹原川柳会は市制30周年を記念して川柳で竹原を詠む合同句集『竹原』を発刊した。

★『川柳ますかっと』10月号に大森風来子主幹が「恩師　麻生路郎遺句抄①」と題して路郎の10句を紹介。

★『川柳ささやま』8月号は脇田米朝（本社同人）の追悼句会号として発刊。

★『アサヒグラフ』では新年第1号から川柳作家・時実新子氏の新連載を開始。内容は各回のテーマにそって新子氏の句や読者からの投句をまじえて川柳の楽しさを読物ふうにつづる。1月のテーマは「旅」で、第1週の題は宿、第2週は駅第3週は道とし、投句は各題に即した未発表句を葉書一枚に一句、〒104―11東京都中央区築地5―3―2・朝日新聞社アサヒグラフ編集部「時実新子・川柳」係へ送ること。締切りは11月25日。

★『川柳塔あおもり』は9月26日、創刊号を発刊。

★全国郵政川柳人連盟は、『郵政川柳漫画句集』を9月に発刊。松高秀峰・恒松町紅・小島蘭幸・森井菁居・八木芳水・越智一水氏らの句と漫画を掲載。

★林野甦光氏（呉市・本社理事）の句集発刊記念第22回串かつ川柳大会が10月30日、呉市総合福祉会館で盛大に開かれた。

★9月23日から26日までフォラムで開かれた「パフォーマンスぶんこん展」に西田柳宏子・稲葉冬葉氏や八尾市民川柳会員の川柳、山下みつる氏の盆栽、高杉千歩氏の日本画などが展示された。

★9月18日、朝日生命ホールで開かれたNHK学園近畿川柳大会で寺田裕美（和歌山市・同人）、西浦小鹿（鳥取県・誌友）が秀句賞を獲得した。

★橋本市文化祭参加『山柿』百号突破記念川柳大会が、

「茴香の花」選者交代

昭和64年1月号から女性コーナー「茴香の花」欄の選者を八木千代氏から小出智子氏に交代します。投句先は次のとおりです。

〒544　大阪市生野区勝山南1―18―10
小出智子

川柳塔社

☆新年号特集☆

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

（今年中に発表されたもの）

●締切　**11月25日**本社着便まで

年賀広告募集

★一口千円（23cm×7cm大）
（本誌柳界展望欄の一段＝二、五〇〇円）

★原稿締切＝**11月25日必着**

★送り先＝〒581　八尾市中田二―三〇二
高杉鬼遊方　川柳塔会計室

11月3日午後2時から同市教育文化会館で開かれる。兼題・選者は次のとおり。

項固＝平井綾女・風＝森下一義・咲く＝馬場明子・理屈＝阿萬萬的・おしゃれ＝野村太茂津・席題＝岩倉天彦。

★水粉千翁氏（倉敷市・同人）は前号既報のように第40回西日本川柳大会で久米南町長から感謝状を授与されたが、下掲はその喜びの写真である。

★長野文庫氏（今治市・参事）の顕彰碑建立と汐風川柳社創立40年記念を兼ねた祝賀会が11月13日に開かれる。碑の建立地はJR亀岡駅裏遊園地。

ふるさとの素顔にこころ洗われる　文庫

★『ますかっと』10月号の「川柳女心と男心」に矢内寿恵子氏（岡山県・同人）の句が掲載された。

指きりは考えますとそれっきり　寿恵子

★東野大八氏（相談役）は『柳宴』9月号に「李香蘭伝説」と題して執筆。

★野村太茂津氏（和歌山市・副理事長）は『川柳えんぴつ』9月号の巻頭言に「哀・憐・憫」と題して執筆。

▽逝去△

■岡崎祥月氏（松江市・元本社同人）が9月20日、松江生協病院で逝去、77歳。

人という字にさからわず世を渡る　（遺句）

新同人紹介

田中紀美代
―栞・鬼遊推薦

小田川智重子
―薫風・白汀・清泉・はるみ推薦

番傘創立80年記念近畿川柳大会

日時　**昭和63年11月27日**（日）午前11時開場

会場　**太閤園**（大阪市都島区網島町9―10）
地下鉄谷町線「天満橋」下車東へ
JR環状線又は京阪電鉄「京橋」下車西へ

◎記念式典　同人歴45年以上の同人を表彰

◎講演　「話上手で心をつかめ」　浜村　淳氏

◎句会

席題　古川　一高選

宿題　志水浩一郎選

「道」　田頭　良子選

「戦（いくさ）」　玉野可川人選

「トップ」　去来川巨城選

「弾む」　西尾　栞選

「客」　奥田　白虎選

（**事前投句**）「漫画」　磯野いさむ選

（**事前投句**）「傘」

※事前投句は所定用紙に記入、10月31日必着、番傘川柳本社へ。

※各題2句締切12時30分　欠席投句拝辞

◎会費　一、五〇〇円（昼食・記念品呈）

◎懇親パーティ　八、〇〇〇円（予約制）

主催　番傘川柳本社

昭和63年度

川柳塔社同人総会

63年10月2日

昭和63年度の川柳塔社同人総会は、10月2日（日）午後2時から大阪市立労働会館で開かれた。西田柳宏子氏の司会で阿萬萬的氏が開会の辞をのべた後、西尾栞主幹を議長に選出して議事に入った。

はじめに高杉鬼遊会計室長が、62年度の貸借対照表、損益計算書を掲示して詳細に説明したが、今期は『川柳塔』誌のページ数増などのため、経費が増加したことを指摘、金井文秋会計監査が会計監査報告を行った。

続いて辻白渓子氏が次のとおり事業経過報告を行った。

〈事　業〉

62年10月・同人総会（4日大阪市立労働会館）

62年10月・18日尼緑之助の文化奨励賞受賞祝賀川柳大会へお話橘高薫風・選者黒川紫香・塩満敏他参加（出雲市）

62年10月・26日京都塔の会は松川杜的の路郎賞受賞記念句会を京都府立セツルメントで開催

62年11月・15日鹿野町みか月結成七周年記念へ選者黒川紫香・野村太茂津他参加

63年1月・15日新春おめでとう会（大成閣）

63年5月・15日小林由多香句集発刊記念大会を鳥取で開催、お話黒川紫香、選者西尾栞他参加

・29日汐風川柳社創立40周年第34回愛媛川柳研究大会（月原宵明会長）開催

63年6月・5日「川柳まつ江」は柳楽鶴丸の句画集発刊記念大会開催、お話黒川紫香、選者橘高薫風・河内天笑他参加

・11～12日第12回全日本川柳大会へ西尾栞以下30余名参加、選者黒川紫香（千葉ニューパークホテル）

63年7月・24日木次むらくも川柳会は堀江正朗・園山多賀子・中川幸一の喜寿記念祝賀句会を開催

63年8月・21～22日第3回川柳塔勉強会（寸又峡温泉飛龍荘）

・28日第12回茗人忌川柳大会（鳥取市）お話板尾岳人、選者野村太茂津・阿萬萬的・宮園射月芳他参加

63年9月・3～4日弓削川柳社創立40周年記念、瀬戸大橋架橋等の西日本川柳大会へ選者西尾栞他参加

・15日南大阪川柳会は金井文秋喜寿祝賀句会（高松会館）を開催、お話橘高薫風、選者黒川紫香・阿萬萬的他参加

・25日大原川柳社の三〇〇号発刊記念大会（大原町総合センター）へ選者河内天笑他参加

〈受　賞〉

松川　杜的　62年度路郎賞

土居　耕花　同　同　準優秀作第一席

樫谷　寿馬　同　同　準優秀作第二席

河瀬　芳子　62年度川柳塔賞

流　奈美子　同　同　準優秀作第一席

藤井　高子　同　同　準優秀作第二席

木山　遠二　62年度愛染帖賞

西山　幸　62年度茴香の花賞

江原とみお　津山新聞社賞（第39回西日本川柳大会）

中原　諷人　第5回川柳Z賞佳作入選

林　瑞枝　同

久保　正敏　第2回国民文化祭文芸大会賞

安平次弘道　同　秀作入選

有働　芳仙　第1回NHK学園全国川柳大会特選
河瀬　芳子　同　入選
安平次弘道　同　入選
奥山美智子　徳島県文化協会賞受賞
尼　緑之助　県芸術文化発足20周年の功労者として島根県から表彰
河内　天笑　山陽新聞社賞（岡山県川柳大会）
八木　千代　米子市会議長賞　第11回
政岡日枝子　米子市教育長賞　鳥取川柳
江原とみお　NHK米子放送局賞　大会
春城武庫坊　尼崎春の川柳大会　秀句賞
春城　年代　同　秀句賞
河瀬　芳子　第11回阪神文芸祭川柳部門佳作
林　はつ絵　同
春城武庫坊　豊中もくせい川柳会年間賞
田中　正坊　62年度各地柳壇賞
高杉　鬼遊　第12回全日本川柳大会賞および川柳大賞

〈句集発刊〉

田中　隆二　「かぼちゃぱい」
柳楽　鶴丸　「自然点火」
小林由多香　「いさり火」
越村　枯梢　「二河白道」

〈物故者〉

大山　と金（62・12・1）
草刈　堕駄（63・2・15）
市場没食子（63・3・2）
木山　遠二（63・3・5）
尼　緑之助（63・4・6）
井阪東天紅（不明）
新谷　笑痴（63・8・4）
脇田　米朝（63・8・24）
川村　好郎（63・9・4）

〈新同人〉

井上白峰（大阪市）山谷山竿（五所川原市）
吉川一郎（福岡市）河瀬芳子（高槻市）植村喜代（河内長野市）真喜内実（弘前市）古田大虚（竹原市）石原淑子（竹原市）信本博子（竹原市）田中新造（広島県安芸郡）藤解静風（広島県豊田郡）松井かなめ（有田市）小村てい子（米子市）白根ふみ（米子市）河原恵美子（出雲市）久谷まこと（出雲市）鷲見章（八尾市）森川まさお（守口市）栗谷春子（吹田市）結城君子（守口市）江口明光（豊中市）土橋はるお（鳥取県気高郡）乾喜与志（鳥取県気高郡）池田半仙（岡山県真庭郡）津村八重子（鳥取県気高郡）田村きみ子（鳥取県気高郡）田辺炙六（倉敷市）冨岡温子（大阪市）谷口次男（鳥取県東伯郡）永田俊子（熊本市）相馬一花（黒石市）小寺花峯（弘前市）吉川寿美（羽曳野市）　以上33名

この後、黒川紫香副主幹から役員選出について提案があり、質疑応答があって満場の拍手によって全議案を承認、松川杜的氏の閉会の辞で総会を終了した。

（新役員）

参　事　阿部柳太・内海幸生・樫谷寿馬・笠原吸江・中川滋雀・中村ゆきお・佐野白水・久家代仕男

常任理事　吉岡美房・吐田公一・川島諷云児

理　事　小池しげお・森井菁居・小島蘭幸・中原諷人

（同人総会出席者）栞・紫香・太茂津・萬的・柳宏子・鬼遊・杜的・正坊・三郎・諷云児・白渓子・悦郎・重人・笛生・文秋・小路武庫坊・年代・智子・雀踊子・美房・しげお・寿美子・一二三・吐来・凡九郎・射月芳

金井文秋氏より
喜寿内祝として
金一封拝受いたしました
川柳塔社

63年度二賞表彰本社十月句会

十月二日（日）　大阪市立労働会館

二賞表彰の本社十月句会は、十月二日、総会と同じ会場の市立労働会館大広間で開かれた。はじめに西尾栞主幹から路郎賞の高橋操子さん（代理）、川柳塔賞の土居ひでのさんはじめ準賞受賞者に表彰状と盾が授与され、それぞれゆかりのグループ、柳友からお祝いの花束が贈られた。

表彰式の後、おはなしは西田柳宏子さん。今回のソウルオリンピックで本家本元の柔道が惨敗したが、これは技と技との応酬に終始する講道館柔道にこだわり、ポイントをとることに重点をおく国際ルールに目を向けなかったのが、一つの原因ではないだろうか。これは川柳も同じで、古い殻にとじこもっているうちにどしどし新しい芽が育っており、これに着目しなければ、日本の柔道と同じように取り残されてしまうだろう――と示唆し、「あなたから生まれた句があなたの川柳だ。人真似をするのではなく、もっと自分の句を大事にしてほしい」と訴えた。

初出席は清水利武（大阪）的場十四郎（尼崎）明壁敏之（尼崎）森安夢之助（尼崎）中沢向西（尼崎）前田巌（尼崎）尾宮弘治（尼崎）福田満州子（羽曳野）松本元江（岡山）土居ひでの（岡山）千原理恵（岡山）奥山晴生（京都）上島みゑ子（京都）小林幸子（京都）中井みきお（京都）中林酔虎（城陽）

月間賞は田中隆二さんが獲得。（正）

（進行―天笑）（受付―年代・いわゑ）

（記録―射月芳・月子）

出席者―幸・太茂津・紫香・千秀・柳太郎・千寿子・章久・冬葉・利武・十四郎・勝美・弘治・敏之・恭昌・光代・寿美・美代子・満洲子・隆二・歌子・夢之助・向西・重人・柳影・東雲・度・巌・三郎・柳宏子・みつ子・いわゑ・正坊・智子・武庫坊・年代・はつ絵・美房・凡九郎・寿美子・栞・薫風・一二三・文秋・悦郎・喜風・諷云児・元江・理恵・ひでの・萬的・杜的・白渓子・妻子・あいき・登志代・亜成・狸村・博泉・勝晴・憲太郎・柳伸・ひで・さよ子・三男・吸江・英壬子・満津子・典子・英子・楓楽・晴生・酔虎・みゑ子・みきお・幸子・恵美子・昭子・笛生・武助・規不風・雀踊子・しげお・鬼遊・眉水・藤子・小路・作二郎・敏・射月芳・〆女・月子・天笑・頂留子・史好・寿子・美智子・岳人・幸代・庸佑

席題「招く」　奥山晴生選

提灯が招くおでんも煮えている　歌子

招かれたので服を買う靴を買う　幸

招かれた本家に座る順があり　〆女

松茸狩りに誰も招待してくれぬ　楓楽

道祖神の招きに秋のひとり旅　みつ子

雨の午後電話で女に招かれる　萬的

仏滅の結婚式に招かれる　笛生

招かれて幽玄に酔う薪能　正坊

女たらしが来たと知ってる招き猫　眉水

南海ホークスの招待券がふいになる　三男

平服という招待状に迷ってる　いわゑ

ご招待しますご寄付を待ってます　一二三

招待状ありがた迷惑とも思い　登志代

かぶと虫戦を招くのはよそう　はつ絵

招かれて一期一会の輪に並ぶ　元江

招待席で瞑想している哲学者　雀踊子

招かれてやっぱり媚びていた祝辞　美房

つり橋の向こうに招く柿の朱　幸　子
福招く大きな耳を持っている　射月芳
義理で来た招待席で眠くなる　柳太郎
父招く阿波踊りなど見せたくて　妻　子
ポスターも一役買った村おこし　柳太郎
礼服が合わなくなった招待状　しげお
女を招くと遠い枯葉を数えてる　作二郎
三田から松茸めしに招かれる　みる子
秋たけなわ法事ばかりに招かれる　満津子
紙人形の眉にやさしく招かれる　寿　子
一冊の本にじっくり招かれる　美智子
菊日和招待状と重くいる　みる子
土びんむしきれいな酒に招かれる　恵美子
招かれたので金魚の黒い尾を褒める　作二郎

栞主幹を囲んで喜びの受賞者：前列（左）土居ひでの（右）児玉歌子・高橋幸代（操子代理）：後列（左）奥田みつ子（右）榎本吐来

招き猫客が減ったなと思う　月　子
一本の藁があるから招かねば　太茂津
招かれて花屋の前を通り過ぎ　小　路
しば漬に結局きまるご招待　恵美子
福を招く男の耳についてゆく　みる子
紅殻格子の影の深さに招かれし　作二郎
秋が来て猫も女もよく招く　恵美子
招かれた家の芝生は青かった　藤　子
通天閣の上で招くと嫁が来る　晴　生

席題「煙」　吉岡美房選

いいことを言っているのにけむたがり　登志代
霧雨がけむると女彩を持つ　幸　子
先手打つ煙幕と見た酒が出る　小　路
湯の煙アダムもイブも老いました　晴　生
湯けむりのヴェールで妻が美しい　満津子
野焼きの煙あとにふるさと捨ててくる　いわる
煙幕を張って逃げ道探してる　隆　二
落葉たく煙に尼僧おぼろなり　みつ子
煙の出ない玉手箱なら持っている　太茂津
煙ぼうぼう秋刀魚の詩を口ずさむ　智　子
火葬場の煙父は無位無冠　雀踊子
松茸を焼いた煙は許される　敏
硝煙の匂いが消えぬ世界地図　寿　美
枯菊に風呂の煙がのびてくる　栞
わたくしを送る煙に手をかして　みる子
秋刀魚焼くけむり生きてるなとおもう　幸
落人の里今日も煙が立ってます　萬　的
マンションに秋刀魚の歌が聞えない　楓　楽
藁人形をときどき焼いている煙　幸
ひとすじの煙になって過去がゆく　美智子
噴煙の真中で聞く山の私語　柳太郎
煙たいと思った姑の仏顔　弘　治
手紙焼く煙一つの恋終る　正　坊
唇を紫煙へ赦す日のゆとり　寿　子
湯煙に疼く小さな罪一つ　みきお
煙吐く汽車で召されたきりのひと　千　秀
まだ火種あるから煙ぐらい立つ　文　秋
死火山になったか噴煙あげぬ父　酔　虎
ゴミを焼く煙が隣へ行きたがる　白渓子
線香の煙と会話しましょうか　凡九郎
煙草の好きな父とロダンの像を見る　作二郎
煙立つ程には燃えてない種火　元　江
橋の向うに煙突がある昔がある　作二郎
水面下で紫煙ゆっくりくゆらせる　美智子
線香の煙言いたいことがある　恵美子
口のかるい男が煙のように消え　栞
白壁の町で煙草の火を借りる　作二郎
敵のない男が秋刀魚焼く煙　晴　生
狼煙をあげているのに誰も気付かない　智　子
いくさには遠くお風呂をたく煙　恵美子
煙噴く火種を妻は抱いて居る　美　房

兼題「幸い」　西山幸選

幸いの中で茶漬を食べている　耕　花
クレヨンの数幸いを塗り分ける　緑　良
幸いは此処にも花のひらく音　瑞　枝
幸いに今日も日記を書き了える　荒　介

幸いは二人残った花時計　耕花
幸いが秋の港に落っている　岳人
芋粥の湯気仕合わせを感ずる日　萬的
男には幸い苦労せずに生き　歌子
幸いを捜しあぐねて冬に入る　楓楽
幸いの軍手に添うた指をもつ　十四郎
幸いと言える無遅刻無欠勤　晴生
幸いなことに胃カメラ飲んだだけ　さよ子
幸いは時計の針が進んでた　射月芳
幸いを指の隙から逃がさない　しげお
幸いなことに家族の靴が減る　昭子
幸いに嫁の料理がみな旨い　紫香
幸いを裝う踵ちびている　太茂津
鈴振って幸い少し手の中に　月子
幸いな男に登る山がある　重人
幸いを包むリボンは地味でよい　楓楽
幸いに退院米が又研げる　弘治
幸せのポーズで画布をうめていく　ひでの
花鋏母の余生を幸せに　作二郎
幸せはゆっくりうな丼でも喰べて　武助
束の間の幸い切れた蜘蛛の糸　満洲子
幸いに遺産争う金がない　登志代
幸いにお隣さんも喫う煙草　亜成
幸多き女で花屋の花を買う　雀踊子
幸いにもわが家は青い芝生もつ　楓楽
合掌の小さな手から幸もらう　ひでの
幸いに思い通りの地図になる　美智子
莫迦になり切れたら幸せだと思う　酔虎
幸いに未だ整形の出来る顔　美房

幸せの枠を広げたがる女　武助
秋のおと幸い薄きペンネーム　恵美子
三度のめしが美味しいうちは幸せだ　智子
足もとを照らそ幸い掘り起こそ　満洲子
竹馬を降りて幸せ探しに行く　作二郎
片手鍋まだ幸せに気が付かず　智子
幸いを掴もうとする彼岸花　恵美子
貧しきは幸いなりと聖書いう　幸

兼題「走る」　里　小路選

よく走る人が先祖にいたそうな　元江
乗りかえにみんなが走るから走る　笛生
中流の中でチラシに走り出す　柳伸
パチンコの玉が走って雨つづく　恵美子
宿命のサラブレッドの血が走る　柳宏子
わたくしのジャンプ助走路長すぎる　寿美
地の果てへ手を取り合って走ろうか　敏
上向いた乳房の妻がよく走る　弘治
生きてゆく手駒上手に走らせる　太茂津
すっきりと走って飯がうまくなる　美智子
人ごとでないな救急車が走る　恵美子
小走りの男笑っているラッシュ　重人
走ったら間に合う靴をはき直す　笛生
条件に走る早さも入れてある　幸
走りつづけて師の影を見失う　冬葉
警察の前を曲ってから走る　智子
欲求不満です走ってみようかしら　栞
意欲満々ひと足遅れてから走る　寿子
衝動を押さえて走るペンの先　亜成

情報が走る電波は眠られず　典子
走っても走っても追いつけない寝汗　武助
小走りで好きなあなたに合わす幅　雀踊子
ふたありの前を走っている噂　晴生
墨がまだ匂う女の走り書き　歌子
走り去る男にあった向う傷　緑良
感情に走って解けぬもつれ糸　隆二
どん尻で走る不様は子に見せず　千秀
八起き目は妻が伴走してくれる　諷云児
走らねば走らねばとフライングをとられ　美代子
走り抜けたのは善人の魂だ　作二郎
鉛筆が走る自信に満ちた顔　〆女
母のメモ走り書きでもあたたかい　登志代
金借りに走る社長もたんと居る　歌子
忘れ物されて四つ角まで走り　天笑
功あせることも無いままひた走る　いわゑ

黒川紫香氏に尼崎市文化功労賞

川柳塔社副主幹黒川紫香氏は、多年にわたり川柳を通じて市民文化の向上に貢献したとして、尼崎市から文化功労賞を授与されることとなり、十一月二日、表彰式が行われる。

稲妻が走る不惑の胸の中　みつ子
走り続ける女に恋がついて来ず　萬的
盲導犬走ることなど考えず　紫香
完走のゴールの父を称えよう　美房
走り出す噂を防ぐおとし蓋　寿子
真直ぐにしか走らない子で疲れ　小路

兼題「眼鏡」　阿萬萬的選

梅を干すのに眼鏡などは要らぬ　荒介
眼鏡かけ昼寝している粗大ゴミ　岳人
野良仕事眼鏡は家へ置いて出る　白渓子
眼鏡拭きながら反論組み立てる　柳太郎
とんぼ眼鏡で秋の虚しさみつめよう　幸
めがねふく嘘をわからぬように拭く　しげお
人情に弱い眼鏡はすぐ曇る　諷云児
サングラス本当の自分は見えません　杜的
眼鏡たたんで新聞捨ててゆく　栞
美しい花に眼鏡ははずすこと　素美子
サングラス友を裏切る嘘を言う　一二三
眼鏡かけ地図を広げる旅プラン　正坊
生きてます老眼鏡が二つある　重人
タイミングずらす眼鏡をふいている　楓楽
説教をしてるとずってくる眼鏡　亜成
保証印めがねはずして押してくれ　しげお
眼鏡外して空の蒼さに溺れよう　寿美
言い負けて眼鏡だんだん重くなる　柳太郎
老眼鏡ずりあげ覗く請求書　三男
サムライが眼鏡かけてる映画村　狸村
眼鏡もう少女の線を越えている　吸江
さりげなく眼鏡をぬぐう夜の孤独　勝晴
その奥に愛情溜めている眼鏡　千寿子
結論のゆとりへ眼鏡かけ直す　寿子
読む喋る眼鏡二つが忙しい　柳宏子
涙もろい男老眼鏡とはかぎらない　栞
筆を持つ男で眼鏡の度が進み　悦郎
お茶の間の老眼鏡は喋りずき　みゑ子
京料理食べる眼鏡をかけ替える　楓楽
よく見える眼鏡をかけて肩がこり　藤子
生活のゆとり眼鏡にまで着替え　晴生
秋深く眼鏡を探しあう夫婦　恵美子
だんだんと父に似て来た眼鏡拭く　吐来
自慢にもならぬ老眼鏡が要り　恵美子
老眼鏡でっかとあなどるように寄り　萬的

兼題「話」　西尾栞選

まつたけを食べた話は隣から　恵美子
ツバ吐いて土地高騰の話聞く　一二三
萩の道わかれ話がもつれだす　楓楽
金賞に話がはずむ菊造り　憲太郎
子に甘い話聞いてる紅生姜　しげお
その先の話は聞かぬキリギリス　美智子
軽い話をしながらメスを研いでいる　幸
立話ストンと暮れる里の路　元江
身の上相談これも我が家に似た話　頂留子
吊り橋の中程にある法螺話　緑良
いっこうに話進まぬ金魚鉢　しげお
五目めし猫とはなしをしています　恵美子
遍路道懺悔話が落ちている　寿美
宮内庁の話に嘘が多すぎる　酔虎
もう後は金の話が残るだけ　白渓子
まつたけの話を鼻も聞いている　度
昔々の話はしたくないダイヤ　緑良
終電車だれも話をしてくれぬ　荒介
もう話終わりましたと起こされる　天笑
金貯まる話の本は買うてある　小路
身の上を話す女が怖くなる　杜的
三和土にも話上手な女下駄　岳人
よい話天声人語から拾う　吸江
ダムの町古い話にことかかぬ　みゑ子
話し中続いて疑い深くなる　登志代
訥々の話が好きなつくね芋　千秀
たとえばの話で仮面をはずされる　悦郎
女ばかりの話は聞かぬ方がよい　年代
謎の別れ話を星は知っている　瑞枝
傷口に触れずに話聞いてやる　諷云児
父と息子の話へ入る隙がない　英子
お開きの手前で話こじれだし　美代子
雪国の悲恋を語る竹人形　〆女
幾度でも母の話を聞いたげる　規不風
話し方亡母に似て来て亡母の年齢　千寿子
蟬殻を拾うて僧の話聞く　作二郎
やわらかい話に胡麻どうふを崩す　恵美子
ここだけの話を五人目にしてる　酔虎
雲行きがなかったことにした話　憲太郎
紙コップ話相手を選ばない　隆二
てがら話闇夜の海でききましょう　栞

（清記・楓楽）

花地柳壇

毎月25日締切。原稿用紙使用。雅号含めて20字まで。一人一句。担当・玉置重人

川柳泉尾　吉川　寿美報

一言が言えない儘に悔い残る　途子
そうむきにならずにおくれカンナの朱　美代子
たぐり寄せる遠景にある覚え書き　美子
真夜中のジョーカーにのる白い指　弘子
花びらが可哀想ですスキ・キライ　伴子
生活の匂いしみこむ市場籠　文子
風鈴にみどりの薫る風が吹く　シマ子
ささやかな贅沢私の夏帽子　はつ子
子離れの夫婦オレンジ色になり　靖子
花柄のスカート夫の目が移る　あやの
エレベーター話半端でさようなら　きよ子
古写真弾んだ鼓動聞こえそう　淑子
軽快の兆見付ける気の弾み　シメ子
石仏もみどりに染まる山の道　白水
茶畑のみどりに映える赤だすき　敦子
都市砂漠抜けて緑の風に逢う　トミ子
トラックに牛の瞳がみどり恋う　昭子
産み終えた心が女を強くする　美南子
子を生まぬ乳房未完のまま閉じる　美津子
敵に塩送ったゆかしい物語　義一
ならされた舌が知ってる塩加減　悦子
塩きいた女でいつも叩かれる　和子
勤続二十五年夫と子供に助けられ　三千代
峠までまだまだ遠い塩の道　敏
塩壺の底に女の不発弾　寿美

川柳後楽　井上柳五郎報

母は胸父は背中で子を育て　桃風
この彼女乗るのかボート可哀想　美智子
喝采の途切れたころに出る男　九坡
喝采はないが一家が無事に生き　吟平
喝采の後は孤独な席が待ち　柳五郎
喝采の隣は窓を閉めたまま　たけ志
ぼろぼろになって不徳を詫びている　文平
ぼろぼろの人生自分史を綴る　哲郎
ぼろぼろの我が子抱える母の海　義親
青年のままぼろぼろの辞書がある　草風
ふるさとを留守にさせてる甲子園　金吾
乗り心地いかが陛下のヘリコプター　博友
なだしおは寄ってたかっていじめられ　秋月
自動車を盗めば子供のオマケ付き　鮫虎狼
あなただけと錯覚したのが運のつき　玉水
錯覚で生きてきました恥もなく　拓治
六十路きてまだ錯覚の美酒に酔い　青銅
罪な神近頃錯覚多くなる　健一
錯覚が人生六十路で分りかけ　照路
ぼろぼろのUターン青年山が抱く　紫峰

川柳はびきの　塩満敏報

話し好き閑な相手を探してる　志洋
小さい悪小さい善の中を生き　吐来
種袋夢がひろがる物語　重人
持つ持たぬ傘が知ってる倦怠期　隆
対面の親子に言葉のない涙　ケイ子
回覧板近所の噂も添えて置き　繁男
迷いつつ夫婦がたどる道が見え　与呂志
侮った水に命を奪われる　利武
絵天井に皆口開けて当麻寺　伴子
大空の花火飲みほす大ジョッキ　一枝
鈍才は源氏蛍に教えられ　忠宏
散歩道出会った人も散歩好き　蛙声
水遁の術使いたいこの暑さ　たけし
当麻町目立つ手型と竜吐水　白水
身代りに秘書を養う周到さ　健三
節水の苦労も知らず洗濯機　順子
バーゲンで買ったセーター大きすぎ　キミ子
名水を株式会社で売る神戸　悦子
太平洋バックに自分撮しとく　みつる
恋をする男が赤いバラを買う　泰子
自動ドア財布の重さ差別せず　敦子
夏祭り孫の歩幅について行く　末一
ここだけの話を肴に追加する　かつみ
鈴虫が寝ている足音控え目に　三世
エリートコスうっかり仮面外されず　昇
はなしの種に瀬戸の大橋老夫婦　(隅)義一
追加して夜空と語る大ジョッキ　トミ子
真実を明かしてほしい妻だから　淑子
世渡りが上手になった丸い肩　ダン吉
原爆忌おしいただいて水を飲む　美津子
見え透いたコース道草したくなる　希代司
ヘッドライトたこ焼きを買う女の背　絢子
水鏡人に負けない美人かも　(石)義一
ちょっといい話があって花を買う　淳一
一匙の追加で決まるかくし味　シメ子
地球から核を失くせと鐘ひびく　敏

川柳塔あおもり　波多野五楽庵報

無医村の島で神ともあがめられ　つる
孤独と戦うだけの島がない　花峯
地球儀はいう大陸も島のうち　玄哉
ご先祖が眠る千島の夢哀し　昭治
利権生む選挙に二分された島　叶
島暮らし慣れてもやはり京が好き　一花
坊ちゃんも驚いている橋の旅　ただお
墓参団痛む心に島は霧　つとむ
住む人がみんな仲良しおらが島　實
金策のメドがうれしい夏の傘　健治
島抜けの中に私の子が一人　五楽庵

川柳藤井寺　赤木和子報

カタカナの花の名前はすぐ忘れ　志洋
郵便の一銭五厘で召し出され　ときお
人の世話欲が出るのでもめてくる　きよし
立ちかけた腰をビールが座らせる　治子
ハイミスが条件見直す秋が来た　三郎
年金の振込み亡夫のラブレター　スミ
芋蔓の味は忘れぬ終戦日　吸江
条件づきで座った椅子が落ちつかず　美代子
虫の声消すには惜しい散歩道　繁男
条件を幾つ積んでもゼロはゼロ　美房
国なまり忘れた頃にふっと出る　かな女
歯の抜けた都会になった盆休み　昭子
一、二本残してほしい総入歯　敦子
忘れ物ないかと声が追うて来る　政代
せまい国車ばかりが多過ぎる　ふゆ
オートバイまだまだ見合いしてくれず　喜道
忘れてた知性のかけらポケットに　雅美
日傘くるくる君の言葉をかみしめる　彩
土用丑鰻も食べて運を待つ　初枝
調停の条件予期し身構える　和美
公約は忘れるものと決めている　祐二
力尽きたトカゲの尻尾にある未練　伴子
おみくじを結び未練を断ちました　政代
手の中でジョーカー操っている無口　与呂志
忘れたいことを一番覚えてる　婦美枝
ストレスが焼け残ってる僕の灰　本蔭棒
生と死の瀬戸際走る救急車　好太郎
未練げに赤いテールが消えるまで　秀伸
自動車の形も何も事故現場　松亭
自動車を拝せば陛下の手が見える　よう女
目印に教えてくれた赤ポスト　美佐
恋は終わって川面に揺れている花火　和子

川柳東大阪　森下愛論報

エメラルド老母の胸に神秘めき　綾珠
山小屋の青いラムネに塩の汗　松山
殉教の島哀しみは青く澄む　湖風
青リンゴむかし昔の夢を追う　晋吾
地球儀は青い平和な海なのに　俊一
一枚のメモに鱗を剝がされる　孤舟
記憶力どうにかメモでカバーする　美子
一枚のメモが波紋を投げかける　庸佑
週末はきまって誘いのメモがくる　慶三
鈍行の旅にメモ帖忙しい　勝美
相槌に困る孤老の吹きだまり　章久
困ってるのにお地蔵様の無表情　柳宏子
困ったらいつでもこいと名刺くれ　雅士
車天国歩行者困る街の風　喜風
困るワと笑う歯なみの美しさ　愛論
昔からああだと癖に抗らわぬ　雅風
昔より国で強くて女の世　しんじ
のきしのぶ昔なつかし涼をとる　貞子

城北川柳会　神夏磯典子報

おだやかに腰も曲りて八十路坂　寿美礼
働きに行く日夫機嫌良い　ふみ
親の画く地図を走らぬ子の車　ただし
四十三回目平和の鐘がこだまする　敏子
孫の守現代育児勉強し　よし子
未知数の道を選んだ子の自立　純子
若き日を瞼に浮かべ白髪抜く　文子
露踏みて老いに鞭打ちランニング　八重子
永年の勤続老いに浮かぶ忍　トキワ
肉づきの面に女の業を見る　静子
間違いの電話やさしい若い声　テルミ
原爆忌遠い昔が生きている　静歩
趣味の輪に迷い込んでる無智な蟻　佐津乃
あっけなく終りを告げた玉手箱　公一
旅の宿枕一つの味気なさ　白峰
縁あって結ばれました西東　午郎
一瞬の差を運命の冷酷さ　満津子
上役も働く同じ作業服　市郎
嫌な癖孫にも遺伝子混ってる　正之
平和の鐘聞いて幸せかみしめる　輝子
平均寿命遠い話にしておこう　笑風
話すこと途切れし窓の鰯雲　きくゑ
働きの悪い奴にも三分の理　秀夫
都市砂漠身の置き所など思う　典子
CDコンポ孫等の趣味に追いつけず　登美子
大文字初恋の火も遠くなり　新一郎
遠い日の悪夢ですまぬ原爆忌　達子
日の当る道ばかりない人生譜　温子

働いて食べる鰯も鯛の味　ふさ子
贅沢へ昔話がしたくなる　倫子
働いて積んだ積木は崩れない　右近

にた川柳会　西村早苗報

覚悟の上行列しよう博覧会　節子
金の無い奴ほど小銭見せたがる　夢酔
糸切った凧が絆を探してる　紫泉
浮袋一つで明暗分けた浜　花子
道聞くと私もそこへ行くと言う　〆女
凄い目で睨むと寝返り打ってチョン　裕
漁火が遠くちらちら父の船　巡歩
ほおずきの赤をもらいに里がえり　三和
向日葵の咲き場失う雨続き　雪代
一呼吸おいて返事は腹の底　重一
胃袋がさわぐ年金足りませぬ　哲三
しがらみの中でおしろい花咲いた　静子
旅疲れないと言ったら嘘になる　多賀子
六法に善人首を絞められる　由郎
いっだっけ預金の利子で旅行した　宗光
傘寿越し息子は免許とり上げる　冬明
雪椿わたしの相手がどっかいる　晴月
上流の気分で泊る旅の宿　雪子
長生きの笑顔へ保母が背を流す　鉄花人
ひとり寝の枕に想いのありったけ　きみえ
それぞれの人にまつわる運不運　登美也
なぜ捨てられたのかまだ知らぬ猫　寿美子
その頃の儘の木蔭へ乳母車　紫吻
冬蛍軽い命の火を点す　雀踊子
うっかりと甘い言葉に引っかかり　弘朗
ワープロは食わず嫌いで通そうか　愚童
波の音聞いて育った島を捨て　舞吉
地獄落ちしてもびっくりせぬつもり　雄々
無花果が熟れる私の手の高さ　早苗

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

掘出し品財布に駄目と断わられ　いわお
戦友の形見の財布に五銭泣いている　武庫坊
母と娘の内緒話に妬ける父　夢之助
膝抱いて内緒話が気にかかり　義嗣
澄んだ眼の心に怯む内緒ごと　歌子
脱サラし自給自足の理想郷　敏之
点滴で理想なくした車椅子　十四郎
理想ばかり追って妻子を困らせる　江美
父さんのようになりたい男の子　すみ
金の成る木を植えて昼寝をしてみたい　向西
帰国する機内で財布開けてみる　弘治
胡瓜曲って人の理想をあざ笑う　定人
自由吟出せと言われてとまどうて　六浦
シルク博つかれ顔を鹿が見る　美代
紺色が良く売れている面接期　美代子
あてのない朝を定時に起こされる　保蔵
花火待つ子に一日の長いこと　昌子
喪があけてくつろぐ窓の風涼し　美智子
旅に病みやさしさ貰う国訛り　紫香

尼崎いくしま川柳会　春城年代報

長旅も終りに近いと思う靴　定人
フランスパンの長さが胃液刺激する　武庫坊
長い旅雨の日は雨聞いている　はつ絵
逢えた日の長いみじかい日が暮れる　いわゑ
亡母の名が絶えだえにあり長い差し　芳子(河)
名前また変えて流れる長い川　紫香
木馬の耳の長い影だよ旅人よ　作二郎
スタートの時は頂点見えていた　正坊
小うるさい男を頂点にたてておく　杜的
頂点にいるのは僕と決めている　久美代(松)芳子
すき通る水に投げたいバラの花　かね子
投げ合いに一喜一憂してつかれ　曲ん手
身を投げる場所へこわごわガイドする　修水
打てるなら打てっと直球投げつける　保蔵
投げた石石にも根性あるはずだ　園歩
投げやりな言葉にひそんでいる闘志　春子
石投げて波紋へ足をすくわれる　英子
投げキッス風化したよと笑われる　正一
投げ縄も上手な妻で乗りこなす　〆女
石投げて波紋追うてる待ちぼうけ　美智子
ビンボール投げてしまったなと思う　みち子
へそくりの場所を忘れてうろたえる

佳句地10選（前月号から）

松本一郎選

朝掘りの竹の子土の香ももらい　一乗
ふろしきで母来てくれる柿の出来　操子
病院の雨はいのちを考える　美幸
秋に嫁く娘と寄り添うて夏祭り　婦美枝
三つ目のクシャミがとても気にかかる　早苗
野辺送り天寿と人は言うけれど　八重子
いささかの私財余生を花と生き　花梢
世の中を見たくて井戸を出た蛙　千代美
団欒の温みを掬う貝杓子　俊子
祝い唄いずも訛りで盛りあげる　正朗

水泳を覚えた浜に防潮堤　ときお
秋風にそぞろに想う風禍の街　静夢
傷あとは貫通銃創とは見えず　眉水
善人にされて仮面がはずせない　諷云児
背のびして見送る母の丸い背な　散歩
学歴が邪魔して職を選り好み　白渓子
手づくりと書いたとうふを一つ買う　一郎
囁いた男と逃げる放浪記　歌子
炎天下余分な話あとにする　萬的
睡蓮の赤を見上げていた蛙　年代
一人芝居で投げる言葉が小気味よい　江山

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

親孝行そんな言葉もありました　志重
クーラーの月賦の風は生ぬるい　静香
素うどんの味天かすに邪魔をされ　つた子
ため息のベッド励ます嘘一つ　美恵子
燃えさせる畑があって老い達者　伊久栄
値下げなどどうあれ稲田青々と　甫正
大海の話はメダカ通じない　知代子
若き日の友なつかしむハイネの詩　つゆ草
ジンクスをかつぎ紫陽花部屋に吊り　英子
暑いなど愚痴は言わない向日葵に　保恒
快方のきざしお粥に味ができ　藤江
肩書きがついて威張って見える顔　吟平
出目金が威張って泳ぐ金魚鉢　邦人
見くびるなメダカ或る日の空威張り　千代女
おいらん草気まま隣に行って咲き　禅心
風船が飛んで気ままな風の旅　さわる
先立たれ気ままをせめている孤独　ふさえ
ストレスを吐き出すように三原山　明子
ストレスに写経をさせて波しずか　山人
ストレスが溜れば空をとぶ男　ひろ子
ストレスを趣味に切り替えVとなす　半仙
ストレスを解消するに酒がいり　賛平
水虫も軍歴があり共に老い　〆女
宣誓は元気一杯天を抜く　秀香
ストレスの捨て場自分で撰る自由

岸和田川柳会　植山　武助報

向う岸幸せ渡す弥陀の舟　みのる
極楽へ行くと約束する和尚　狸村
約束が本当になる祭の夜　一弥
闘病へ約束事が多すぎる　ひで
キッチリと約束守る花の彩　甘平
生命線長い花道みぞれ雨　加代子
大正かまだこれからと明治いう　希久志
玉音を背に聞いた子亡父に似る　寿美子
車座がうねるデカンショ同窓会　浪速子
一言で家族押えた父も老い　通彦
生活の詩をゆっくり聞く老後　武助
参道で鳩が案内してくれる　さよ子
他人から見れば似合いのよい夫婦　冨志子
生きてます生きてますよと老いの声　幸代
減税は良いが追打ち消費税　ゆづる
消費税やっぱり弱い人を攻め　ダン吉
帽子掛けに男一人のシャツを干し　白光子
無理やりに唄わされている音痴　こう
女耐えるその一言を待っている　初太郎
バーゲンで得した様に買いあさり　春栄
生きている事が不思議な病みほうけ　操子

佐川川柳　赤川　菊野報

文教の町に歴史が返り咲き　和興
夏草の中山峠に聞く由来　節子
カルストの自然が語る古代石　憲一
何度でも来たい佐川を後にする　幸菜
青山文庫志士の達筆やっと読み　たかし
脱藩の志士が歩いた獣道　松風
水浴びの美人に会えた春日川　幸泉
遠来へ司牡丹の封を切り　白水
小京都歴史の重さ匂う町　一郎
鐘一つ撞いて煩悩空へ消し　稔夫
駅舎にも昔が残る木の温み　初江
古きよき佐川歴史にある重み　一人
青山に佐川の歴史生き続け　千鳥
吟行へ深尾城下の蟬しぐれ　あつ子
ふる里の歴史を語る脱藩碑　菊野

三幸川柳教室　桜井　千秀報

濃く淡く四季折々の湖の色　まさお
ふる里は湖底になって眠る村　(前)美子
富士五湖へ貴女の姓氏となる旅路　みね
逃げのびて生きよネス湖へ思い馳せ　カツミ
飽食の世に湖が病んでいる　正
水がめとなって責務の重い湖　愛子
湖に夏を呼び込む貨ボート　高夫
摩周湖はここだと霧を見て帰り　(福)美子
湖に野心を沈め無にかえる　正二
おしどりが湖面の妖気消しにくる　忠昭
話題にもならぬとこにもドラマあり　公子
あの話出ぬ間に急ぎ席を立ち　道子
通夜の席話題涙にかき消され　文夫
三世代同居話は皆合わず　計四郎
気晴しの話題は嫁のことばかり　可笑
兎も角も話題にのぼるうちが花　定
ペンよりもレンズに話題拾われる　隆行

白寿まで生きて噂にならぬ国　金一
例えばの話へチクリ出す本音　鉄治
猫に鈴着ける話で中座する　孝子
たわいない話題で徳利空にする　建子
手をとめてミイの話も聞いてやる　当代　芳枝
魔法の口から豊富な話題こぼれでる　(上)幸子
話題なく老夫老婦の日が暮れる　智水庵
いい話もう二、三本つけさせる　(中)幸子
真夏日に黙って釣る人見てる人　昭枝
黙っても目が語ってる解ってる　育子
八月の祖父頑なに口を閉じ　靖子
黒髪を落とした過去は言わぬ紅　桂香
黙りつづけて毬藻になった恋　和子
嫁ぐ朝黙って父の庭箒　由梨
黙ってるつもり飛び出た紀州弁　行夫
赤ちゃんの昼寝で一家黙ってる　千香子
重症へ医者は黙して迎えられ　朱夏
ふりむいて欲しい背中がおし黙る　純子
沈黙の森ナイターの灯がともる　千秀
指切りをしたから黙っていてくれる　保
黙禱を長いと思う第三者　茜
ほどほどのジョークに酔った月明かり　晏
ほどほどの暮らしのつもりまた赤字　三千子
ほどほどのとこで退き際考える

川柳塔からつ佐志教室　浜本　義美報

石橋を叩いて渡る子に育て　百万両
夏旱雲一つなき原爆忌　紫泉
地下足袋に女晒して日を稼ぐ　順子
粕漬けを食わぬ前から少し酔い　茂坊
逝く夏を惜しみ蜩鳴き続く　冬子
言いたいことを言わず後まで悔い残る　治幸

この暑さ買物バーゲン花盛り　マキ子
紅バラが老いのハートを踊らせる　喜久夫
悪人がふところ深く何か秘め　ちよ
リハビリの痛み耐えよう明日の陽へ　三枝子
漬物も固く食えなくなった義歯　義美

熊本川柳会　有働　芳仙報

がらくたを積んで未練を手放せず　幸子
子が越えてゆくのに強い橋となる　宵草
共稼ぎいつの間にやら歯が合わず　康子
ゴミ捨てに行くのにのぞく姫鏡　昭代
団交の峠を越えた紫煙の輪　緑
上役の好みに染まるカメレオン　俊子
税金のお釣り小銭の軽い音　市雄
Uターン都会の色に染んできた　一乗
あきらめか怒りの目色か檻の中　謹爾
喜怒哀楽砂丘に風の顔があり　芳仙

静岡市川柳塔同好会　永倉　僕川報

孫の夢壊さぬように嫁の手話　僕川
ほどほどの距離で同居の三世帯　弧秀
身のこなし衣装も凝って芸達者　猛士
好きなのに他人行儀がじれったい　金吾
持ち味を生かす同居の三世代　紀代志
悲しみの分かる男と煽てられ　定次
断わりに愛妻を又風邪引かせ　芳夫
仕合せを知ると靴音軽くなる　孝平
婆さんは下りると必ず買う土産　庚子郎
友達の愚痴を聞いてる小半日　やす
名案が浮かび揉めごと無事に済み　たま
若い嫁育児の本を見て叱り　たき
梅干を染めて行事が一つ減り　つね
いろいろとあって女の哀しい日　きん

莫迦なこと言う友達に気がゆるみ　きぬ
ハンガーにぐったり掛かる夏の服　まつゑ
老いの日々近くの友がありがたい　静代
いつからか親にさからう成長期　三津子
気取らずに本音の言える友がいる　久子
この婆婆で夢を売ってる宝くじ　房江
お使いが分ると孫の声低い　みつ
気疲れをたまには嫁の留守に捨て　千代

打吹川柳会　江原とみお報

あの人の目が私を見ていない　寿美子
波の音子亀が耳をかたむける　早苗
縁遠い女がダイヤ買いに行く　宗光
またしても政府要人軽いくち　巡歩
そこどけそこどけ潜水艦が通る　紫映
ふる里が恋しい姿になるコケシ　雀踊子
訳本へ日本の姿曲げられる　雄々
快方に向うと涙もろくなる　杜的
長々と喋った話生かされず　温子
七光遺産にされる選挙民　善政
指先が風鈴鳴らし秋を呼ぶ　正朗
先頭をきるメダカにも心意気　芳子
小鳥の死少女の心揺れにゆれ　妻子
欠点の一つや二つ人間味　紫泉
釣る針も餌もない骨っぽい男　柳風
巨人が負けて風鈴が鳴りだした　蛍
耳の穴せまくなるほど海あそび　三和
宿命を知らず水槽の魚たち　典子
惑いから決断せまる子の寝顔　吉朗
人間に惑いが消えて灰になり　梅朗
争わぬ妻はゆっくり黙秘する　喬水
人様に教える側にいて惑う　弘朗

大物ほど腰低いとはうなずける　菊枝
一人者しらずしらずに偏食し　節枝
カラフルな洗濯干して新世帯　八太朗
炎天を生きて稲穂が頭たれ　節子
野心ある内は孤立も楽しくて　日出子
隠し芸税金たんと積んだ顔　幸子
今日も本番米櫃が迫ってくる　とみお

川柳塔まつえ9月例会　恒松　叮紅報

炎天を帰り一気に麦茶飲む　玄艸
薬飲む千羽鶴から見られてる　小鹿
麻痺の手は薬飲むさえままならず　ノブ
薬飲む事を忘れた回復期　みえ
娘のつなぐ縁で目出たい酒を飲む　たつみ
漢方を百面相で飲みくだし　鳳人
待ちぼうけ一人コーヒー苦く飲む　博子
効くと聞き湧き水も飲む湯治客　代仕男
コーヒーを飲むだけにした初デイト　一進
父の日に父が手酌で飲んでいる　登美也
愚痴も飲み涙も飲んで越えた坂　三男
ふる里を沈めた水を飲んでいる　蒼流
霊感の壺に年金ねらわれる　愚童
壺の底人の温みを溜めておく　静恵
亡き母の思いは尽きぬ梅の壺　米子
小壺でも故事来歴は山と持ち　清志
伝統の家柄壺が愛される　小生
秋の草活ければ壺も秋の貌　寿美子
母さんの壺の重さよ胸を打つ　市雄
火消壺母の指紋がついている　操子
停年もなしまだ墨壺を握りしめ　妻子
贋作の壺を上手に買わされる　早苗
北斎の雨を溜めてる床の壺　瑞枝
骨壺に納まるだけの量になり　多賀子
味噌部屋に明治の母の涙壺　律子
遠縁の名刺も寄ってくる遺産　翠星
なんとなくなまめかしい花名刺　静翁
ポケットに言いわけ出来ぬ魔の名刺　友子
いつ来ても留守だと名刺がおいてある　満江
胃の底へ逢いたい人の名刺もつ　雄々
愚痴一つ言わぬ肩書のない名刺　貢範
名刺もういらない夫の背が丸い　秀子
反骨らしく名刺に金釘流　鶴丸
人柄に添うて名刺は出雲和紙　芳子
振り向けば亡夫の名刺がそこにある　文子
名刺にはいくさのあとが残ってる　久枝
肩書が出来て名刺も忙しい　正朗
会いたくて名刺の裏に地図を描く　昭二
蝶タイの赤が気になる舞踏会　長三
ネクタイも締めて誓った二十歳の日　幸子
ネクタイの変化は不倫しています　与根一
猫舌に限って熱いお茶が好き　静江
猫舌ですき焼鍋に親しめず　巡歩
焼き立ての味を猫舌まだ知らず　舞吉
猫舌でいつも遅刻をする電車　叮紅

川柳大阪　山下みつる報

実力はないが代りに銭がある　金太
一生を気楽に泳ぐ雑魚でいる　雅巣
知らぬ顔できぬ相手が注ぎに来る　比呂志
本命が雑魚に一着さらわれる　希久志
縄のれんとなりは億の話なり　しげお
梅雨明けを騙されなんだ蟬の声　柳弘
素人の釘長くてもきいてない　与呂志
残念は息子に齢を労われ　重人
気の重い返事そのくせ飛んでくる　喜酔
新人類などと老骨いらださせ　軒太楼
姿見で自惚れ消える老いの皺　亮太
湯加減が良いらし鼻歌が聞こえ　宙々
現代っ子本当の旬知らず食べ　正之
歳くって夫婦の味をかみしめる　一歩
消費税やがて空気も対象に　凡兵
実際は座りたくない義理の席　酔舟
絵本見てお話できる孫と居る　天平
読んではる本は絵本という車中　凡九郎
中古だがまかして安心わが女房　遊心
中古で大きくなった子だくさん　喜楽
中古でも化粧次第で高く売れ　鈍泉
夏祭り夜店で中古たたき売り　三千雄
中古の畳の角でけつまずき　哲流
中古を直して使ったあの時代　もとみ
来るこない物が腐って盆終る　司
はぐれ雲母の絵本の中にいる　笑風
縄のれん悪知恵入れる友と酔う　洛酔
成人の絵本一ヵ所ぼやけてる　本蔭棒
おふくろの味がしみ込む中古鍋　鉄心
玉虫の色が今年も売れてます　敏
中古の再生かけてドック入り　みつる

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

税金の無い国せめて夢に見る　高明
吉備団子これで猿雉つったのか　虹汀
半世紀残る桜も散りはじめ　幸夫
父に似た人を選んだ娘です　旭恒
御巣鷹の慰霊へ放す虫供養　朴竜
バイパスで抜けて木曽路は山の中　四郎
戦前派威儀を正して聴く国歌　タミ

メダカにもルールがあって群れている　正　敏

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

今日もまた延長線の靴をはく　かつ子
ひまわりの聞き捨てならぬひとり言　恵美子
折合わぬ議論実のない延長線　聖　子
失礼な話にピアス馴れている　はるみ
ひまわりを愛しつづける陽の高さ　鈴　江
失礼な言葉が胸につき刺さり　ヒデ子
延長線心ゆたかに延ばそうよ　民　子
振り向かず延長線をひた走る　智重子
観光のために白鳥羽根切られ　世　似
天皇の命令なくて飛び込めぬ　悦　良
罪ぶかき延長線に僕もおり　清　泉
安静タイム大きく欠伸して終る　天痴人
海鳴りは午前三時の慟哭か　歳　栄
目ばたきもせずひまわり陽を愛す　白　汀

川柳高知　川竹　松風報

下手をして自ら重い荷を背負い　竹　萌
お上手とおだて音痴を唄わせる　功
クレヨン画下手か上手か似るピカソ　朱　坊
泣かされた数だけ女強くなり　菊　野
得票数ダルマ片目で耐えている　和　興
あらかたの数をふまえた立候補　節　子
頑固さへ笑って従いて行くも愛　とみ子
日の丸を揚げて一日遊びます　和　広
本心は遺書が明かした父の死後　かず子
もう一人の私見つけた酒の席　玲
耳栓を時折はめる処世術　淳　枝
嫁き遅れ独身主義に切り替える　高　重
熱帯夜眠れぬままの盗み酒　孜　郎
名人といわれる人の奇行談　一　求
名人と棋聖どちらが上だろう　佳　風
名人と言われるまでの噂聞く　松　風
名人に世間の風がつめたすぎ　幸　泉

川柳化粧櫓　植村客遊子報

亡母と見た記憶がよぎる流れ雲　岳　詩
最低の暮らしへ老いの知恵しぼる　秋　月
振り出しに戻れば鬼はついてこず　越　山
シャッターチャンス狙う片眼がすねている　葉　香
市長さんだけに長寿を祝われる　紅　月
風花の舞うジョンガラを暖うきく　白　李
無学の話トツトツと嘘がない　礎　石
誓詞から始まる夫婦の嘘がある　大　鷹
タンゴ踊る年の事など言うまいぞ　悲　子
叱られる姿勢くずさぬ社長室　三　青
高一とブティック廻り又楽し　みつこ
腕白も眠ると天使孫二人　サワ子
幻影の泉と知らず恋蛍　遊　光
首横にしてから冷たい風に逢う　遊　峰
晩学へ希望に満ちた顔の艶　輝　月
年金に合わせ老爺は予算たて　永　楽
うんざりの梅雨も吹き飛ぶ娘の電話　瑞　穂
秘め球は二死満塁へよく決まり　五　幸
手抜きしたラッキョまずいと娘の苦情　遊
九回裏神風吹かず巨人勝つ　客遊子

倉吉川柳会　渡辺　菩句報

今の世に葷酒山門只の石　坐　牛
信楽狸が野宿を拒みだす　はるお
恐妻を地獄の門に立たせとく　十六夜
門下生先生よりも絵が上手　碧　水
民宿の夫婦おんなじ丸い顔　柳　風
旅の宿から宅急便で土産着き　とめ子
拝観を許して仏目をつむる　松　女
許す前一度お灸をすえておく　ひろ子
許してはならない雲が一つある　かつみ
門出るとすぐ七人の影動く　雄　々
許すなど言わずに温い手が握る　よしえ
弱虫の生徒核心ついてくる　満　春
ラーメンにうなされている受験生　ゆり子
六十はまだ青春の門の貌　洋
抱擁を許して秋を待っている　蛍
弱虫の色はたいがい青白い　みなと
三流の宿で狸にばかされた　とみお
弱虫だった男がボスになっている　次　男
全身に傷弱虫は起き上がる　瑞　枝
弱虫で天狗の面が離せない　荒　介
にんげんは弱虫だなあ赤トンボ　石花菜
お一人ですかと二度もきく変な宿　康　志
宿帖に偽名の書ける欄がある　秋　人
弱虫は虎の後ろに隠れてる　さつき
宿に着きスルメのような浴衣着る　康　子
許そうと思う真青な空だから　秋　女
口こみで繁盛してるラーメン屋　御　前
民宿のぬくみおかみの訛り聞く　由多香
人ひとり入れるほどの薔薇の門　千　代
門を閉めても迎えの馬車はやってくる　完　司
もう宿がないからソウルへは行かぬ　独　歩

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

今かいまかと帰る谺を待っている　日枝子
山彦の向うにあるかユートピア　玲　子
奥の院まで来てこだま突きあたり　花　子
好き合えば谺となってくる返事　時　子
新緑のこだま聞こうと足運ぶ　恵　子

ばんざいのこだまに思い出す戦　正子
ヤッホーの声が若いな谺して　瑞枝
句碑の声こだまとなって匂い立つ　てい子
仲間待ちいらいらしてもまだ仲間　八重子
この町に住んでうれしい仲間です　朗子
銀行の三時へ手もみして入る　亜弥
きまじめに天気を願うてるてる坊主　夕子
ふうせんのかるみ命のおもみだく　ふみ
孫がきて孫が帰って二人居る　智加恵
幕切れのせりふをすうっと抱いている　千代

西宮北口川柳会　松本一郎報

学校は親が甘いと転嫁する　保蔵
王様の耳には甘言だけ届く　正坊
流れつく巷で出逢うあたたかさ　柳影
頂点の人も時には目刺し食う　眉水
身をまかす水の流れに舞う落葉　よ志子
仏具屋のチラシも入る秋彼岸　よし津
ひとり居の夜長の友に本選ぶ　きよ子
何言われてもでんと構えている余裕　静子
甘くない甘き銘菓ののれん味　紀雄
当選をしてから舌を取り替える　恵美子
家中で選んだ子猫なつかない　てる
誰よりもピエロは赤い血を流す　いわゑ
発車ベルちいさな母の揺れる肩　嘉矩
その日から炎え立つような赤選ぶ　年代
生涯を農ひとすじの道選ぶ　諷云児
月見団子のまるさを余裕だとおもう　幸
流れ流れてつまずく石の重さ知る　〆女
選ばれるチャンスはあった放浪記　太茂津
流れ女が帰れぬ故郷の唄うたう　武庫坊
人の世の流れに沿うて眼鏡買う　はつ絵
猫は猫なり余裕見つけて寝てござる　萬的
亡母からのことづけがある流れ星　佳秋
肩車親の甘さを見せ歩く　白渓子
人工の螢で知らぬ甘い水　杜的
会釈から会話に変わる散歩道　園歩
三日月にわずかばかりの気を抜かれ　伊升
娘に甘えられれば機嫌なおる父　宣子
そして秋こころの余裕とり戻す　光代
逆境へ流れを変える父の唄　青珠
パレットに幸せ彩を選っている　美智子
甘い日もあった夫婦の日向ぼこ　英子
晩酌は妻と平均一合で　伊三郎
長寿国日本慶ぶべきか国憂う　千世子
鶏口となる選択に悔いはない　一郎
王手飛車指して一服する余裕　白宗
恋に疲れた女と直指庵で逢う　作二郎
小姑がたんまに甘い顔をする　房子
甘い言葉のひとつが欲しくて蛾が狂う　三笑子
やがて奔流夜の時間をもて余す　正一
檻に入れ終るとお茶を飲む余裕　東角
王冠へ選び抜かれた顔をする　定人
掃除婦の腰の軍手の白光る　美幸
寄り添えば妻はいつでも美しい　みつ子
選ばれた同士いたわる夫婦坂　ただし
どん底のこれより底がない余裕　保
二の足をふんでよかっただまし舟　俊子
老猫に恐るるもの無し秋の暮　信義
出っ歯かな出っ歯でないよ安堵して　六郎太
外見より心を選ぶと月にいう　紫春
貴方から仕事をとれば呆けますよ　芳仙
夏休み孫の背丈に妻騒ぐ　市雄
仏にも方便というらばなし　善太郎
昼下がり今日も一羽の鶴を折る　曲人手
つけで飲む店が休みであわて出し　みち子
花の香を選んで蜂のプロポーズ　一進
花街に濡れた女の手相見る　茂坊
米寿まで長く厳しい夫婦坂　万亀子
朝露を踏めば野菊の二三輪　勝美
メロドラマに夢中不倫適齢期　御前
足し算引き算どこも余裕のない暮し　枯梢
病床の母草取りを指図する　蛮拙
その時は賽の磧で考える　森生
瓢箪の真ん中握っている余裕　しげお
遠慮がちチャイムでわかる来訪者　春子
花の道選んで歩調ゆったり目　千秀
米朝の噺運びにある余裕　勝
茹でるまで蟹はガサガサ這うて逃げ　ノブ
手揉み茶を汗で覚える後継者　漠沓
砂浜が汚れ天女も降りられず　文夫
黄楊の櫛ひとつを選ぶ形見分け　(河)芳子
未練などないが元気で生きてほし　みね
歯の抜けた和尚の話面白い　紫香

富柳会　池森子報

女形素顔にまでも色気持ち　花子
新婚にまた年金をかじられる　静枝
頭から足まで新品すねかじり　トシエ
青い鳥追えばすずめが手のひらに　(伊)勇
子雀の大口親の顔も呑み　(田)勇
子は宝　宝に脳をかじられる　文次
肩書きのとれた素顔がほっとする　荘次
素顔見せまいと力んでいる素顔　維久子
すかたんに飲んだ売薬効いてきた　花梢

その中にいじめはいない群雀　柳太
相続税払って来ましたすねかじり　岳人
すかたんをしたらあかんと祖母の癖　昭水
人違いしたかと思う酒場の昼　富久一
素顔だと言っても信じない羊　森子

京都塔の会　松川　杜的報

片脚で立つ鶴だから絵にもなる　杜的
見通しが立って笑顔の房る父　よ志子
立ってごらんと退院の日が決まる　求芽
豆腐屋の繁昌嬉しい手を濡らす　花代子
顔を見ただけで苦手の意識持つ　白渓子
よろこびの涙で濡れて酒を酌ぐ　美智子
濡れているその名は哀し捨南瓜　麗水
聖書は苦手人間に完成はない　〆女
何事もなかった様に巡査立つ　紫香
波風の立ったことなど遠き過去　静代
反省の心をのぞく白い花　紅陽
連獅子の衣裳も重い巣立ちどき　京童
イエスさま苦手でブザを無視しとく　英子
乾杯に立って背筋をピンと張る　圭坊
口が立ちすぎて誤解の種を播く　颯云児
甲子園濡れてドラマが又生まれ　芳子

八尾市民川柳会　飯田　悦郎報

一合で足りるお米の老夫婦　勝美
一合を炊いてひとりの好きな物　冬葉
こぼさぬように米を抱えて戦中派　良信
飽食の舌に古々米嫌われる　英一
減反に案山子傾く米どころ　憲太郎
故郷は恋しきものよこしひかり　恒明
こしひかり知らぬ我が家の炊飯器　章
米よりもパンに馴染んだその歴史　しんじ

太い目に巻く豊作の祭り寿し　曲ん手
ふる里の祭りに合わしとく休暇　三男
お祭りが済むと親父の背が曲がる　度
祭り笛きっちりと来た奉賀帳　甘平
古老まだ譲る気のない枹さばき　晋吾
貧しくも母といっしょに見る祭り　夕花
母の出る幕がない育児法　とみを
無住寺の中で自然がよく育つ　和子
子育ては母の砂糖と父の塩　雅士
ふた親の夢を見ている子の寝顔　頂留子
堅物に育って愛が実らない　悦郎
やがて子は育つあしたへ徐走する　律子
総会に一株主がいけずする　東雲
ひと株にうじゃうじゃついたアロエの芽　しづ子
株株株財テクブーム過熱する　曲ん手
上り株茶柱立って売ると決め　覚然坊
来年を楽しみにする株分ける　庸佑
片方の耳が信じている株価　泰
妻の持つ株に時どきうなされる　一高
株で損何んとかなるさ金余り　雅風
上場よしもうかる株を秘書が買う　鯛牙子
くす玉を夢いっぱいに割る社長　喜風
手形を割って生きる明日を考える　雀踊子
指で割るリンゴまぶしい力瘤　柳伸
割り算を生かして今日も嫁姑　シマ子
シャボン玉割れて八月はかえらない　美幸
尺玉が割れて夜空に亡父が咲く　欣之
嫁の手に割れた花瓶が恨めしい　柳宏子

川柳ささやま　遠山　可住報

逆縁のしぼった乳が今朝も張る　文平
汲んでおく防火の水の無駄祈る　ゆうや

気兼ねしつ意見するどい嫁の位置　とみ子
朝夕の祈り心の角がとれ　金之助
祈りから覚め現実の苦に追われ　素水
つまずいて祈りだんだん深くなる　ヒサ子
今日生きる命を朝の陽に祈る　靖子
リハビリへ祈りをこめて踏む一歩　まさの
捨て駒に祈りが込めてある勝利　越山
香焚けばやすらぐ祈り母の朝　和子
茶柱の縁起番茶にある誇り　テル
そもそもの縁起見て来たように言い　ひか平
気兼ねせず夜の風鈴唄いだす　冨美
気兼ねした線で女が鈴を振る　つや子
言うことが言えて親子の手が温い　百合子
気兼ねなく女系家族の泣き笑い　千代子
口つぐむ事にもなれて老いの日々　貞子
内孫へ気兼ねせんならんとは何じゃ　可住

川柳わかやま　牛尾　緑良報

音消して堪忍袋縫うている　稚代
惚けないように老母に心配かけてます　英子
背を流す小さい母の背を流す　克子
意欲ある雀で海が見たくなる　狂虎
さりげなく意欲炎やしている無口　規不風
精霊を流す祈りの灯がつづく　白光子
流し切るこころの刺がまだ抜けぬ　信秋
どんぐりがぽとり可愛い秋の音　武雄
いのちしみじみ萩のこぼれる音を聴く　幸
風の盆胡弓と響き合うロマン　太茂津
ところてん何時かわが身と悟る老い　三男
坐ってるだけでよいから長生きで　光代
老母と結ぶ糸を長めに買っておく　忠雄
ばあちゃんの知恵を上手に頂こう　信子

敬老の日に老人が飛び降りる　桂香
オリンピック聖子ファイトに意欲わく　好笑
極限に立ってはじめて湧く意欲　恭子
思い出の子等の鈴音溜めてある　紀美女
二学期の音が広がる運動場　登志代
木魚の音ありがたいやらねむいやら　結実
鈴ひとつ火の棲みやすき音で鳴る　寿子
切り替える頭でぼやき聞き流す　豊太
座右の石撫でなで些事は受け流す　忠
聞き流す知恵そうかいなそうかいな　天彦
婉然と流す涙の裏を読む　正博
やせたねと言えずに流す母の背な　照子
夏草を抜いて爽やか老いの汗　瑞穂
畦草を抜いて並んだ彼岸花　守
足枷の音が男につきまとう　緑良

南大阪川柳会　中川　滋雀報

八月の牧師懺悔をくり返す　度
片言で島に馴染んでいる牧師　作二郎
独身の牧師に英語から学ぶ　元紀
少し背を曲げて牧師も十字切る　善信
青い目の牧師がうまい盆踊り　新造
バイブルの重さに耐えている牧師　柳伸
外人の牧師が降りた無人駅　正坊
傷つかぬ言葉で飾る物別れ　滋雀
物別れ蝶にも花の好き嫌い　英一
一言に悔いを残した物別れ　勝美
ぎりぎりに耐えた一揆の物別れ　雀踊子
根回しが効いて防げた物別れ　章久
物別れ女の謎は解けぬまま　曲ん手
すまないと言えぬばかりに又別れ　三重子
物別れしても血縁たち切れず　岩信

一点を睨みきれずに物別れ　晴風
物別れ心に消せぬ過去の傷　シマ子
リハビリを横で励ます妻がいる　恭太
横槍がはいらぬうちに釘をさす　藤子
淡い恋横を向いててやりましょう　恒明
酔いどれの横で離婚も考える　久子
横町の地蔵絶えない四季の花　喜風
毒舌の横が案外あたたかい　寿美
横を向く耳に困った声続く　雅風
浪人に秋は一と足先に来る　智子
三浪もやむなし国立すてぬ母　頂留子
浪人にあきて親父の跡を継ぐ　覚然坊
本人は案外暢気でいる二浪　公一
浪人も三年パチンコうまくなり　トミ子
やるだけやったと浪人限界さとりかけ　千梢
浪人をさせる余裕はないと言う　ハル子
本当に泳ぐ水着は売れ残り　柳宏子
なまじっか泳げるだけに気遣われ　庸佑
泳ぎつかれて島の情に触れている　憲太郎
目標は5キロ痩せたいスイミング　重人
一匹になった金魚が泳いでる　慶三
犬かきしか出来ぬ男のマイペース　文秋
荒磯で育ちプールで気が吐けず　しんじ

川柳泉尾　吉川　寿美報

降る星が重い荷物を持ってくれ　弘子
高波に幾度呑まれて来た自立　昭子
墓参り曼珠沙華から迎えられ　文子
木洩れ日のレース二人は若葉色　靖子
体調が狂ってしまう戻り梅雨　敦子
バーゲンで下った愚痴を着て見せる　きよ子
ああしんどみんなの顔も夏バテや　三世

朝顔の数気にしつつ朝寝坊　あやの
朝顔の蔓天にも届くかと思う　伴子
地蔵盆残暑に耐えて盆踊り　シマ子
八月の大阪どっこい生きている　敏
米の水飲んで父さん上気嫌　悦子
考える事に疲れて米をとぐ　道子
もどり梅雨米が病気になりそうな　美南子
米の飯と味噌汁みたいな夫婦仲　美津子
加州米迎えるコシヒカリの稔り　白水
楽しかった一日明日への潤滑油　和子
一日が始まる白い割烹着　トミ子
実りある一日でした軽い靴　シメ子
昼と夜のけじめ地球の二十五時　美代子
一日を一日として生きてゆく　義一
一日は我が一生の積み重ね　淑子
一日を三行文で締め括る　葉子
マル優廃止僅かな預金目減りする　途子
加減乗除脱水機の強ボタン　三千代
愛少し減って空気になってゆく　美子
減りもせで泪は女の強い武器　寿美

高槻川柳サークル卯の花　河瀬芳子報

マニキュアの嫁に糠漬きらわれる　文子
恋をする娘きれいに爪をきる　豊子
みどり児の爪はちいちゃな桜貝　稲子
しみじみと爪幸せと書いてある　年代
ライバルへ笑顔の奥で爪みがく　栄
少年に二度目の母の爪の彩　紅陽
ヒロシマで平和と書いた字の重み　漠沓
復興のヒロシマ見せたい人は亡く　ふみ
夾竹桃爆心地にも咲いたと言う　多賀子
ヒロシマのむごさを永久に伝えねば　あきら

八月の化石ヒロシマ蟬がなく　萬的
黙とうのヒロシマしばし疼き止め　越子
原爆ドーム先祖の呻き声にふれ　白渓子
ヒロシマの悲劇に時効などはない　颯児
娘の遺影と来たヒロシマの灯が揺れる　勝一
メガネ拭く仕草おやじに似てきたり　和子
めがね越し見る人生の恙無し　一進
動揺をかくしきれないサングラス　恵美子
サングラス女は齢を覗かせぬ　八重野
サングラスはずせば頼りない男　とおる
老眼に替えても戦意衰えず　芳子(河)
めがね越し客たしかめる古本屋　紫香
幽霊が舞台から読む客の数　俊子
幽霊に数えられない皿がある　〆女
引越しの寺へ幽霊ついてゆき　真笑
幽霊の白塗り足らぬ胆だめし　よ志子
幽霊と一夜をすごす熱帯夜　暢子
幽霊の眼と合ってしまったお地蔵さん　冬葉
幽霊になって出てやる女下駄　しげお
幽霊にこころ残りの預金帳　鬼遊
その沼でわたしもきいたすすり泣き　外吉
ゆうれいの雫しばらく佇っている　作二郎
家を出て辻を曲れば影二つ　輝夫
赤蜻蛉虫干し急げと竿へくる　春風
打ち水のせめて暑さを凌ぐ贅　陽露子
送り火の護摩木を運ぶ汗の坂　圭坊
ゲートボール恋の噂もちらほらと　英子
ああ水があいしいという過疎の村　千枝子
夕立ちも去った枝豆食べ終る　京童
また孫が一人ふえてる盆詣り　栄子
万歩計誇示するように歩いている　武茂

拝観料がっぽり取って暑い京　美智子
夏バテへ少し浮気な飯茶碗　芳子(松)
盆をまつ亡夫の若さに髪を染め　静江
誤解なら解けよう母がそっと言う　房子
きっちりと力は鞘に納めとく　眉水
青い実の熟れる日を待つ斬られ役　百合子
急いではならぬと言ってせき立てる　行平
盆三日釘付けに合う仏の膳　花代子
赤飯を配る母には母の主義　佐代子
死ぬときはひとりと思う戻り梅雨　如洲
亡命の蟻もいるらし昼下がり　正恣
いい事がありそう霊柩車に出逢う　杜的

川柳後楽　井上柳五郎報

凡夫でも健康という誇り持ち　紫峰
うっすらと化粧して出る葬の列　金吾
ふる里は他国の嫁を買うてくる　吟平
七十の自慢は白い歯で笑い　浄美
物干しの白に炎えてる彼岸花　照路
草一輪挿して独りの秋飾る　青銅
一匹のサンマ家中秋になる　草風
彼岸花真赤に炎えて秋謳う　玉水
五時から男俄然元気に夕暮れる　佐加恵
夕暮れに負けてなるかと曼珠沙華　拓治
夕暮れの風がかなでる狂想曲　美智子
少しまだ男が残っている日暮れ　桃風
夕暮れを一人で帰る負け戦士　健一
淡白な最初の恋に残る悔い　たけ志
最初から風は噂を知っていた　義親
最初から母は嘘だと知っており　秋月
敬老会議員にそんなひまはない　進
木簡に歴史の空白埋められる　哲郎

赤字でもまっ黒になる民営化　中建
黒石を握り会社の隅に活き　鮫虎狼
黒色の雄姿親爺の汽車は消え　博友
憔悴の寡婦の喪服にある色気　柳五郎

むらくも句会　藤井明朗報

満員に人の親切にも出会い　正朗
世話のよさそっくり親と子の気性　芳子
好きだから上手に花をよく咲かせ　秀子
お上手な言葉で釘をさしている　文子
声までもそっくり亡母の歳になり　一葉
健康は親からそっくり貰い受け　林蔵
成人し父そっくりの歩き振り　竹乃
花嫁を見ようと車とり囲む　吉野
いい便り届いてみんなほっとする　武衛
満員の笑顔を運ぶバスの旅　はる代
満員の中にスターの芸のびる　久仁
通信簿母の上手なほめ言葉　ヤス子
便りにも人柄にじむ筆のあと　千里
年寄って姉がそっくり母に似る　福子
やっと来た夏も束の間秋だより　カツ子
夏休み済めば日焼けの顔揃い　八重子
宿題はいつも追い込み夏休み　さくら
すぐ風が立ち夏ばてをいやされる　ふさえ
明暗を分けて球児の夏は去る　節江
笛の音にいにしえの彩日本の美　寿
笛の音にお祭り好きが浮かれだす　昭子
満員ですりや痴漢の目が動く　巡歩
超満員まだ押し込める自由席　義良
いやな事忘れることにするも知恵　ゆき子
ゲートボールするに程よい曲り腰　峰雪
頼まれていやとは言えぬ腰を上げ　梅園

安木節どじょうも笑う腰のふり　三津江
若い時の無理がたたって腰曲る　よし美
今そこに置いて忘れる歳となる　ふみ女
野球戦勝負つく迄腰上げぬ　克子
もの腰が低く見事に当選し　蚊声
痛む腰忘れ楽しい詩の会　幸子
いやな事忘れ余生へ丸く生き　明朗

駒つなぎ川柳会　里　**小路報**

手さぐりに風も師匠の声となる　美津枝
変調を肌で感じていたけもの　庸佑
渋ちんで高名馳せる長い塀　憲太郎
脇役の渋さが目立ついぶし銀　新造
保護室の笑顔迷い児の親が知れ　覚然坊
保護車からワールドサファリ見て廻り　幸治
酸欠の街から逃げる切符買う　国公
酸欠か蟬も悲しい声で鳴き　善信
お隣のピアノ手さぐりしてるよう　潔
変調がナウいアメリカ村を行く　柳右子
あばら骨また古傷が目を醒ます　章
ちと渋い田舎料理にある温み　萬的
らしからぬ教師のなんと渋い喉　翠公
誰に保護されて居るのか暴走車　悟郎
問題が起きて過保護を口にする　勝美
大あくび酸素が少しうすい部屋　素灯
手さぐりの部屋で人形の大きな目　アキラ
アメダスの調子おかしい戻り梅雨　壮之助
渋いのは後に廻して奉賀帳　しんじ
渋い茶が出て古い硯を買わされる　作二郎
保護者たち先生だけに押しつける　喜代治
水面で酸素ねだっている金魚　文秋
酸欠の街へ小さな木を植える　英一
手さぐりの闇であしたが見えてくる　美幸
変調もありがたく聞く祝唄　頂留子
耳の痛いはなし聞いてる渋いお茶　浩一郎
税務署に保護されている坊主医者　射月芳
変調は困るしっかりメシを食う　重人
征服した山の酸素がうすくなる　雀踊子
真っ昼間手さぐりしてるコンタクト　度
中年の坂で歯車軋み出す　甘平
缶ジュースかと思たら酸素吸うてはる　柳宏子
保護のない巨木今日も倒される　東雲
花街の母に抜けない渋好み　柳伸
酸欠を知らぬ女のかしましい　小路

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

皆勤が出来そう秋の風に言う　曲ん手
鶏頭が毎年位置に咲く塔頭　圭坊
鈴虫の鳴き声ききつ床につく　典子
物干しで主人のふとんよう叩き　しげお
少年の瞳は澄み嘘はひっこめる　勝
話題外れ写楽の迷いのあれやこれ　洋子
ショッピングカー魚も野菜も連れ去られ　房子
仲直りうながすような丸い月　よし子
セミのなきがら埋め少年の夏終る　きく子
ビヤガーデン初秋の月と乾杯す　とく子
佗住まい渡る世間に情を知る　登代子
日本のテレビでソウルの月を見る　博史
減反の稲穂を渡る風の息　晴治
橋渡る父は一途な杖を持ち　俊子
土砂降りをどう避けたのか蟬の声　英子
ぬすみ聞く母は小芋をむきながら　富子
澄んだ瞳が無実の証し揺ぎなし　隆
月蒼し翔んでみようよ千羽鶴　露児
ロマンスを生むこと好きなお月様　登志実
病院に通う歩道橋の長いこと　杜的
悪口になった話題に茶がさめる　つゑ子
夜明け迄哀調狂わす八尾盆　明吉
明日又悩むことにし寝てしまう　寿美子
渡り切る橋で雑音耳にする　明光
輪をかいて親子で巣立つ渡り鳥　慶子
秋といえば煙出ている火葬場　花村

聴障川柳　稲田　豊作報

上があり下あり我が家中どころ　豊作
孫の旅地図の上迫う老い二人　たみ
こみ上げてくる幸せに夫が居て　三香
極上の卓にラーメン若夫婦　柳香
上機嫌儲け話へ酌みこぼし　珍顔
上役に名前知られた隠し芸　文古
にが虫の上司も笑う一升ビン　八恵子
広告の上に商品あぐらかき　和江
上役に目をかけられる果報者　一晄
ビルの上から海まで行かずすむ自殺　進一
先生と呼べどまだその上がある　鉄火
嫁選び年は上でも若々し　みつる
長尻の客なかなかに尻上げず　美乃留
人の世は上に上あり下に下あり　健太郎

翠洋会　中西兼治郎報

ハイキングみどりの露にぬれて行く　兼治郎
お葬式花屋の好きな白い菊　絹子
ばら色の恋は思案のほかの色　英一
色白き喪服の女が忘られず　恭昌
白雲の浮ぶ気配に秋を見る　すすむ
クンパルシーター今を人気のタンゴ調　文子
しずかなる情熱枯葉色の恋　さと美

歌は下手可愛い顔に人気ある　東　雲
栗と柿素通り出来ぬかごを持ち　美津枝
赤い服執着するのは齢のせい　万　里
大津絵に馴染の女を重ねけり　良　江
こんな赤い夕陽が沈むビルの屋根　春　子
青の時代ピカソの心境わかりかけ　君　子
衿足の白さ喪服の色にそう　為　子
研究所人気商品やっと出来　綾　子
柿熟れて父は出稼ぎ仕度する　楓　楽
理想より人気できめる勤務先　光　子
秋の肌亡母の着物がよく馴染む　みつ子
お好みの色で性格わかるらし　登志実
秋風が連れてかえった赤とんぼ　いつを
甘い柿ばかりではない秋の色　鬼　遊

川柳はびきの　塩満

夜を飾る花火わたしも宙に舞う　**敏報**
牛若の笛聞えそう杉木立　みつ子
原爆のいやな八月過去が来る　一　枝
紀ノ川の夜店なつかし河川敷　(隅)義　一
砂袋生涯誇りにする球児　淑　子
土用だけ鰻でいたくないうなぎ　たけし
出る釘でいつもの癖が悔まれる　伴　子
風鈴が鳴ると男が帰るころ　繁　男
マネキンのようにはいかぬ腰の線　阿　衣
ぶどう狩り食べほうだいに誘われる　隆
炎天下仕事のウサへ嘘もまぜ　キミ子
幸せな夫婦に出来る口喧嘩　忠　宏
教典に人命救助を入れ忘れ　与呂志
瀬戸大橋渡るに惜しい雨景色　かつみ
確実に要所を衝いてくる老化　利　武
盆帰省向う三軒両隣　シメ子
矢印がここで消えてる曲り角　トミ子
追憶の夢が脹らむ流れ雲　重　人
体型を言わず熟女のレオタード　昇
命ある限り老後の軍資金　絢　子
しがらみを切って女の意地通す　敦　子
スタイルに若さ溢れる胸のゆれ　ケイ子
大根もスタイル良いのを買ってくる　葉　子
仁丹は遺産とケチの名を残す　順　子
赤とんぼ空より秋が押しよせる　健　三
疑いへ切って見せたい胸の内　悦　子
流行のスーツ着たくてダイエット　泰　子
同じ絵がなかなか画けぬ夫婦箸　志　洋
指切りへいつも裏切るのは小指　吐　来
夏たのし老いても高校野球熱　比沙胡
ちょぼちょぼの口論と知り席外す　蛙　声
流木に聞いた哀しいものがたり　希代司
海女だけで終らせたくない八等身　一　屯
あの顔で舌先三寸人を切り　(石)義　一
ハイレグの水着スタイル陽をはじく　美津子
切る花の痛みを思う花鋏　淳　一
ちょぼちょぼの利益をねらう消費税　敏

八尾公民館川柳教室　高杉　鬼遊報

紐一つ楽しく遊ぶ二度わらし　登　喜
のびちぢみすべて知ってるズボン紐　泰　成
人生はからみ合う紐ほどく紐　孝　子
ゴム紐の押売りくんはもう来ない　英　一
人生も二人三脚妻がいる　友　一
紅白の紐は中身を楽しませ　は　る
からみ紐解かねば眠れそうにない　公　子
財布の紐なさけに弱くすぐ緩む　龍　襄
綾取りの上手な孫に教えられ　トシエ
孫と祖母あやとり紐にたわむれる　市　子
結び目がとけて素直に嫁姑　初　子
部屋中に紐で物干す雨つづき　百　子
子の転勤なかなか切れぬ胸の紐　道　子
あやとりを覚えて帰る夏休み　春　子
荷造りの紐も捨てずに物がふえ　幸　枝
また肥えた腰にくい込むゴムの紐　恵以子
紐眼鏡くびにあるのに大探し　君　江
金平糖袋の紐の色で買い　そ　の
靴の紐も結べず熟をふたつみつ　弘　直
ゆるめたり締めたり夫とつなぐ紐　シマ子
からまった紐がほどけず疳の虫　知佐子
捨てに行く猫がじゃれてる箱の紐　章
間違わぬ様にと赤い紐をつけ　信　一
宅配の紐をほどくは孫の役　ふみ子
男一匹おんなの紐になりさがり　久美子

川柳ねやがわ　高田　博泉報

思い出が線香花火によみがえる　千鶴子
円高に休暇が絡む兎小屋　頓　坊
大輪に咲いてくらげと化す花火　菜　月
中年が休暇願いをそっと出し　藍　月
結局は妻の手に乗る連休日　創　吾
ひと夏の恋の別れの遠花火　光　子
昼の酒鳴りを静めて猫といる　曲ん手
それ程にビールが減ってない休暇　まさお
自分用にも一日取って夏期休暇　シマ子
アロハシャツ夏の休暇をのし歩く　おさむ
昼寝させて保母それぞれに用がある　鉱　平
退職後土・日やっぱりホッとする　君　子
打上げる花火亡母さん見えますか　紀　代
肝臓よ休暇を取ってくれたまえ　よしひろ

黒板の達筆消すのが惜しいよう　勇太
野仏へ昼餉を分けるハイキング　一鬼
娘の浴衣花火に映える夏まつり　波留吉
テレビ見てゴロ寝で休暇すみました　時子
勤務より休暇がつらい子沢山　えいめい
建前で話して距離は縮まらず　庸佑
灯を消して神も仏も寝てもらい　雅文
縁日で天狗の面を孫に買う　白水
病室で患者に暑さねぎらわれ　節子
歩くのも日課のひとつ夏帽子　時弘
消しゴムが丸くなる程過去を持つ　なつめ
旅先の線香花火で深手負い　一芳
男名の標札母子の城守る　三峰
逢えば義父無言で酒をついでくれ　増造
大量休暇与えて会社も節税し　権太
言い足りぬ顔でさよなら言うている　房子
休暇まだ残して夏の風邪をひく　春子
三食付いて金魚も女も昼寝する　良三
ひまわりに負けじと松葉ボタン咲く　一笑
帯きりり締めて男を消すいくさ　速水
束の間のドラマ花火となって燃え　頂留子
正義漢ほんとの恋をまだ知らず　あやめ
灯を消してやっと自分が見えて来る　一途
涼しすぎお風邪を召した仏様　かすみ
門限があるから塀をよじのぼる　てまり
いつからか馬鹿になる知恵冴えてくる　静江
捻挫して動けぬ妻が指図する　三郎
盆休み妻もやっぱり疲れてる　博泉
落書きを消す掃除婦の目がきれい　亜成
好きな人出来て過去も消えていき　亜也子
ひと夏の恋は花火に似て開く　吉之助

用を足す雑草があり安堵する　礫
設計図脳から消しておく休暇　度
可愛さの消えた女で貯めている　小路
盆休暇待てずに妻は里へゆき　あいき
老夫婦仕事のように昼寝する　敬山
灯を消して遠い昔の仏たち　静歩
無造作に息をしているだけのこと　亜鈍

川柳たけはら　森井　菁居報

ありんこがめいろあそびをしているよ　幼典之
みやじまのしかがわたしのてをなめた　小一歩美
くものうえいちどはのってみたいです　小一千枝
七夕にでかい願いを下げようか　小二孝永
ピアノひいて少しは女の子らしく　小三史子
来年も水えい大会がんばるぞ　小三昌之
夏休み勉強ばかりしんどいな　小四裕次郎
お願いをすれば駄目とは言わぬ父　小四孝弘
大すきなアイスクリーム食べても暑い夏　小五晶美
夏休み宿題たくさんたまりすぎ　小五晴美
入道雲わたがしみたいおいしそう　小五慶子
大好きなお友達達がいて幸せよ　小五視幸
サッカー部真夏の練習苦しいな　小六由博
姉ちゃんが父に自転車ねだってる　中三亜貴子
高一が髭を剃るのを見てしまう　菁居
ふるさとへ大渋滞の中にいる　蘭幸
以心伝心妻そうめんをゆでている　静水
こんこんと湧き出る水で足洗う　雪子
枕辺の句集私をねむらせぬ　喜美子
寝転んで風が丸ごと吹き抜ける　八重美
内緒などちゃん見てるぞ額の亡父　千年枝
夏休み見上げる孫を待つ老いか　トシ江
欲得もなくて睡魔と妥協する　静佳

茄子の花亡父の面影ふと想う　勲
法話聞きつかのまだけの安らぎよ　君枝
手間損と言って明治は針を持つ　喜久恵
正座して母の言葉を聞いている　浪子
叱られる頃が良かった一人居る　千恵
父さんが買った分だけよく覚え　光子
それからは叱る言葉に迷う父母　愛子
大漁旗掲げて帰る朝の市　俊夫
清々し朝の法座の風もらう　麻代
孫三人個性それぞれ笑わせる　清水
新しい鏡に過去は写すまい　ふさ枝
スカートの裾に掟がぶらさがり　静風
新盆会歳の順にはいかぬもの　房子
ラッキョぱりぱりアア母の味　静火
路地の風一汗乾く立ち話　ヤスエ
さわやかな風でありたい母の夏　令子
以下余白そんな台本いただいて　比呂子
夏の陽に負けてしまった赤いバラ　淑子
星が見える明日の青空信じよう　政己
一人乗るボート二人を越してゆく　一路
湯の音もうれし少女の目にかえる　笑子
子に生を教えてかぶと虫放す　白狐
コンピューターのしっぺ返しはきっとある　節夫
人間に逢いたくなって乗る電車　博子
胸の穴オーストラリアで埋まるかな　康子
生活のリズムを変えて無職なり　笹舟
働けぬふたりわがまま同士なり　貞子
ロープまだ握れぬ指で海を恋う　美佐雄
ふるさとにふるさと匂う昼の風呂　観杏
聖職まで汚れて何を信じよう　シゲヨ
平和な日ペットフードがよく売れる　新造

寝屋川市民川柳大会

とき **昭和63年11月3日**（祝）
開場　12時30分　締切13時30分

ところ 寝屋川市立総合センター4階
（京阪寝屋川市駅より京阪バス②乗場から総合センター前下車すぐ）

おはなし 芥川賞候補作家「岡田某人」
について　黒川　紫香氏

兼題
「パート」　小出　智子選
「渡　る」　米田　鉱平選
「眠る」　里　小路選
「虫」　高村吉之助選
「艶」　志水浩一郎選
「歯　車」　西田柳宏子選
「印　象」　橘高　薫風選

席題 今回に限りありません

出句 各題とも二句まで

会費 七〇〇円（入選句集代含む）
各題の秀句には選者色紙と賞品を差し上げます。

主催　寝屋川市川柳協会
後援　川柳ねやがわ

第35回八尾市文化祭
八尾市民川柳大会

とき **昭和63年11月20日**（日）正午開場

締切 午後1時30分
（兼席とも各題2句以内）

ところ 八尾市文化会館4階第1会議室
近鉄大阪線八尾駅下車北側
西武百貨店東隣

題と選者
席題　当日発表　岩内　外吉選
芝居　河内　天笑選
表　奥山　晴生選
新しい　野村太茂津選
オープン　永田　帆船選
あたま　中田たつお選
家族　西尾　栞選

会費 一、〇〇〇円（呈作品集・鉢植花）

懇親会 三、〇〇〇円
（希望者のみ当日受付）

（連絡先）〒581
八尾市中田2丁目302　高杉鬼遊
電話0729(98)0928

主催　八尾市教育委員会
　　八尾市立公民館
後援　八尾市立公民館川柳教室

第30回
豊中市民川柳大会

とき **昭和63年11月23日**（祝）
正午開場　締切午後1時30分

ところ 豊中市立中央公民館1階ホール
阪急宝塚線曽根駅東200メートル

会費 1、000円　記念品・発表紙呈

あいさつ 豊中川柳会長　永田　帆船氏

祝辞 中央公民館長　川西　秀夫氏

講話 川柳塔社副理事長　西田柳宏子氏

席題（当日発表）　友田茶の子選

宿題
「微　笑」　一階八斗醸選
「電　話」　西川　景子選
「愛」　西出　楓楽選
「本」　尾谷　清風選
「風」　梶川雄次郎選
「夢」　高杉　鬼遊選
「芸」　住田英比古選
各題2句

豊中市長賞ほか各題に賞・副賞　贈呈

主催　豊中川柳会
後援　豊中市

11月各地句会案内

	日／時及び題	会場と投句先
尼崎 いくしま	4日(金) 午後1時より 眼・散る・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
堺川柳会	6日(日) 午後1時より 明細・面接・目立つ・めし	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2－9－2 河内天笑
八尾市民 川柳会	10日(木) 夕6時より 舞台・はずむ・道・町	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2－141 飯田悦郎
川柳塔 まつえ	12日(土) 午後1時半より 神様・悪筆・冬仕度	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松叮紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川柳 わかやま	13日(日) 午後1時より 底・急ぐ・編む	和歌山市岡山町 児童婦人会館 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
西宮北口	14日(月) 午後1時より 練る・古書・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手4枚
南海電鉄 川柳部	17日(木) 夕6時より 席・ペット・遺伝	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒545 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株) (川柳部) 用地管理部管理課 廣井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木) 午後1時より 裏・塩・楽しみ・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市宮田町3－8－8 川島諷云児 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚) 各題2句
南大阪 川柳会	19日(土) 夕6時より 言いぐさ・疑惑・自慢・乳房	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
もくせい 川柳会	21日(月) 午後1時より 木・脱ぐ・そわそわ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801 田中正坊
川柳 東大阪	26日(土) 夕6時より 涙・長い・反対・ずるい	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5－6－23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川柳会	28日(月) 夕6時より 終点・昔・聞きわけ・ちぐはぐ	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸

※川柳ねやがわと富柳会は市民川柳大会のため
今月の例会はお休みです。

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円 (郵券可)、各題3句以内

原稿送り先 (〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)
〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

本社11月句会

日時 十一月七日（月）午後六時
会場 メンズファッションセンター3階
東区内本町1―1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角

おはなし 高杉鬼遊
兼題「蓋」春城年代選
「煉瓦」榎本吐来選
「奪う」高須賀金太選
「紅」板尾岳人選
席題 二題 当日発表 **各題三句以内厳守**
会費 五百円

★投句は柳箋（4cm×19cm）に一葉一句。
各葉毎に裏面に必ず**氏名明記**。
投句料 **300円**（60円切手5枚）同封のこと。

川柳塔社

12月の兼題「渡る」「伝聞」「賑やか」「嫁」

12月の本社句会は7日（水）

『夜市川柳』募集

第6回「舟」 小出智子選
3句・締切 11月末日
第7回「寿」 里小路選
締切 12月末日
投句先 〒593 堺市堀上緑町2―9―2
河内天笑方
堺川柳会

●募集●

一月号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
茴香の花（3句・女性）小出智子選
課題吟（5句）
「誓い」恒松叮紅選
「待つ」樫谷寿馬選
「敵」越智一水選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
茴香の花（3句・女性）小出智子選
課題吟（5句）
「枝」上田翠光選
「唇」川崎秋女選
「舞う」真喜内實選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友を限らず。

11月の常任理事会は1日（火）

定価 五百円（送料50円）
半年分 **三千二百円**（送料共）
一年分 **六千三百円**（送料共）
昭和六十三年十月二十五日印刷
昭和六十三年十一月一日発行
編集兼発行人 西尾巌
印刷所 藤原童心社
〒545 大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 **川柳塔社**
電話（六六六）六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

＝編集後記＝

六天皇陛下のご容態を憂慮申し上げていると、オリンピックの華やかさに画面が切り換わる。陛下のお好きな大相撲が終り、スペースシャトルが無事に帰還したが、今年の長雨はまだすっきりとしない。白秋という感じのちっともしないうちに十月の上旬が過ぎる。

今月号は、川村好郎追悼号である。羽曳野病院で川柳指導を続けられたが、時には出席者が一人の日もあったという。酔々・鬼遊・史好の編集三羽烏も、その川柳会のOBである。金光教の信者だったことから、たましま川柳会の指導も長らく担当されていた。今月二十日に三十周年の大会が開かれるのも奇しき縁であろう。

時を同じうして谷垣史好さんが編集から手を引かれることになった。網膜剥離の一歩手前だそうで、充分休養の上、早く再登場して頂きたい。不二田一三夫さんが倒れられた時、一緒にお伺いして編集の引き継ぎをしたが、奥さんがコカ・コーラと間違われて一三夫さん用の苦い薬を出された思い出も鮮やかだ。

第三回日中友好の旅は、多くの収穫を得て無事に帰国された。西安で川柳塔社の存在をアピールして頂けたとのこと、団長の田中正坊、副団長の春城武庫坊両氏ほか、参加の皆さんにお礼を申し述べます。奈良市長のメッセージをお世話願った宮口笛生さんに深謝。

別項にて発表の通り、心斎橋筋の中心地、元の川柳塔社に近いソニータワーのサロンで麻生路郎生誕百年の記念の作品と資料展を開催する。大方のご支援、殊に若者向きへのアイデアをお寄せ下さい。

来年は西尾栞主幹の傘寿の年、おめでたい催しが予測されます。

すでに来年のことに触れる時期になりました。同人が整っているとは思えない。医療費が増えたのは何も老人たちのセイではない。医学が進み問診よりも検査データに頼り、高度な器械の使用によるからではないか。高い薬の多用や、素人目にも高額な医療器械は、病院の格好や飾りではない。リースにしても月賦にしても償却してゆかねばならない。その利用は病人の申し出によるのではなく、病院側の一方的な判断によっている。保険料を上げることだけが厚生省の仕事だと思いたくない。医療機関にどんな負い目があるのか知れないが、どうも弱い者いじめをして困る。

“ひと言”が多うても足らぬでも困り”好郎　き

天皇陛下のご容体に関する宮内庁発表をテレビ、新聞で日毎夜毎、見ているうちに、ある日、突然、戦時中の“大本営発表”を思い起こした。以来、いかなる発表も、素直に信じ難く、まずは疑ってかかるという、まことに困った状態に陥ってしまった。

絶対安静の陛下が一時間半テレビをご覧になった。そんことを聞くと、私のこの単純な連想はますます正当なもののように思え、それほど信用できないなら無視すればいいものを、やはり気になり、テレビ、ラジオにかじりついているのだから全く世話はない。

それにしても九月十九日以来の、この国の集団ヒステリー的な社会状況は、どう考えたらいいのだろう。

一九八四年PHP文庫から出た『日本の自殺』は私に目から鱗の落ちる思いをさせた本だが、この中で警告されている情報汚染の放射能の恐るべき破壊力を、改めて思い知らされた感じである。

さて、このたび健康上の理由で、この十一月号から私の仕事を田中正坊氏にバトンタッチした。したがって後記も今回が最後である。五十六年一月号からじ年余貴重な頁を駄文で汚したことになる。寛大なるお気持で読んで下さった同人・誌友の皆さん、ありがとうございました。　史

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和六十三年十月二十五日　印刷
昭和六十三年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七三八号　川柳塔　十一月号
定価　五百円（送料　五十円）

KIRIN
21世紀へ乾杯
本格派。
旨さの辛口。
アルコール度数高め
キリッとしまるドライ。
キリンビール株式会社
キリンドライ
標準的な売価は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。

ボリュームたっぷり　スタミナ満点!!
豚饅・焼売・焼餃子
551 HORAI
OSAKA NAMBA 蓬莱 HORAI CO.,LTD.
なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ
551 HORAI
ほうらい
蓬莱
TEL641-0551

雑誌　05703－11